朝河貫一博士

―没後70年記念シンポジウム―

講演録

◆ 日　時 ◆

2018年10月20日（土）

13：00～ シンポジウム ／ 19：00～ レセプション

◆ 主　催 ◆

公益財団法人　国際文化会館

朝河貫一博士没後70年記念プロジェクト実行委員会

◆ 場　所 ◆

国際文化会館（東京都港区六本木5-11-16）

シンポジウム：岩崎小彌太記念ホール

レセプション：樺山・松本ルーム

写真：二本松市教育委員会所蔵

この講演録のPDF版および電子書籍版（EPUB形式）は、以下のURLから無料でダウンロードできます。
https://www.i-house.or.jp/programs/publications/reports/

目　次

2 | 朝河貫一博士プロフィール
3 | プログラム
4 | 登壇者プロフィール
8 | Summary

13 | **主催者挨拶**　明石　康　国際文化会館理事長

朝河貫一の生き様

16 | **朝河貫一の晩年とその遺産**
矢吹　晋　横浜市立大学名誉教授
24 | **世界、日本、そして朝河貫一**
浜田宏一　イェール大学名誉教授
28 | **朝河貫一の史料収集と人文科学の意義**
Daniel Botsman　イェール大学教授
42 | **朝河貫一：天皇制民主主義の学問的起源**
山内晴子　朝河貫一研究会理事

講　演

64 | **講演１　日本と今後の東アジア――なかんずく中国との関係について**
高原明生　東京大学公共政策大学院 院長
74 | **講演２　希望を諦めないリアリスト**
Frances McCall Rosenbluth　イェール大学教授
90 | **講演３　今日の日米関係を朝河先生はどう見るか**
加藤良三　元駐米大使

パネルディスカッション

98 | **第一部　今、なぜ朝河貫一か**
司会者：船橋洋一　アジア・パシフィック・イニシアティブ理事長
ディスカッサント：玄葉光一郎　衆議院議員、元外務大臣
黒川　清　政策研究大学院大学名誉教授
田中明彦　政策研究大学院大学学長

122 | **第二部　新しい太平洋時代――次世代に繋ぐ希望**
司会者：渡部恒雄　笹川平和財団上席研究員
ディスカッサント：阿川尚之　同志社大学特別客員教授、慶應義塾大学名誉教授
瀬口清之　キヤノングローバル戦略研究所研究主幹
秋田浩之　日本経済新聞社編集局コメンテーター

朝河貫一博士
プロフィール

朝河貫一博士は、1873 年旧二本松藩士朝河正澄の長男として、二本松で生まれた。戊辰戦争の戦禍冷めやらぬ中、父正澄は小学校教員を務めつつ、貫一に武士道精神、論語、四書五経、日本外史などを厳しく教えた。小学校高等科で英語を学ぶ機会を得た貫一は、福島尋常中学校（後の安積高等学校）に入学、英国人教師ハリファックスに出会い本格的な英語教育を受け、外国への夢を膨らませる。英英辞典を毎日 2 ページずつ暗記、暗記したページは食べてしまい、最後に残ったカバーを校庭の桜の根元に埋めたという（朝河桜として今も残る）。卒業式では英語で答辞を述べ、参列者を驚嘆させた。

1892 年東京専門学校（後の早稲田大学）に入学。そこで本郷教会牧師の横井時雄に出会い、洗礼を受けキリスト教徒となる。更に横井の橋渡しで、ダートマス大学のウィリアム・タッカー学長から留学許可と学費等免除のオファーが届く。坪内逍遥、大西祝の薫陶を受けた東京専門学校文学科を首席で卒業するも、渡米費用の目途がつかず途方に暮れる朝河に資金を援助したのは、徳富蘇峰、大隈重信、勝海舟、大西祝、そして故郷の友人らであった。

1896 年ダートマス大学に入学、タッカー学長から「民主主義」の神髄を学ぶ。朝河の優秀さを認めたタッカーに大学院進学を促され、イェール大学大学院歴史学科に入学、博士号を取得し『大化改新』を出版する。

その間、国際情勢、日本を取り巻く状況は刻々と変化し、1904 年日露戦争が勃発。朝河は米英両国で『日露衝突』を発刊、日本は帝国主義ロシアに対抗し米英と同じく 2 大原則（中国の領土保全と貿易の機会均等）を守るために戦っていると、日本の正当性を訴え大きな共感を得る。ポーツマス講和会議に際しては、朝河をよく知るイェール大学の 3 学者によるイェール・シンポジウムが条約の土台となった。開催中、朝河は代表団と同じホテルに滞在しその推移を見守った。

日露戦争後、農場経営者の娘ミリアムと結婚（8 年後死別）。1906 年、渡米後初めて帰国した。その 10 年後 2 回目の帰国をし（最後の帰国となる）、鹿児島の「入来院文書」を調査、その成果を踏まえ 10 年の歳月をかけ研究し、日欧比較法制史上の画期的業績である『入来文書』を米英で出版する（1929）。その後イェール大学歴史学教授に就任（1937）、日本人で初めてアメリカ著名大学の正教授となった。

一方、日本がロシアになり代わり大陸に進出するのに伴い、米国の日本を見る目は急変していく。朝河は日本の行く末を憂い 1909 年日本語の唯一の著書『日本の禍機』を著し、「日本がここで進路をあやまれば、世界で道義を失った国として孤立し米国と対立、日米戦争になれば必ず日本は負ける。」と強く警告する。桂首相、外務大臣ほか政治家、主な新聞社、学者、図書館などにも寄贈され、伊藤博文がハルピンで暗殺された際その懐中には『日本の禍機』があったという。

朝河の警鐘にもかかわらず、その後の日本はまさに朝河が恐れていたとおりの道を突き進む。韓国を併合し、第一次世界大戦が始まると極東のドイツ権益を奪い中国に二十一か条要求を突きつける。時の首相は大恩人大隈重信であり、朝河は祖国の前途を憂い必死で対外政策の変更を訴えるが、大隈が動くことはなかった。その後日本の大陸進出はますます拡大、朝河は世界の孤児と化す日本を何とか救わんと、徳富蘇峰、大久保利武、鳩山一郎、金子堅太郎ほか要人に宛て海外から見た日本の危機的状況を繰り返し警告するものの、日本は軍部に支配され「大東亜共栄圏」建設に向け暴走していく。

朝河は深い歴史理解に伴う洞察力で、ヒトラーの自殺を予言し（1939）、三国同盟を「有史以来の大誤失」と断じる。太平洋戦争前夜には何としても開戦を回避せんと、ラングドン・ウォーナー（ハーバード大学フォッグ美術館東洋部長）の提案により、ルーズヴェルト大統領から昭和天皇に宛てた「大統領親書」草案を執筆する。書き上げた草案は、ウォーナーを通じホワイトハウスに届き一部実際の親書に使われるも、昭和天皇に届けられたのは真珠湾攻撃隊が発進した後であった。

日米開戦で多くの在米日本人が収容所に送られる中、朝河には従来通り行動と研究の自由が認められた。日本爆撃における文化財保護担当であったウォーナーが保護すべき文化財等のリストを作成する際には多くの助言を与え、貴重な文化財を戦火による焼失から救ったとされる。更に「象徴天皇制」など戦後の日本の戦後処理構想にも大きな影響を与えた。

その後朝河は、日本人の国民性の欠点とその克服について説くと共に、将来日本が世界に役立つ国になることを願いながら、1948 年夏バーモント州の山荘にて静かに 74 歳の生涯を閉じた。

写真：福島県立図書館所蔵

プログラム

◆ シンポジウム ◆

総合司会：植木千可子（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）

13：00〜13：10	主催者挨拶	明石 康（国際文化会館理事長）

朝河貫一の生き様

13：10〜14：10	朝河貫一の晩年とその遺産	矢吹 晋（横浜市立大学名誉教授）
	世界、日本、そして朝河貫一	浜田宏一（イェール大学名誉教授）
	朝河貫一の史料収集と人文科学の意義	Daniel Botsman（イェール大学教授）
	朝河貫一：天皇制民主主義の学問的起源	山内晴子（朝河貫一研究会理事）

休憩 10 分

講　演

14：20〜15：35	講演1　日本と今後の東アジア――なかんずく中国との関係について	高原明生（東京大学公共政策大学院 院長）
	講演2　希望を諦めないリアリスト	Frances McCall Rosenbluth（イェール大学教授）
	講演3　今日の日米関係を朝河先生はどう見るか	加藤良三（元駐米大使）

休憩 25 分　　コーヒー・ブレイク　朝河貫一博士映像上映

パネルディスカッション

16：00〜17：20	第一部　今、なぜ朝河貫一か	
	司会者：	船橋洋一（アジア・パシフィック・イニシアティブ理事長）
	ディスカッサント：	玄葉光一郎（衆議院議員、元外務大臣）
		黒川　清（政策研究大学院大学名誉教授）
		田中明彦（政策研究大学院大学学長）

休憩 10 分

17：30〜18：50	第二部　新しい太平洋時代――次世代に繋ぐ希望	
	司会者：	渡部恒雄（笹川平和財団上席研究員）
	ディスカッサント：	阿川尚之（同志社大学特別客員教授、慶應義塾大学名誉教授）
		瀬口清之（キヤノングローバル戦略研究所研究主幹）
		秋田浩之（日本経済新聞社編集局コメンテーター）

◆ レセプション ◆

19：00〜20：00頃	主催者挨拶	安齋　隆（セブン銀行特別顧問）
	来賓挨拶	松尾文夫（ジャーナリスト）
	乾　杯	古川　清（元宮内庁東宮大夫、朝河貫一博士顕彰協会会長）
	中締め	石井　茂（ソニーフィナンシャルホールディングス株式会社代表取締役社長）

登壇者
プロフィール

植木 千可子 (うえき ちかこ)

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

[略 歴]
上智大学外国語学部卒、同大学院修士、マサチューセッツ工科大学 Ph.D. (政治学)。
朝日新聞記者、北京大学国際関係研究所客員研究員、防衛省防衛研究所主任研究官などを経て現職。
専門は国際関係と安全保障。著書に『平和のための戦争論』など。

明石 康 (あかし やすし)

国際文化会館理事長

[略 歴]
1931 年生まれ。秋田県出身。1954 年東京大学教養学部アメリカ学科卒業。
フルブライト留学生として渡米し、バージニア大学大学院修了、コロンビア大学で学ぶ。
タフツ大学フレッチャースクール博士課程在学中に、日本人として初めて国連職員に採用。
1992 年国連カンボジア暫定統治機構事務総長特別代表に就任。
1994 年旧ユーゴスラビア問題・事務総長特別代表に就任。
1997 年国連退任。2009 年国際文化会館理事長に就任。

矢吹 晋 (やぶき すすむ)

横浜市立大学名誉教授

[略 歴]
1938 年福島県生まれ。安積高校卒 (高山樗牛賞)。東京大学経済学部卒。
東洋経済新報社、アジア経済研究所を経て、横浜市立大学教授。
専攻 : 中国経済論、現代中国論。
2004 年横浜市立大学名誉教授。
朝河貫一研究に尽力、関連著書 (含訳書) 多数。

浜田 宏一 (はまだ こういち)

イェール大学名誉教授

[略 歴]
1936 年東京生まれ。東京大学法学部卒、経済学部学士入学し 1960 年卒。
東大大学院を経て、フルブライト奨学生としてイェール大学へ留学、
1965 年 Ph.D. (経済学) 取得 (ジェームス・トービンに師事)。国際金融におけるゲーム理論の応用で業績。
東京大学経済学部教授を経て、1986 年イェール大学経済学部教授。2012 年同大名誉教授。
2001 ～ 2003 年内閣府経済社会総合研究所長、
2012 年より内閣官房参与、アベノミクスの立案者の一人といわれる。

Daniel Botsman (ダニエル ボッツマン)

イェール大学教授

[略 歴]
オーストラリア (ブリスベーン) 育ち。幼少から日本語を学ぶ。
オーストラリア国立大学卒 (アジア研究)。
オックスフォード大学 M.A. (経済社会史)、1999 年プリンストン大学 Ph.D. (歴史学)。
北海道大学、ハーバード大学、ノースキャロライナ大学を経て、
現在イェール大学歴史学教授。専門 : 日本史 (1500 年頃から現代まで)。

山内 晴子 (やまうち はるこ)

朝河貫一研究会理事、早稲田大学アジア太平洋研究科センター元特別センター員

[略 歴]
ミレニアム記念に、東洋英和女学院大学院に社会人入学、朝河博士のことを知る。
2002 年修士論文『朝河貫一新論：キリスト教の倫理と日本外交の理念』。
2004 年早稲田大学アジア太平洋研究科に入学、2008 年博士号取得。
2009 年 1 月『朝河貫一論：その学門形成と実践』早稲田大学モノグラフ No.2
2010 年 3 月『朝河貫一論：その学門形成と実践』早稲田大学学術叢書 No.7
を早稲田大学出版部より出版。

高原 明生 (たかはら あきお)

東京大学公共政策大学院院長、東京大学大学院法学政治学研究科教授

[略 歴]
1958 年兵庫県神戸市生まれ。1981 年東京大学法学部卒業。
サセックス大学開発問題研究所にて 1983 年 MPhil、1988 年 DPhil。
2000 年立教大学法学部教授、2005 年東京大学法学部教授。
2018 年東京大学公共政策大学院院長。
専攻：現代中国の政治、東アジアの国際関係。

Frances McCall Rosenbluth (フランシス マッコール ローゼンブルース)

イェール大学教授

[略 歴]
1958 年大阪生まれ。バージニア大学卒業後、コロンビア大学にて M.A.、Ph.D. 取得。
フルブライト奨学生として東京大学に留学。
バージニア大学助教授、カリフォルニア大学ロサンジェルス校准教授を経て、
1994 年イェール大学政治学部教授 (比較政治学)。
専攻：日本政治と政治経済、ジェンダー格差の政治経済、戦争と政治、政党政治。

加藤 良三 (かとう りょうぞう)

元駐米大使

[略 歴]
1941 年生まれ、秋田県出身。東京大学法学部卒、1965 年外務省入省。
イェール大学ロースクール卒業。 駐サンフランシスコ総領事、アジア局長、総合外交政策局長、
外務審議官 (政治担当) などを歴任し、2001 年駐米大使に任命。2008 年退任。

船橋 洋一 (ふなばし よういち)

アジア・パシフィック・イニシアティブ理事長

[略 歴]
1944 年北京市生まれ。東京大学教養学部卒、元朝日新聞社主筆。特派員として北京支局、ワシントン支局に勤務。
2007 年同社主筆に就任。
2011 年、一般財団法人日本再建イニシアティブ (現アジア・パシフィック・イニシアティブ) を設立し理事長に就任。
同シンクタンクにおいて、福島原発事故独立検証委員会を設立しプログラムディレクターに就任。
近年の著書に「カウントダウン・メルトダウン」(文藝春秋)、
「湛山読本−いまこそ、自由主義、再興せよ。」(東洋経済新報社) がある。

玄葉 光一郎 (げんば こういちろう)

衆議院議員、元外務大臣

[略 歴]
1964 年福島県生まれ。福島県立安積高校卒 (朝河博士の母校)。
上智大学法学部卒業後、松下政経塾に入塾。1991 年福島県議会議員に当選。
1993 年総選挙にて衆議院議員に当選。
野田内閣において外務大臣を務める (2011 年 9 月～ 2012 年 12 月)。

黒川 清 (くろかわ きよし)

政策研究大学院大学名誉教授、特定非営利活動法人日本医療政策機構代表理事

[略 歴]
1936 年生まれ。1962 年東京大学医学部卒。
ペンシルベニア大学医学部生化学助手、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校医学部内科準教授・教授を経て、
東京大学に戻り教授就任 (後に名誉教授)。
その後、東海大学に移り医学部学部長や総合医学研究所所長を務める。
専門は内科学、腎臓学、医療政策、科学政策など。
元日本学術会議会長。
2006 年政策研究大学院大学政策研究科教授に就任し、現在同大学名誉教授。
2011 年、国会が設けた東京電力福島原子力発電所事故調査委員会の委員長に任命され、報告書発表。

田中 明彦 (たなか あきひこ)

政策研究大学院大学学長

[略 歴]
1954 年埼玉県生まれ。1977 年東京大学教養学部卒 (国際関係論)。
1981 年マサチューセッツ工科大学政治学部大学院卒 (Ph.D.)。
1990 年東京大学東洋文化研究所助教授、1998 年同教授、2002 年同所長。
2009 年東京大学副学長。
2017 年政策研究大学院大学学長。専門 : 国際政治学。

渡部 恒雄 (わたなべ つねお)

笹川平和財団上席研究員

[略 歴]
1963 年福島県生まれ (父は元衆議院議員の渡部恒三氏)。東北大学歯学部卒。
歯科医師となるが国際政治への情熱を捨てきれず米国留学。
1995 年 New School for Social Research (NY) で政治学修士取得、
ワシントンの CSIS 戦略国際問題研究所に入所し、日本の政党政治、外交安保政策、
日米関係及びアジアの安全保障を研究 (2003 年から上級研究員)。
2005 年帰国、2008 年東京財団に所属。
現在笹川平和財団上席研究員。

阿川 尚之 (あがわ なおゆき)

同志社大学特別客員教授、慶応義塾大学名誉教授

[略 歴]
1951 年東京都生まれ。慶應義塾大学 (法学部政治学科) 在学中にジョージタウン大学留学。
1977 年同大外交学部卒業、ソニー㈱入社。
ジョージタウン大学ロースクール卒業、米国弁護士資格取得。
日米の法律事務所勤務等を経て 1999 年慶応義塾大学総合政策学部教授。
2002 年から 2005 年まで在米国日本大使館広報文化担当公使。
2007 年慶應義塾大学総合政策学部長。
2009 年慶應義塾常任理事。
2016 年同大学名誉教授、同志社大学客員教授。
専門 : 米国憲法史。

瀬口 清之 (せぐち きよゆき)

キヤノングローバル戦略研究所研究主幹

[略 歴]
1982 年東京大学経済学部卒、日本銀行入行。
2004 年米国ランド研究所に派遣。
2006 年北京事務所長。
2009 年キヤノングローバル戦略研究所　研究主幹。
2010 年アジアブリッジ㈱代表取締役。
研究課題 : 中国経済、日米中関係など。

秋田 浩之 (あきた ひろゆき)

日本経済新聞社編集局コメンテーター

[略 歴]
1965 年生まれ。1987 年日本経済新聞社入社 (流通経済部)。
1992 年ボストン大学大学院修了 (国際関係論)。
北京支局、ワシントン支局を経てハーバード大学日米関係プログラム研究員。
編集委員兼論説委員を経て現職。
米中日関係をテーマに 2 つの著作。

Kan'ichi Asakawa: A Commemorative Symposium Marking 70 Years since his Death — A Summary

On the afternoon of the 20th of October 2018, "Kan'ichi Asakawa: A Commemorative Symposium Marking 70 Years since his Death" was held at the International House of Japan in Tokyo on the theme of "Why Kan'ichi Asakawa Now?" The organizers hoped that presenting Asakawa's life and achievements would act as a guide for young people who are the bearers of the future. Chikako Ueki, Professor at the Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University, served as MC throughout the event.

About Kan'ichi Asakawa

Kan'ichi Asakawa lived in the United States while the Japanese people endured the severe times of the Russo-Japanese War, Pacific War, and the post-war period, and was the first Japanese person to become a full professor at Yale University. He was a man of diverse interests and abilities and the roles he played ranged from historian to curator, to scholar of international politics, and achieved tremendous accomplishments in each field.

As a historian, Asakawa is highly regarded in the West for his comparative research of the feudal systems in Japan and Europe and is famous for his research on the Documents of Iriki handed down by the Iriki family of Satsuma.

As a curator at Yale in the pre-war period, he collected Japanese rare books and materials that are now used as the basis of Japanese and East Asian research in the West. In this way, a number of invaluable material that is part of Japan's heritage avoided the fires of the Great Kanto Earthquake and the Pacific War.

Also, as a scholar of international politics and advocator of peace, Asakawa wrote *The Russo-Japanese Conflict: Its Causes and Issues* in English during the Russo-Japanese War, vindicating Japan's position in that conflict. Afterward, however, he witnessed Japan's turnaround which led him in 1909 to write *Nihon no Kaki (Crisis for Japan)* that predicted the Pacific War and sounded warnings to Japan. He continued thereafter, through correspondence with Japanese power-holders, to do all he could to somehow redirect Japan as it became more and more isolated from the rest of the world. In 1941, together with Langdon Warner, Asakawa drafted a personal letter for then-President Roosevelt to send to the Emperor Showa in an attempt to avert the outbreak of war between Japan and the US. In recognition of his meritorious deeds, the Asakawa Garden was created in 2007 within his college at Yale University.

Opening Remarks by the Organizer

The Symposium started with opening remarks by the organizer, Yasushi Akashi, Chairman of International House. He spoke about the significance of discussing the topic, "Why Kan'ichi Asakawa Now?" amidst the complex situation of contemporary Japan, and also conveyed words of appreciation to those who had made the symposium possible.

Proceedings of the Symposium

In the first half of the symposium, a picture of Kan'ichi Asakawa unfolded as the audience was introduced to the viewpoints of notable figures and scholars in various fields who each held Asakawa in high regard. They were all greatly influenced by his life and work. Each speaker revealed detailed aspects of Asakawa's life and

achievements and gave the audience a sense of his personality and charm that are not generally known.

During the panel discussions in the second half of the symposium, panelists and the audience explored through the lens of Asakawa's remarkable viewpoints and ideas, how to understand the volatility of modern international society, and what directions Japan should take in the near future.

Presentations on Kan'ichi Asakawa's Life

Four scholars gave presentations on the theme of "Kan'ichi Asakawa's Life" in order to deepen our understanding of Asakawa.

First to appear was Susumu Yabuki, Emeritus Professor of Yokohama City University, whose presentation title was "Kan'ichi Asakawa's Last Years and Their Legacy." Professor Yabuki began with the episode of constructing the Asakawa Garden in a corner of Saybrook College in 2007, and then looked back at his life's journey through stories relayed from individuals with close connections to him.

Next was a presentation entitled "World, Japan, and Kan'ichi Asakawa" by Koichi Hamada, Emeritus Professor of Yale University. While Japan, America, and China vie geopolitically in present times, Professor Hamada suggested which direction Asakawa might counsel us to take and how that path links to forming new world values.

The third speaker was Daniel Botsman, Yale University Professor whose title was "Kan'ichi Asakawa's Historical Material Collection and its Significance for the Humanities." He introduced the Kan'ichi Asakawa Collection bequeathed to Yale University. One highlight of the presentation was Professor Botsman's story of finding Asakawa's and Langdon Warner's letters between the pages of an old book he happened to purchase on the Internet.

Lastly, Haruko Yamauchi, Board Member of the Kan'ichi Asakawa Research Society, spoke on "Kan'ichi Asakawa: Academic Origins of Imperial Democracy." She explained in greater detail the secret of how Asakawa managed to persuade President Roosevelt to send a personal letter to the Emperor Showa. A number of the materials she examined were used to discover the background of Asakawa's publications.

The question and answer session following these presentations included questions and comments from Kensuke Okoshi from NHK (Japan Broadcasting Corporation), and Kenji Kanetaka, who directed the documentary film, *Warner's List*.

Lectures on Asakawa and the Current World Order

Three experts offered their views on Japan's position in the world today, Japan-US-China relations, and other issues, all in relation to the work of Asakawa.

The first speaker was Akio Takahara, Dean of the Graduate School of Public Policy, University of Tokyo. Entitled "Japan and the Future of East Asia: Focusing on Japan's Relations with China", his lecture analyzed the China of today as well as that of the future. He explained how Japan should engage with China from hereon to maintain order in the region.

Yale University Professor Frances McCall Rosenbluth gave a lecture on "Kan'ichi Asakawa: Hopeful Realist 1873–1947" in which she analyzed how Asakawa perceived international systems, domestic politics and political leaders with his unique understanding of the age he lived in and identified which of his ideas and theories

we should use as reference today.

Finally, Ryozo Kato, former Ambassador to the United States, gave a lecture entitled "How would Kan'ichi Asakawa View the Japan-US Relations of Today?" He commented on Kan'ichi Asakawa's views of America as described in *Nihon no Kaki (Crisis for Japan)*, and his personal views of America based on his own experience.

In the question and answer session following these lectures, questions were raised by Professor Naoyuki Agawa of Doshisha University, Mr. Tsuneo Watanabe of the Sasakawa Peace Foundation, and Emeritus Professor Hamada of Yale University, among others.

Panel Discussion I

The first Panel Discussion took up the topic at the center of the symposium, "Why Kan'ichi Asakawa Now?" Yoichi Funabashi, Chairman of the Asia Pacific Initiative, served as Chair.

The first panelist to speak was Koichiro Gemba, former Foreign Minister and Member of the House of Representatives, who hails from the same region as Asakawa. Mr. Gemba commented on Gonsai Asaka's influence on Asakawa, who he believes was Asakawa's mentor. Later in the discussion, Mr. Funabashi asked him about the future of Japan-China relations, to which Mr. Gemba responded that it was Japan's role to lead China towards becoming a responsible great power.

Next, Akihiko Tanaka, President of the National Graduate Institute for Policy Studies, raised important issues concerning where the globalized international community should go from here, and what strategies Japan should take as it finds itself trapped between the great powers of the United States and China. In response to Mr. Funabashi's concerns for the future of Japan-US relations, Mr. Tanaka said that although it appears perilous, hope remains as long as America maintains a well-functioning community.

Kiyoshi Kurokawa, Emeritus Professor of the National Graduate Institute for Policy Studies and former Chairman of the Nuclear Accident Independent Investigation Commission (NAIIC), said he quoted Asakawa in the introduction to the report on the Fukushima nuclear disaster. He argued that Japan's problems once identified by Kan'ichi Asakawa remain unchanged. In answering Mr. Funabashi's question regarding the issues Japan must overcome, he indicated that the biggest issue is governance, and that in order to make changes, he expressed his wish that young people go abroad and observe other societies.

During the discussion with the audience, new issues concerning education, and relations with the United States and with China were proposed by Emeritus Professor Hamada, Mr. Sakon Uda from the NAIIC, and former Ambassador to China, Mr. Yoshiyasu Sato. A lively exchange of opinions ensued. Lastly, Mr. Funabashi stressed the importance of reconsidering that many of the problems Japan now embraces did not rain down from outside, but were born from within Japan, and he appealed to the audience to face this fact, in the words of Asakawa, with "vital humor".

Panel Discussion II

The theme for the second Panel Discussion was "New Pacific Era: Hopes for the Next Generation." Tsuneo Watanabe of the Sasakawa Peace Foundation acted as Chair. The panelists were Naoyuki Agawa, Distinguished Visiting Professor of Doshisha University and Emeritus Professor of Keio University, Kiyoyuki Seguchi, senior researcher at the Canon Institute for Global Studies, and Hiroyuki Akita, editorial commentator at the Nikkei

Shimbun Newspaper.

Professor Agawa pointed out the mistakes made by the Japanese in disregarding Asakawa and neglecting the U.S., and offered words of advice to young people so as not to repeat those same mistakes.

Mr. Seguchi suggested that it is not America, China nor Japan that is able to lead a stumbling international community, but the power of citizens and individuals who transcend national and linguistic barriers and have the right directions, notions and technology.

Mr. Akita referred to his experience as special correspondent to unravel the historical background of US-China relations, and stressed the importance of understanding the DNA that passes down through generations.

Mr. Watanabe used DNA as a keyword in questioning the three panelists, to which Mr. Agawa remarked on how a reading of the American constitution reveals a vigorous American DNA. Mr. Seguchi compared Japan to *Shogi*, and China to the game of *Go* in analyzing their DNA, while Mr. Akita proposed four options for Japan for the future, and called for the next generation of young people to decide the way forward.

During the discussion with the audience, opinions were exchanged with Mr. Fumio Matsuo, journalist and author of *America and China*, and others about the future of Japan-US-China relations, and the international community, and on the character and achievements of Asakawa. Mr. Watanabe entrusted optimism for the future to the next generation, suggesting that further research of Kan'ichi Asakawa may reveal even more enlightening answers.

Professor Ueki concluded the symposium by stating, "Let us capitalize on what we learnt today, and have firm and sincere attitude in tackling various issues as Asakawa did."

Brief Biography of Kan'ichi Asakawa

Kan'ichi Asakawa was born in 1873 (Meiji 6) in Nihonmatsu, Fukushima Prefecture as the eldest son of a feudal warrior of Nihonmatsu fief. He graduated valedictorian from Tokyo Senmon Gakko (currently Waseda University) in 1895, and subsequently transferred to Dartmouth College. He was then enrolled at the Graduate School of History at Yale University. After graduation in 1902, he became a lecturer at Dartmouth. In 1905 he married Miriam Cameron Dingwall (died 1913). At the request of the Library of Congress and Yale University Library, he returned to Japan in 1906 to curate a collection of Japanese materials. While there, he also taught at Waseda University as lecturer. On his return to America in 1907, he became a lecturer at Yale University and curator of its University Library East Asian Collection. He then became assistant professor in 1910. He made a brief return to Japan in 1917 for an investigative research at the Historiographical Institute of the Tokyo Imperial University (currently the University of Tokyo). In 1930 he became associate professor at Yale, and in 1937, he was appointed as its first ever Japanese full professor. After the war in 1948 he became the director as well as curator of the Yale University Library, and passed away in the same year in West Wardsboro, Vermont, at the age of 74.

朝河貫一 博士
没後70年記念シンポジウム
「今、なぜ朝河貫一か」

植木千可子
早稲田大学大学院
アジア太平洋研究科教授

――― 総合司会を務めさせていただきます、早稲田大学アジア太平洋研究科の植木千可子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、70 年前に亡くなられた朝河貫一先生の精神と業績・偉業を新たに思い出し、今を考える、そして将来を考える指針にできればと思っております。今日は本当に各界のすばらしい方たちにお集まりいただきました。

朝河貫一先生が活躍されていたとき、『日本の禍機』を書かれた頃、そのとき私がもし生きていたならば何ができただろうかと考えます。研究者として正しく、感情に流されることなく、科学的に、客観的に情勢を見て分析することができただろうか。その結論が世の中の趨勢と異なっていた場合に、それを口に出して発表する勇気があっただろうか。また、そのような警告を誰かから受けたときに、耳を傾けることができただろうか。そのようなことを思います。私たちは、このシンポジウムが 70 年前に亡くなられた朝河貫一先生が私たちに残してくださったものをあらためて見つめ直し、この後のことを考えるよい機会となればと思います。

今日、ご登壇いただく方も、会場にいらっしゃる方も、日本のために各界でご活躍されている方ばかりです。経済界、外交、政治、学界、言論界、さまざまなところでご活躍なさっている方たちに集まっていただきました。そして何よりも素晴らしいと思うのは、皆さんがそうやって世界で活躍していらっしゃるときに、心の中に、そして指針として朝河貫一先生の言葉を思い描きながら生きて、日夜ご活動されていることです。今日は一日、朝河貫一先生のことを、さらに皆さまからいろいろなことを学ぶ場にさせていただければと大変楽しみにしております。

それでは、この国際文化会館の理事長でいらっしゃる明石康様から、主催者を代表してご挨拶を賜りたいと思います。

主催者挨拶

明石　康
国際文化会館理事長

皆さん、こんにちは。本日はウィークエンドにもかかわらず多くの方にご来場いただきましたことを、主催者の一人として心から感謝申し上げます。

今年は、わが国が生んだ世界的歴史学者である朝河貫一博士が亡くなられてちょうど 70 年目にあたります。朝河博士は、歴史学者としてはもとより、国際政治学者、また米国において日本の愛国者、憂国の士として多大な貢献をなさいました。

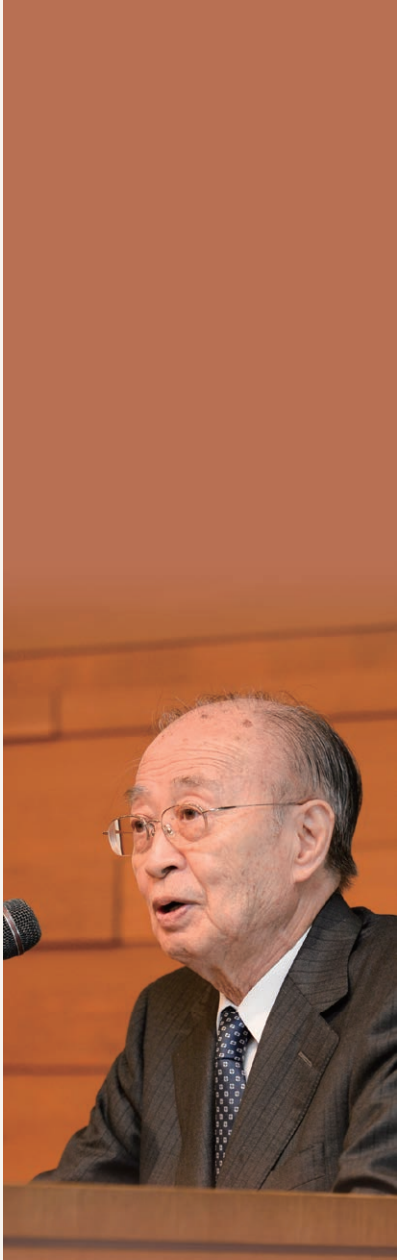
博士は福島県の二本松旧藩士の子として生まれ、苦学してアメリカのダートマス大学、イェール大学で歴史学を修め、イェール大学教授として、封建制度ほか日本の歴史を欧米に紹介する役割を果たされました。

その一方で、日露戦争に際しては、領土拡張のため満州・朝鮮半島を南下するロシア軍に対して挑む日本の立場には正当性があると主張され、欧米諸国に認められるところとなりました。このようなご努力の成果もあり、窮地に追い込まれつつあった日本軍は、アメリカ大統領による仲裁を得ることができ、勝利する形でなんとかこの戦争を終えることができたのでした。

日露戦争の終わった後、日本軍が朝鮮半島から北上していく状況を見ていた朝河博士は、日本の行く末を憂いて『日本の禍機』という著書を書いたのでした。このままでは日本は、ゆくゆく孤立し米英と矛を交えて破滅するのではないかと、太平洋戦争が始まる 30 年以上前から、警鐘を鳴らし続けたのです。

また、太平洋戦争の開戦直前においては、アメリカ大統領から天皇へ平和を呼び掛ける親書によって、勅令で戦争を阻止することはできないかと、朝河博士は心血を注ぎました。その努力はむなしく開戦となってしまったのですが、それでも米国において日本の文化遺産や文化財を空爆から守るために、アメリカの専門家による保護リスト作成に協力したと言われています。そのほか、戦後日本の新生構想にも関わり、影響を及ぼしました。

こうした朝河博士の、日本における戦禍という軍国主義の狂気に立ち向かい、広い知識と深い洞察力、そして高い志に基づく行動を取られた軌跡



明石　康
国際文化会館理事長

をたどりますと、今われわれ後世の者は、朝河博士の志と理念をどのように身近で活かしているのかと、自分に問い掛けざるを得ません。国内における愛国主義ないしは孤立主義的な雰囲気に過大な影響を受け、長期的視点を失ってしまったり、日本の力を過大視したりする危険は果たしてなかったのか。あるいはまたわが国と関係するほかの大国においても、それぞれ過度の自信や曇った将来観察が国際政治のかく乱要因になることがなかったのだろうか。そうしたことが懸念されます。

私は先日、ある元総理大臣からそんな懸念を直接お聞きし、その文脈で朝河貫一の偉大さにもお触れになったので、はっとしたことでした。ここに朝河博士がおられたなら、今の世界、今のアジア、ないしは日本をどのように見られるだろうか。そして私たちにどのようなアドバイスをくださるだろうか。また、今後を担う若い人たちに、私たちは何をつないでいけばよいのでしょうか。そのような気持ちから、本日は皆さまにお集まりいただき、率直なご議論を賜りたいと思っております。「今、なぜ朝河貫一か」というシンポジウムのテーマには、そんな思いを込めております。

今日ご登壇くださるスピーカーやパネリストの皆さま方、そして財政的なご支援をいただいたANA ホールディングス、オリックス宮内財団、また個人としてご寄付をいただいた方々にも深く御礼申し上げます。

朝河貫一と郷里を共にし、以前から熱心にこのようなシンポジウムのアイデアを温めてこられたセブン銀行の安齋隆特別顧問と、博士が長く教鞭を執られたイェール大学で名誉教授をしておられ、また内閣官房参与として現在日本の金融政策に大きな役割を果たしておられる浜田宏一先生の両氏と共に、発起人グループの一端を汚す者としてひと言挨拶させていただきました。ありがとうございます。

朝河貫一の生き様

朝河貫一の晩年とその遺産

矢吹 晋（横浜市立大学名誉教授）

世界、日本、そして朝河貫一

浜田宏一（イェール大学名誉教授）

朝河貫一の史料収集と人文科学の意義

Daniel Botsman（イェール大学教授）

朝河貫一：天皇制民主主義の学問的起源

山内晴子（朝河貫一研究会理事）

朝河貫一の晩年とその遺産

矢吹 晋　横浜市立大学名誉教授

――― 最初は、横浜市立大学名誉教授の矢吹晋先生に「朝河貫一の晩年とその遺産」という題名でご講演いただきたいと思います。矢吹先生は、朝河先生と同じく福島県の出身で、朝河博士のことを深く尊敬され、博士に関する多くの本を出版されています。もともとは中国がご専門ですけれども、最近では、朝河先生が英語で書かれた本のご紹介もされております（資料スライド１）。

記念すべきシンポジウムに際して、トップバッターの役割を得て光栄の至りです。朝河貫一の晩年に日米戦争が始まり、彼は「敵国人登録」を余儀なくされ、預金口座は凍結され、週25ドルしか払い戻すことができませんでした。年俸換算で1,300ドルです。定年までセイブルック・カレッジに住み、その後はハークネス大学院塔の９階で過ごし、家賃は安いものだから生活には困らないと、旧友のクラークに手紙を書いています。

今このセイブルック・カレッジの一角には朝河貫一ガーデンが設けられています。開園式には、古川大使、加藤大使ご夫妻、糠澤修一顕彰協会事務局長（現・福島テレビ顧問）の諸氏とともに私も出席しました（資料スライド２）。ここには、朝河の人生を総括するプレートがあり、「Professor of History, Curator, Peace Advocate」に続き、最後に二本松の「戒石銘」も入っています。これは絶対入れて欲しいとわれわれ顕彰協会が提案した結果、実現したものです（資料スライド３）。

シーモア総長は、朝河よりも12歳若い歴史学者ですが、日米戦争中も全力で朝河を庇護し、生活と研究は保障されていました。しかし身分は「敵国人」のため、窮屈な生活であったことは容易に推察できます。42年から45年夏まで４年近く、朝河はこの生活を余儀なくされました。この間、朝河はイェール大学名誉教授の地位にあったので、預金凍結を解除されたときには、一定の「強制貯蓄」が遺産として残され、これらは没後に遺族の元に送られました。朝河遺品のうち、歴史学に関わるものはスターリング図書館に納められ（その後、一部はバイネッキ稀覯本図書館に移された）、朝河個人に関わるものは遺族の手に届けられたわけです。この作業を直接担当した

のは、朝河の後任のキュレーターであった弥永千利教授です。弥永教授は、大学院の副院長だったシンプソン教授と相談しながらこの作業を進めました。遺族は米国から届いた遺産を分け合い、書簡等の遺品は福島県立図書館に寄託しました。

55 年に、東大の史料編纂所に朝河著書刊行委員会が設けられて、英文 *The Documents of Iriki* が復刻され、和文も「新訂版」として増補されましたが、増補版が朝河の真意にかなうものかどうか、大きな疑問が残ります。この作業は、史料編纂所の大きなプロジェクトとして行われ、若き歴史学徒の阿部善雄（のち、史料編纂所教授）も大いに尽力したのですが、阿部という名は出てきません。「博士にゆかり深い専門学徒」と記されるだけです（資料スライド４）。これは史料編纂所の「権威主義」を物語るかもしれませんし、もしかしたらこの草稿を書いたのは阿部自身かもしれません。阿部さんはその頃から、伝記を書くことを生涯の課題としていました。ところが、実際に伝記ができたのは 83 年秋、30 年後のことでした。なぜこんなに遅れたのか。

ここに「遺品の帰属問題」があります。遺品を寄託された県立図書館長の K 氏が遺品を私物化しており、阿部さんも、他の学者も利用できなかったのです。阿部さんは安積中学 50 期の同級生、柳沼八郎弁護士の協力を得て、法廷闘争さえちらつかせながら、ようやく遺品を取り戻し、史料編纂所の阿部研究室に納めました。しかしその頃、彼は定年を迎え、史料の保管問題が発生します。私は相談を受け、国際文化会館理事長であった松本重治先生と連絡を取って、先生を訪ねたのが 82 年３月 18 日のことでした。同席されたのは、大久保利謙（としあき）教授、柳沼八郎弁護士、そして本日はご欠席の加藤幹雄国際文化会館元理事です。この前後から阿部さんはアイハウス（国際文化会館）のキュービクルに遺品を運び、そこで『最後の日本人』の完成を急いだわけです。阿部さんの伝記完成と遺品の保管について、アイハウスは非常に大きな役割を果たしたことになります。

これは阿部さんが出版祝賀会の朝サインをして用意して下さった著書の扉です（資料スライド５）。次に松本重治先生に私が面識を得た経過をお話しします。松本先生の『上海時代』下巻の後書きに「隋園の会」というものが出てきます。これは松本先生の追悼文集にも書いたことですけれども（資料スライド６）、アジア経済研究所の中国研究グループが企画した、松本先生の同盟通信時代の思い出を聞くヒアリングの会の通称です。そのヒアリング記録をまとめたのが、『上海時代』です。それは新宿御苑近くの隋園別館で開かれ、紹興酒を呑みながら、談論風発という楽しい会で、月１回で２～３年続いたように記憶しております。

あるとき、松本先生がイェール大学に遊学したとき、統計学で著名なフィッシャー教授の下で講義を聞いたという思い出を語られたので、「朝河貫一とお会いになりましたか」と質問しました。

すると、松本先生は非常に興奮して、「朝河のことを私はずっと考えていた。しかし、そのことを聞いてくれたのは矢吹さん、あなたが初めてだ」と語り出したわけです。後日、松本先生は阿部著『最後の日本人』に寄せた序文に書いておられます（資料スライド７）。松本先生はセイブルックを宿舎としていたので、そこを住まいとしていた朝河を訪ねるのはわりあい容易でした。朝河はミリアム夫人を亡くした後、キャンパス近くの住居からセイブルック・カレッジへ移り住み、その後セイブルックで「准フェロー」の地位を得て、六つの部屋を持ち、いわば舎監のような立場で暮らしていました。ところが、残念ながら松本先生の序文は、現行の岩波現代版には入っておりません。

そのときに「歴史学とは何か」を、松本先生が私に下問されましたが、答えることはできませんでした。その後、調べて分かったのですが、クラーク大学のブレイクスリー教授に招かれて、武士道について講演した際のものでした (But science will always prefer the white light of truth to the red glare of such a flame. Not only science, but also the very practical aim of the mutual understanding of the nations, is being seriously retarded by the rival display of self-righteousness made by the foreign and the Japanese writers. Japan Old And New: An Essay on what New Japan owes to the Feudal Japan, *the Journal of Race Development*, vol. 3 no. 1, July, 1912.)。

阿部さんの『朝河伝』の出版祝賀会は国際文化会館樺山ルームで開かれました。今日の会議は岩崎記念ホールで、お隣が樺山ルームです。私は司会役を命じられ、阿部『朝河伝』をきっかけとして『朝河貫一書簡集』編集委員会ができました、それが 90 年です。そのときに大隈会館で祝賀会が開かれて、刊行会代表として祝辞を述べられたのは永井道雄先生（当時国際文化会館理事長）でした。その録音を私が起こし、『朝河貫一の世界』（朝河貫一研究会編）という本をつくった際に、永井先生の序になりました。永井先生は祝辞にほとんど手を加えられないで、そのまま活字になりました（資料スライド８）。

こういうわけで、松本先生・永井先生二代にわたって、アイハウスは朝河顕彰活動に大きな役割を果たしてこられました。

『書簡集』刊行以後、早稲田大学を拠点として朝河貫一研究会が発足し、福島県では朝河貫一博士顕彰協会が誕生し、活動を続けてきました。それぞれに仕事はやってきましたが、一番大事な *The Documents of Iriki* がほとんど読まれていません。古文の『入来文書』自体については、個々に引用はされていますが、朝河が *The Documents of Iriki* を編集したことに、どういう意味があるのか、ほとんど研究されていないのが日本の現状です。日本の高校の教科書では、網野善彦教授

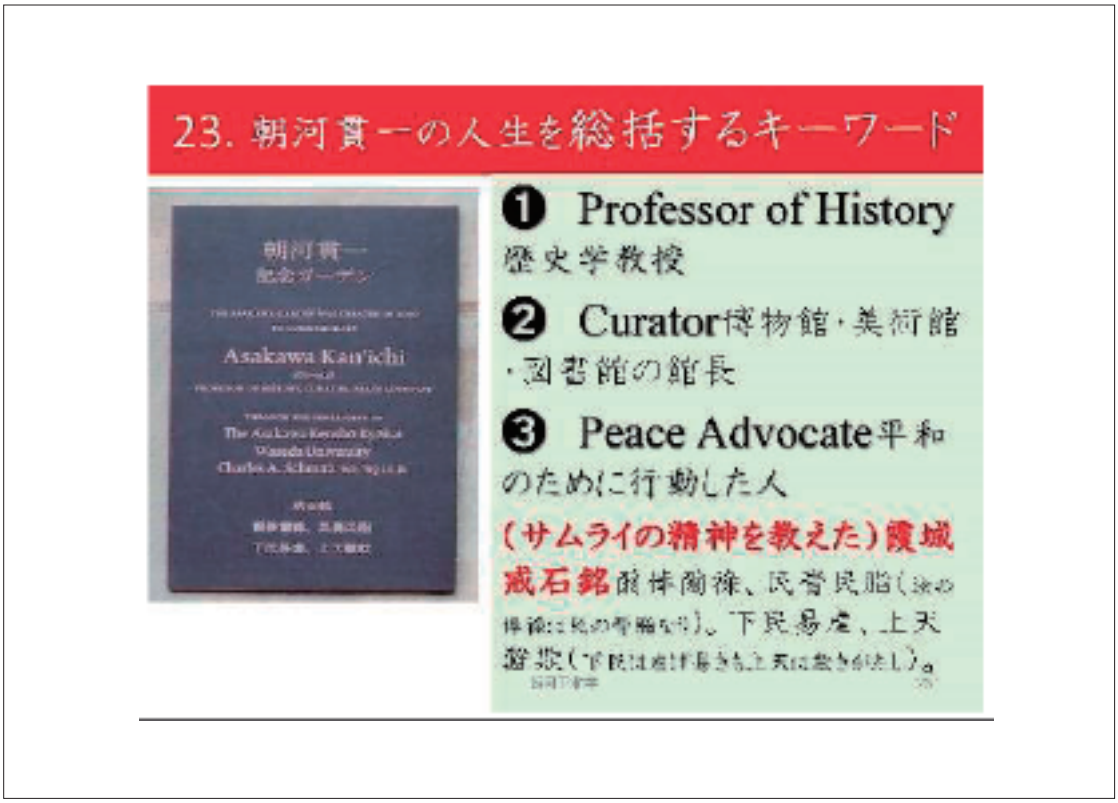
の「公領 (国衙) 荘園制」が書かれているのですが、公領と荘園とを単に並べるだけでは困る。これでは「庄の封土 *fief* 化」によって封建制が成立した過程を説明できない。朝河はそもそもなぜ『入来文書』を選んだのか。それは、『島津文書』からは読み取れない歴史の真相がここに書いてあるからだと朝河は説明しているのですが、この核心部分を誰も読み取っていないように見受けられます。*The Documents of Iriki* と『入来 (院) 文書』とは、それぞれ別個の著作物だという認識が欠けています。*The Documents of Iriki* をどなたもお読みにならないので、朝河史学は宙に浮いたままです。

最後に、朝河ワークショップをご紹介します。来月 10 日に早稲田大学で、本日在席の海老澤教授あるいは浅野教授などを中心に「朝河貫一学術協会創立シンポジウム」が行われますので、ぜひご参加ください。私もそこで *The Documents of Iriki* に何が書かれているのか。それは日本史や世界史にとってどういう意味を持つかをお話ししたいと考えています。私は歴史学の門外漢ですが、傍目八目、門外漢だからこそ見える日本史の病理をお話しします。ありがとうございました。

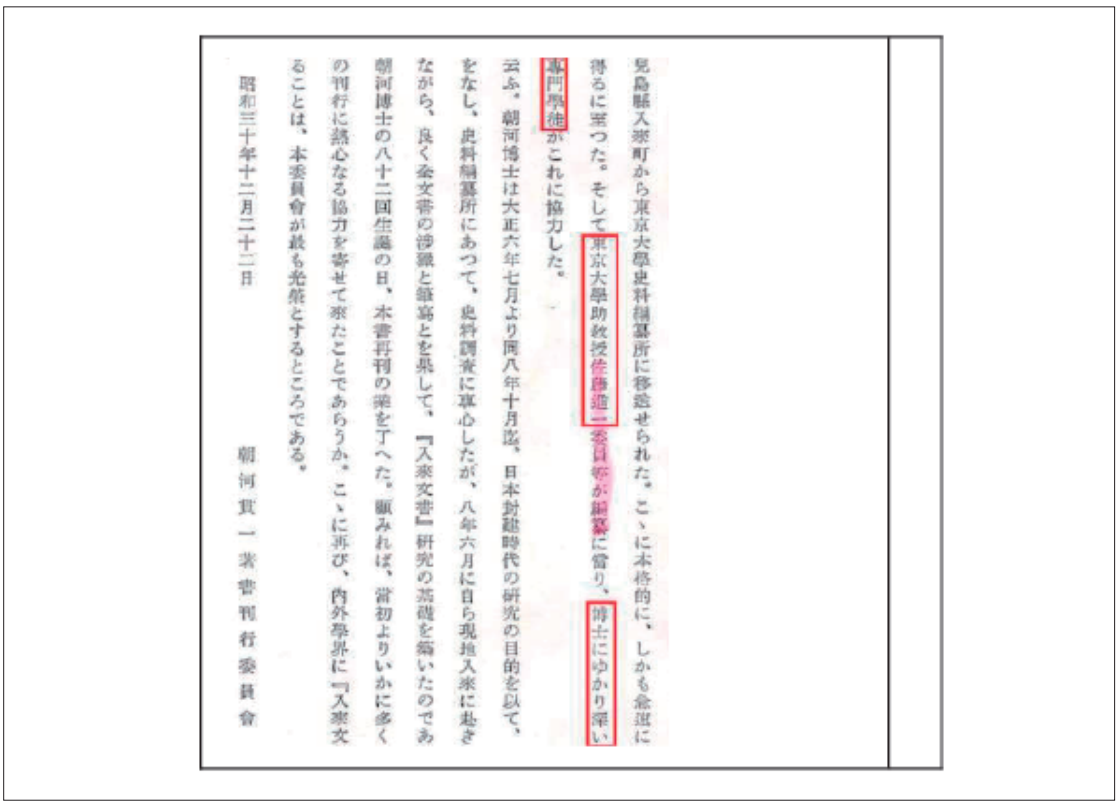
◆資　料

スライド 1

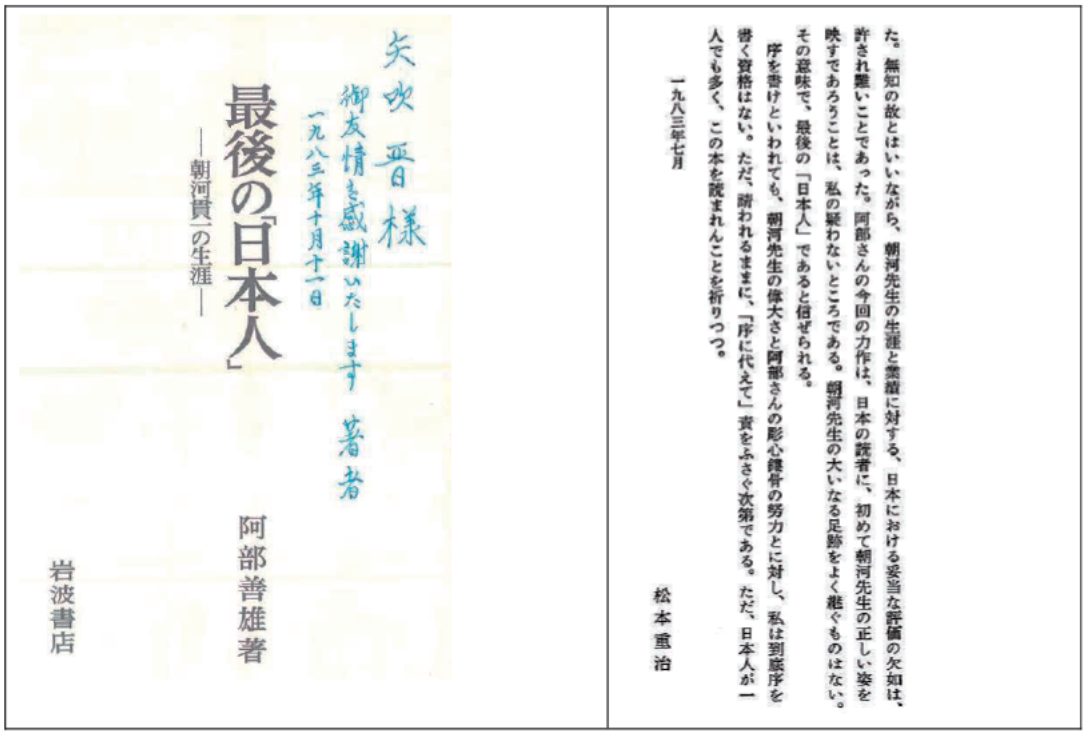
スライド 2


23. 朝河貫一の人生を総括するキーワード
朝河貫一
記念ガーデン
Asakawa Kan'ichi
❶ Professor of History
歴史学教授
❷ Curator博物館・美術館
・図書館の館長
❸ Peace Advocate平和
のために行動した人
（サムライの精神を教えた）霞城
戒石銘

スライド 3


見島縣入來町から東京大學史料編纂所に移轉せられた。こゝに本格的に、しかも急速に
得るに至つた。そして東京大學助教授佐藤進一委員等が編纂に當り、博士にゆかり深い
專門學徒がこれに協力した。
云ふ。朝河博士は大正六年七月より同八年十月迄、日本封建時代の研究の目的を以て、
をなし、史料編纂所にあつて、史料調査に專心したが、八年六月に自ら現地入來に赴き
ながら、良く古文書の渉獵と謄寫とを果して、『入來文書』研究の基礎を編いたのであ
朝河博士の八十二回生誕の日、本書再刊の榮を丁へた。顧みれば、當初よりいかに多く
の刊行に熱心なる協力を寄せて來たことであらうか。こゝに再び、内外學界に『入來文
ることは、本委員會が最も光榮とするところである。
昭和三十年十二月二十二日
朝河貫一著書刊行委員會

スライド 4



た。無知の故とはいいながら、朝河先生の生涯と業績に対する、日本における妥当な評価の欠如は、許され難いことであった。阿部さんの今回の力作は、日本の読者に、初めて朝河先生の正しい姿を映すであろうことは、私の疑わないところである。朝河先生の大いなる足跡をよく継ぐものはない。その意味で、最後の「日本人」であると信ぜられる。

序を書けといわれても、朝河先生の偉大さと阿部さんの彫心鏤骨の努力とに対し、私は到底序を書く資格はない。ただ、請われるままに、「序に代えて」責をふさぐ次第である。ただ、日本人が一人でも多く、この本を読まれんことを祈りつつ。

一九八三年七月

松本重治

矢吹晋様

御友情を感謝いたします

一九八三年十月十一日

著者

最後の「日本人」

—朝河貫一の生涯—

阿部善雄著

岩波書店

スライド 5

松本重治『上海時代』
隋園の会、「歴史とは熱なき光」

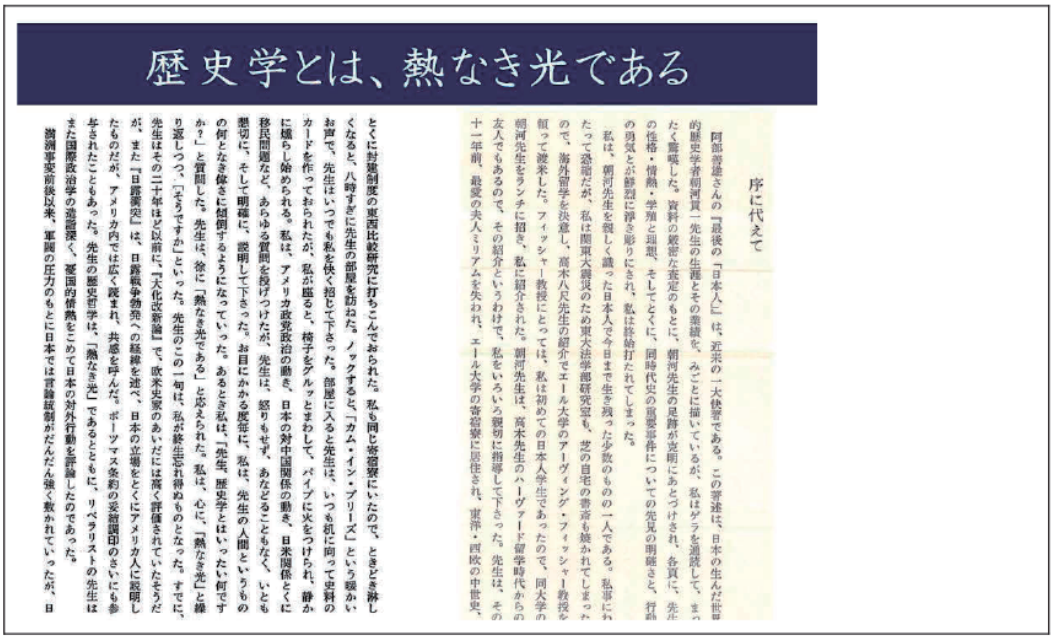
松本重治先生を追悼する、逆耳順耳、『蒼蒼』第三四号〔九〇年一〇月一〇日発行〕

先頃、故松本重治の追悼文集が出た（国際文化会館編、一九九〇年）。私は求められて、次のような駄文を寄せた——『上海時代』（下巻）は一九七五年春に出た。その「あとがき」に「多くの友人知人」への謝意が記されているが、その末筆に光栄なことに私の名が見える。アジア経済研究所の同僚とともに、「隨園の会」に加えて頂いたのは、たしか私が香港留学から帰ってまもなくのことではなかったかと思う。この会は若手（当時は）の中国研究者が松本先生を囲んで、中国料理をつつきながら、よもやま話をする楽しい会であった。新宿御苑前の隨園別館に集まることが多かったので、いつとはなしにこの名がついた。

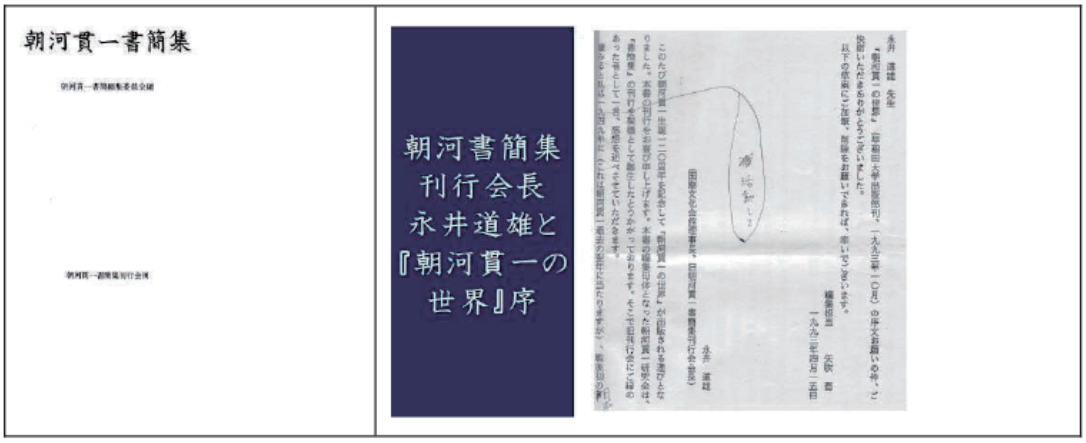
ある夜、松本さんがエール大学時代の思い出を語られたのを聞いて、帰り道に「アサカワ・カンイチ」とお会いになりませんでしたか、と尋ねてみた。私は福島県安積高校の出身で、朝河貫一は大先輩なのです、と説明した。

松本さんは俄然目を輝かせて、立ち止まり、朝河貫一の思い出を語ってくれた。「歴史は熱なき光なり」とする朝河貫一の名言を引かれたのは、そのときであったか。それともその後、朝河貫一の名が出たときであったか、いまはもう思い出せない。

スライド 6



スライド 7



スライド 8

世界、日本、そして朝河貫一

浜田宏一　イェール大学名誉教授

――― 続きまして、浜田宏一イェール大学名誉教授にご登壇いただきます。浜田先生はイェール大学の教授を長年務められ、現在の日本、そしてアベノミクスの理論的な貢献者とも言われております。浜田先生は、朝河先生と同じようにイェール大学に留学され、博士号を取り教授になられています。今日は早稲田大学をはじめ、若い大学生・大学院生もいますので、ぜひ世界に飛び立つことを若者たちに伝えていただければと存じます。

話を頼まれると、私は聴衆の質の判断を、質問ではなくてきちんと自分の意見を適格に述べる人が十分いるかで評価しています。時には自説でそのまましゃべり続ける人もいるので、その質が重要です。日本では演壇に座る人は専門家であり、聴衆はそれをありがたく聞きにきておそるおそる質問はするけれども、意見は述べない。そういう集まりがあまりにも多い。それを、登壇している人だけが中心にしゃべるような会議ではなく、フロアにいる方も十分に議論できるようにとお願いしたのが今日のシンポジウムです。司会の先生には苦労をお掛けしますけれども、ご理解いただきたいと思います。

「朝河研究」を「自分の村や同窓の学者」とひいきして研究するだけではなく、最近、特に早稲田大学等を中心として、本当に歴史の研究として、あるいは人文学一般の研究として、学問的な基準を満たし、レフェリー付きのところに公刊できるような研究に質を高める仕事が行われています。女性の研究者も多く、論客もだんだんとあらわれ、非常に喜ばしいことです。

朝河が二本松・郡山の人、あるいはイェール大学の地縁だけではなく、朝河自身そしてその業績の価値が重要だということが広く知られることが大切です。そのためには、専門的な歴史のコンファレンスとは別に、お集まりいただいたような、朝河ファンで、言論界にも有名であり、各分野で活躍しておられる方に集まっていただくこのシンポジウムは、非常に意味があると思います。

今のように日・米・中いろいろな勢力が地政学的に相争っているときに、日本はどういう道を選んだらよいのかという問題は、実は朝河貫一が一番考え、あるいは悩んだことなのかもしれません。

明石理事長に『日本の立ち位置を考える』という著作がありますが、日本は世界が錯綜したところでどのように自分の安全を守り、しかも自分の意図を通して、何かの意味で世界の価値形成に役立つのだろうかと考えながら、朝河貫一を見ることが重要だと思っています。

ですから、黒川先生や阿川先生や船橋先生などにお願いし、知識人が朝河の役割を、朝河没後70年をしのぶ形で設けようと、皆さまにご相談したのです。それにしても、これほどまでにたくさん、日本の知的最高のレベルを代表されるような方々が、お忙しい時間の中でお集まりいただいて、ありがとうございます。われわれ言い出しっぺをまとめて、実際にファイナンスの上でも、シンポジウムの内容も、形成してくださった安齋会長と有村一郎さんにお礼申し上げたいと思います。主催者の責任を果たして、立派な会議を開くことを可能にした、国際文化会館と明石理事長に感謝しております。

私は国際政治が専門ではないので分かりませんが、帝国主義的な発展はどこの国でもやっていたと思います。ところが日本もそれに加わるようになったら、ほかの帝国主義的列強が、日本はまだ駄目だと言ってきました。日本をサポートしてくれた面もあるでしょうが、そんな仲間入りするのは早いとポーツマスで会議を開きました。朝河はそれを一生懸命弁護したのです。ところが第二次戦前には、今度は日本が米国と戦争したら大変なことになると心を砕いて、必死でくい止めようとしました。

本日はここで、聴衆にという意味で、ＮＨＫ「サンデースポーツ」のキャスターである大越健介様に振ろうと思います。ごく最近、アベノミクスなどについてはもしかすると意見の違う大越様と親しくなれたのですが、大越様は「イェール大学に私は１回だけ行ったことがある」とおっしゃいました。「なぜ行ったのですか」と聞くと、「朝河貫一を取材に行きました」と。その内容を詳しくお伺いできたらと思います。

僭越ですが、朝河と私との共通点は、イェール大学で学び教えた日本人という点ですが、ほかにも自然科学の先生、そして数学の先生には優秀な方がとても多くいらっしゃいます。数学に不動点定理というのがあり、それを経済学に使えるようにしたのがNYタイムスの角谷ミチコの父君、角谷静夫先生です。この方の定理のおかげで、経済学者が何人も非常にいい仕事をしてノーベル賞をとっています。それから地震学の優れた先生もいまおられますし、玉河恒夫先生という方は、数学史上に残って、Tamagawa numberという自分の発見した整数がおそらく数学史に永久に語り継がれていく、そういうことをされた方もいます。

私はアメリカに行って「うつ」になったりして、苦労もしましたけれども、いろいろなことをイェール大学で学びサポートしてもらいました。文科系の学問をやるということで、僕は、ここ

にいらしてくださったRosenbluth教授、Botsman教授等みんなに助けられました。しかし、考えれば朝河貫一はやはり寂しかったのかもしれません。あの時代に白人の奥さんをもっていたことが、もしかしたら苦労の種であったかもしれないと思います。

では、この後は壇上とフロアとの意見交換が十分に、活発にいくように願っています。朝河の感じた問題は、今の日本の問題でもあり、日本が本当に世界の平和に役立つにはどうしたらよいのかを考える絶好の機会であると思います。

◆ 質疑応答

大越： NHKの大越健介と申します。先ほど浜田先生は、非常に難しい時期に日本を守り、日本の意図を通し、世界の価値形成に役に立つにはどうすべきかを考えようと、大変重要なコメントを発せられました。現状を考えますと、日本を守るというところは、認識は大いに強まってきているのかなと。日米同盟など、そういう難しいことを言うのではなくて、やはり日本の国という意識は高まっているのかなと思いますが、日本の世界における価値を、世界に対して広めていく、発表していく、日本を通していくという姿勢が果たしてわれわれの中にあるのかなと自問させられました。

その際、朝河貫一博士も非常に強く抱いておられた「愛国心」という言葉が、日本人はどうもうまく自分の心の中で処理できていないような気がします。浜田先生は、愛国心というものはどのように心の中に置かれるべきだとお考えでしょうか。世界の価値形成の中で日本のよさを広めていくためには、われわれは愛国心とどう付き合っていくべきなのか、その点の考えをお聞かせ願いたいと思います。

浜田： 早速難しい質問がきましたね。私はやはり個人として、世界をどう良くしていくかと自分が思うことがうまく実現できるような国にしていこうと思います。学問の競争でも、ノーベル賞などの競争が、日本であまりにもまるでオリンピックのように強調されすぎているのではないか。日本人が取ることが必ずしも重要ではない。世界中の病気を治せるような技術や薬をつくり上げた人は、どの国の人でもやはり個人として偉いのです。

ある文科省の人は、「外国に行っても日本人であることを忘れない人が本当の愛国者なのだ」と書いています。（拙著『エール大学の書斎から』NTT出版，参照）でも私は、地球に生まれて何を世界に残そうとするかをまず考えることが大事であり、それが日本人であれば、日本のよいところ

も自然に出るのだと思います。

私はちょっと足が不自由なので、羽田・成田に帰ってきて車椅子に乗せてもらうたびに日本はよい国だと感じています。ニューヨークは、物と同じように空港で取り扱われてチップを請求される。しかし日本だと、丁寧に教育を受けた方が、時には老人に近い方が、車椅子の私を運んでくれます。人に対する一種の敬意のようなものを払う社会は、個人としては非常に素晴らしいと思います。日本人は世界の人々がよくなるように動くべきで、特に日本のことを考える必要はない。これは、安部先生には話していませんけれども（笑）。

朝河貫一の史料収集と人文科学の意義

Daniel Botsman　イェール大学教授

――― 次は Daniel Botsman イェール大学教授にご登壇いただきます。先生はパプアニューギニアで生まれ、オーストラリアのブリスベンでお育ちになりました。幼少の頃から日本語を学んでいたということで、1500 年頃から現代までの日本の歴史、特に経済社会史がご専門で多くの著書があります。

ご存知の方も多いかと思いますが、朝河貫一はイェール大学で研究に従事した数十年の間に、日本の歴史資料の素晴らしいコレクションを築き上げました。それらの史料を見るだけでも、朝河がいかに真剣にアメリカでの東アジアの歴史や文化に対する理解を深めようとしていたかが窺われます。

イェールの日本関連資料のハイライトについては、ぜひ本日皆さんにお配りした小さなバイリンガルのカタログ「Treasures from Japan」を参考になさってください。これは、バイネキ稀覯本・手稿図書館で日本の史料が展示される機会に合わせて、2015 年に出版したものです。

本日は時間が限られているので、あまり詳しくご説明はできませんが、例えばこのカタログの表紙に使用されているのは「台文再還祝」と題される絵巻物です。これもほんの一部だけですが、その長さは 17 メートルもあって、朝河が 1907 年にイェール大学の図書館のために購入した「京都古文書」という史料群の目玉です（資料スライド 2 ～ 5）。

「京都古文書」の史料は、歴史家の間では広く知られている「町代改義一件」と呼ばれる事件に関連するものです。これは簡単に申し上げると、1817 年（文化 14 年）を皮切りに、京都の町組、町人の組織・グループの代表者たちが、下級官吏である町代を相手に訴訟を起こしたというものでした。争議は 1 年以上にわたって続きましたが、結果的に京都町奉行は町組、町人側に有利な判決を下しました。町代の職務権限は大きく縮小され、町の自治が促進される形で都市行政の改革が進められたのです。

この絵巻をご覧いただくと、自分たちの言い分を支えるために町奉行に提出していた非常に貴

重な書類を取り戻した町人の代表者たちが、うれしそうに市街を練り歩いている様子が見えます。

このような画像史料は、英語圏で日本史の魅力を多くの方々に伝えるためには、やはり非常に大事です。これだけを見ると、そんなに面白くないと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、よく見るとユーモアのあるシーンもありますし、都市の住民のいろいろな要素がここに描かれています。例えば、女性も子供も老人も出てくるし、ホームレスの方も描かれており、非常に貴重だと思っています。

もちろんこういう画像史料のほかに文字史料もたくさん向こうにあります。この「京都古文書」コレクションの中にもたくさんあって、いまちょうど大学院のゼミでは、この争議の結果を詳細にまとめた「乍恐済証文之事」という史料を取り上げています。これも非常に長い史料で、3メートル以上あります（資料スライド6・7）。内容は全体を通して難易度が高く、もちろんご覧のように崩し字で書かれているので、向こうの大学院生にはなかなか荷が重い史料ですが、ゆっくり丁寧に読み、英語へと翻訳する過程で、前近代の日本社会に対する理解を劇的に深めるのです。このように、私たちも小さな形ではありますが、100年以上も前にこれらの史料をイェール大学に持ち込んだ朝河先生の遺志を、現在に受け継いでいるのだということになるでしょう。

大学院のゼミだけではなく、学部生向けの授業でも朝河の生涯をよく取り上げることにしていますが、イェールの学部生でもやはり一番心を動かされるのは、朝河が最後の瞬間まで太平洋戦争を回避すべく、昭和天皇へ親書を送るようルーズベルト大統領に訴えた部分のようです。これは有名なエピソードなので、これ以上詳細を申し上げませんが、朝河と一緒に合衆国大統領を説得したのが、ハーバード大学の有名な美術史家であったラングドン・ウォーナーであったことは確認しておくべきでしょう。

ウォーナーは、奈良や京都を米軍の空襲から守った人物として語られることが少なくありません。これについては明確な証拠がなく、現在では神話的なエピソードであると考えられていますが、ウォーナーが朝河と共に、日本の文化遺産について世界に知らしめようとしたことは間違いのない事実です。しかし、そもそもこの2人はどのように出会ったのでしょうか。私の知る限り、2人の接点の最初の一つは、1923年にイェール大学出版局から刊行された、ウォーナーの『Japanese Sculpture of the Suiko Period』（推古期の日本の彫刻）（資料スライド8）に朝河が序文を寄せたというものです。

昨年4月、学部の授業の準備をする中で、私はこの本を1冊手元に置いておくのもよいだろうと思いました。そこで、とりあえずAmazonを検索すると、古本で在庫があったので、すぐに注文ボタンをクリックしました。今の世の中ではありきたりの行為です。ところが、驚くべきこと

が起こりました。数日後、手元に届いたその本の表紙をめくってみると、「ASAKAWA」の蔵書印があったのです（資料スライド 9, 10）。さらにページをめくると、題名と著者の記載がある箇所に、赤鉛筆で次のような書き込みがありました。「著者および出版社から恵投。1924 年 1 月 24 日拝受。K. Asakawa」（資料スライド 11）。要するに、これは朝河本人の蔵書であり、亡くなられたあと、イギリスの古本屋に売られたようです。私はその 1 冊をオンラインショッピングの魔術によってニューヘイブンに呼び戻したようです（笑）。

しかし、何よりも驚くべきは、最初の数ページの間に挟まれた紙片でした（資料スライド 12 ～ 16）。いろいろなものが入っていましたが、例えば一つに、ニューヨーク・タイムズ紙の、この本の書評が入っています。あと、一番凄かったのは、1923 年 1 月の日付のある 3 通の手紙でした。最初の 1 月 15 日付の手紙は、当時のペンシルベニア博物館の館長であったウォーナーから朝河に宛てられたものです。それは「推古時代の彫刻に関する拙著に序文を書いてくださる気はまだありますか。（中略）長いものでなくて構いません。3000 語か、それ以下でもよいのです」と尋ねるものでした。この手紙の欄外には、実は朝河先生自身のメモがあります。「姉崎」と「300 より 3000」と、最後に「時間」と書かれています。

このメモの書かれた理由は、朝河からのウォーナーへの返事である第 2 の手紙を読むとはっきり分かります。朝河は「あなたの著作への序文については、姉崎か誰かに頼んでいるものだとばかり思っていました。しかし、私にとお考えのご様子。光栄ではあるのですが、以前もお伝えしたように、あまり気が進まないのです。私は日本の建築や彫刻よりも、フランスの封建制についてのほうがまだ詳しい気がします。それに、6 月まで片付けなければならない仕事があり、どうしても忙しいので、時期はよくありません。ところで、以前は 300 語というお話だったのが、今回は 3000 語となっているようですね」。

これを読むと、矢吹先生の先ほどのご報告の中にも紹介された、大著『The Documents of Iriki』（入来文書）を書き上げようとしていた 1920 年代の朝河が、なんとか研究に邪魔が入らないようにと守りを固めていたことが分かります。自分などよりも著名な姉崎正治のほうが適任ではないか。最初は 300 語でよいと言っていたのだから、3000 語も書く必要はないだろうと。しかし、渋々ながらも朝河は、個人的な手紙という体裁でよければ序文を書いてもよいと提案します。

これに対するウォーナーの返答は、迷いのないものでした。ウォーナーは 1 月 29 日付の手紙でこう返事をしています。「ぜひ個人的な手紙を書いてください。お望みならば、フランスの封建制についてでも構いません。（中略）拙著を褒めなければならないと考えて気兼ねされる必要はあり

ません。駄作だと書いてくださってもよいですし、内容に触れなくても構いません。ただ、私たち外国人にも、あなたのような日本人にも、その時代とその産物について考えることは意味のあることだ、と書いていただきたいのです」。

ウォーナーの性格もこの文章にはよく出ていると思いますが、最終的にはもちろん朝河は序文を書きました。それは確かに個人的な手紙という体裁で、ちょうど 3000 語に届かない程度の長さです。さすがにフランスの封建制は登場しません。

しかし、このことは現代の私たちにとってどのような意味を持つのでしょうか。

第一に、朝河とウォーナーの初期のやりとりにより、米国の日本研究の発展において、いかに朝河が重要な役割を果たしていたかが分かります。また、朝河が米国の同業者に対して寛大であったことや、大きな責任感を持っていたことも分かります。先端的な中世史の研究、比較封建論を懸命に進めていた朝河にしてみれば、聖徳太子の時代の美術や建築や彫刻に関する本について、たとえ 300 語でも書く時間は惜しかったでしょう。しかし、日本の文化的達成を世界に広めようとするウォーナーの努力を認め、朝河は彼に協力します。

また、より一般的な見方をすれば、朝河とウォーナーの交流は、人文科学の追究が時に予期せぬ結果を招くことを私たちに思い出させてくれるのです。昨今では、人文科学はまたしてもおとしめられ、より実利的な領域に圧迫されているように思われます。これから、推古期の美術、あるいは九州南部の数百年前の古文書を研究したいと思い立った若者がいるとしたら、果たして十分な支援を受けられるかどうか、私には自信がありません。しかし、朝河とウォーナーを結び付けたのはまさにそのような研究であり、その交流がなければ、後年この 2 人が手を携えて、彼らの愛するものを破壊から守ろうと努力することもなかったのです。

なるほど、彼らの声に耳を傾けた権力者はわずかでした。私は想像してみます。もし当時から彼らの意見を聞き入れ、1930 年代から 1940 年代にかけて、軍備増強のために注がれた情熱が、人類共通の歴史や文化の遺産を理解し合うことに注がれていたら、世界はどのようになっていたのだろうかと。ご清聴ありがとうございました。

◆ 質疑応答

鈴木：　ジャーナリストの鈴木です。朝河は『日本の禍機』で、武士道についても記しています。例えば、新渡戸稲造の武士道論が有名ですが、新渡戸の場合は、対外発信、諸外国に理解させるという意味での武士道です。しかし、朝河貫一の場合は、戦う武士道ではなくて、より平時の武

士道を考えるべきだという問題提起を『日本の禍機』でしていると思うのですが、先生はどのようにお考えでしょうか。

Botsman：　そうですね、地味な武士道がいいということですかね。歴史家は非常に地味な仕事が多くて、例えば難しい崩し字の資料を読んでいくのに時間もかかるし、非常にエネルギーもかかるので、もしかしたらそこで少し共通するところはあるかもしれません。例えば、ウォーナーと朝河の友好関係も、地味な仕事をしているうちに出来上がったわけです。でも、結果は非常に意味の大きいものにつながったと思っております。そういう点では、朝河先生の考える武士道は、もしかしたらこういう毎日の生活の中の仕事のことと関連しているのかもしれませんね。

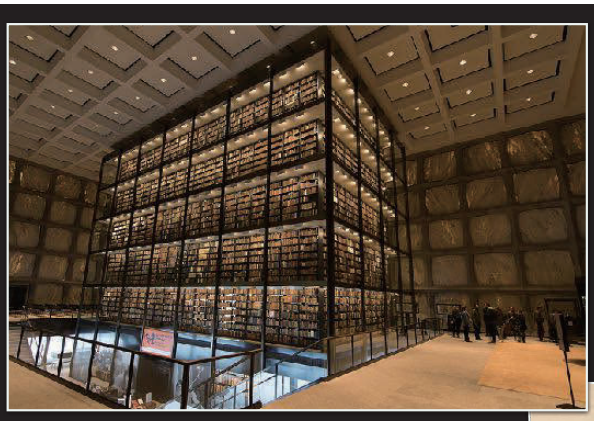
◆資　料

朝河貫一の史料収集と人文科学の意義

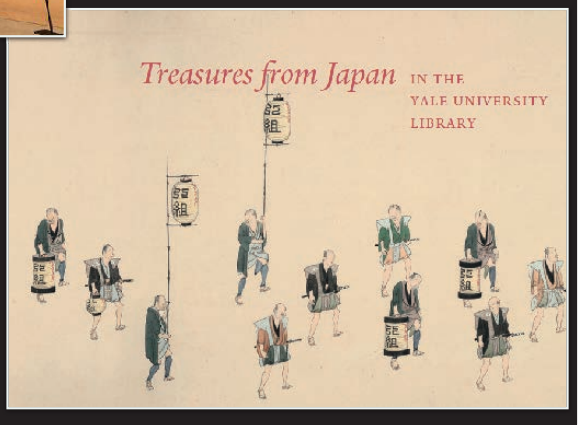
DANIEL BOTSMAN
DEPARTMENT OF HISTORY
YALE UNIVERSITY

朝河貫一博士没後70年記念シンポジウム

スライド 1



バイネキ稀覯本・手稿図書館



スライド 2

「町代改義一件」1817～18年

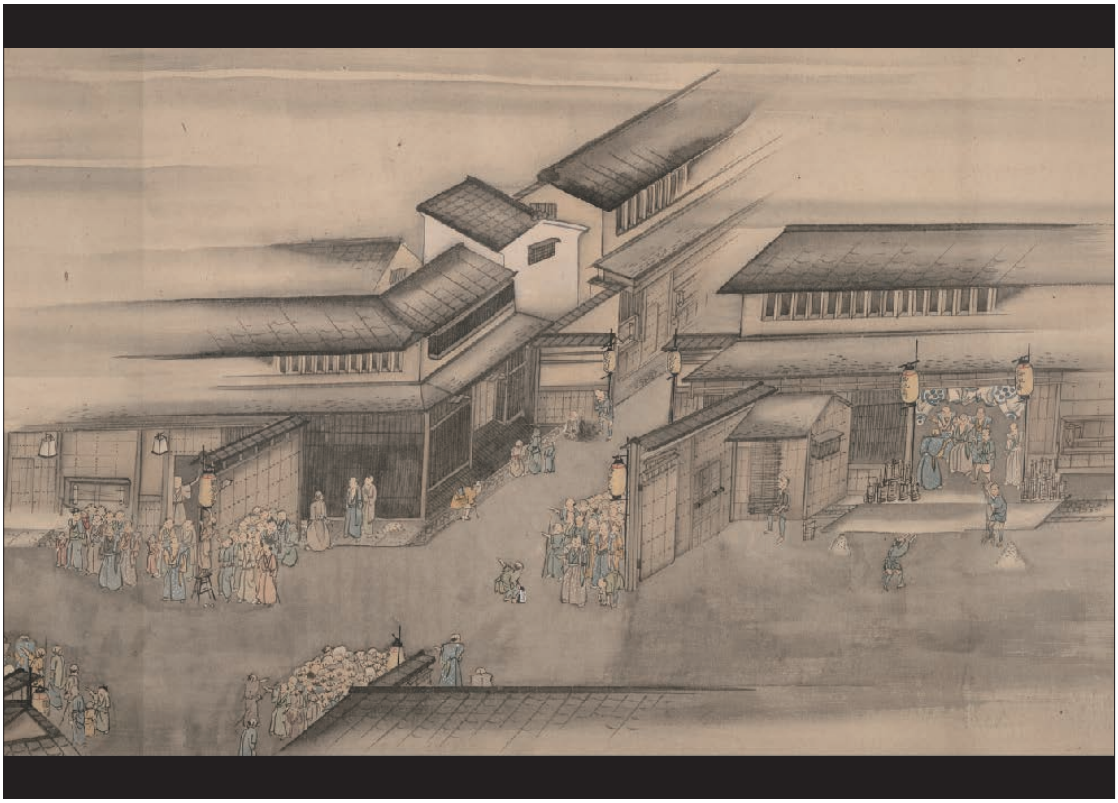
京都の町人（町組）v　下級官吏（町代）

「台文再還祝」

京都古文書コレクション

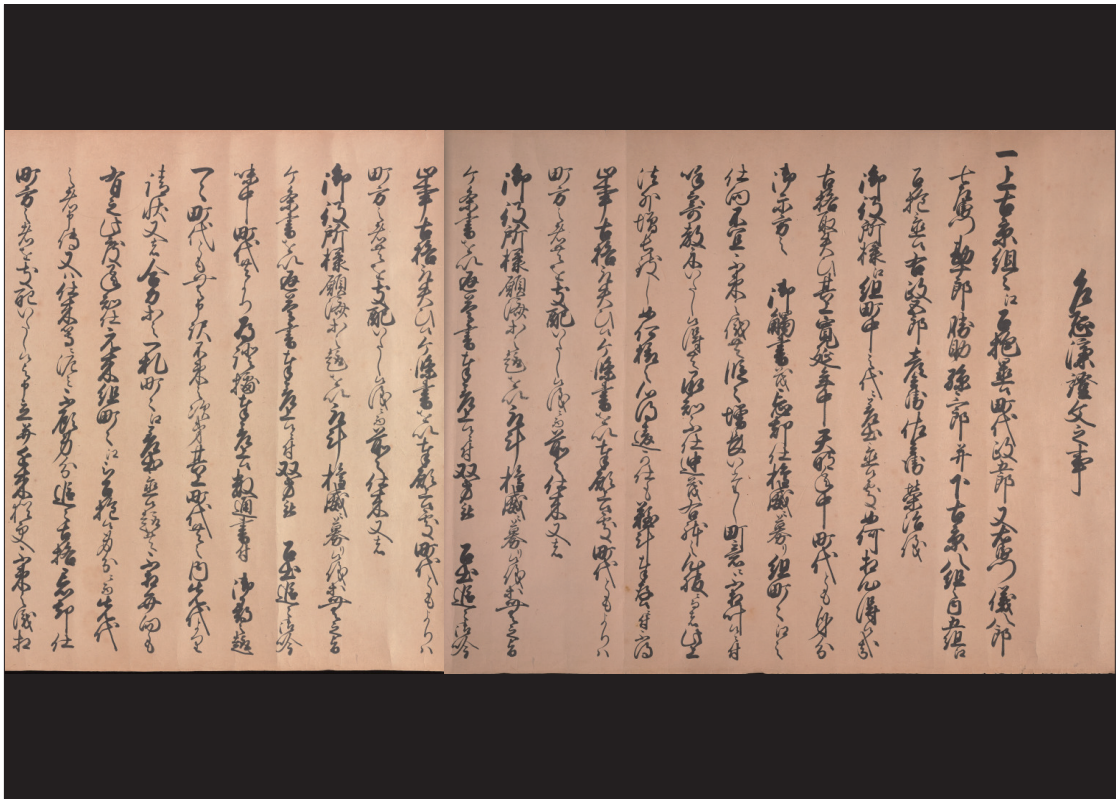
スライド 3

スライド 4



スライド 5

スライド 6

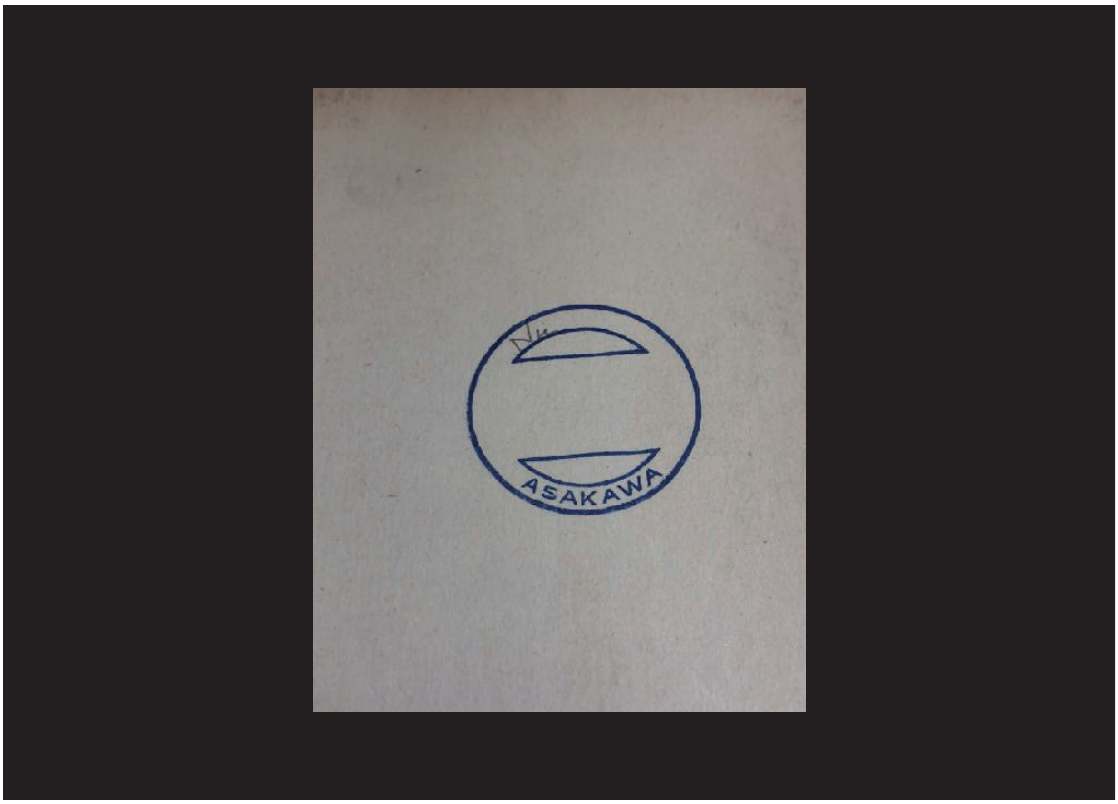


スライド 7

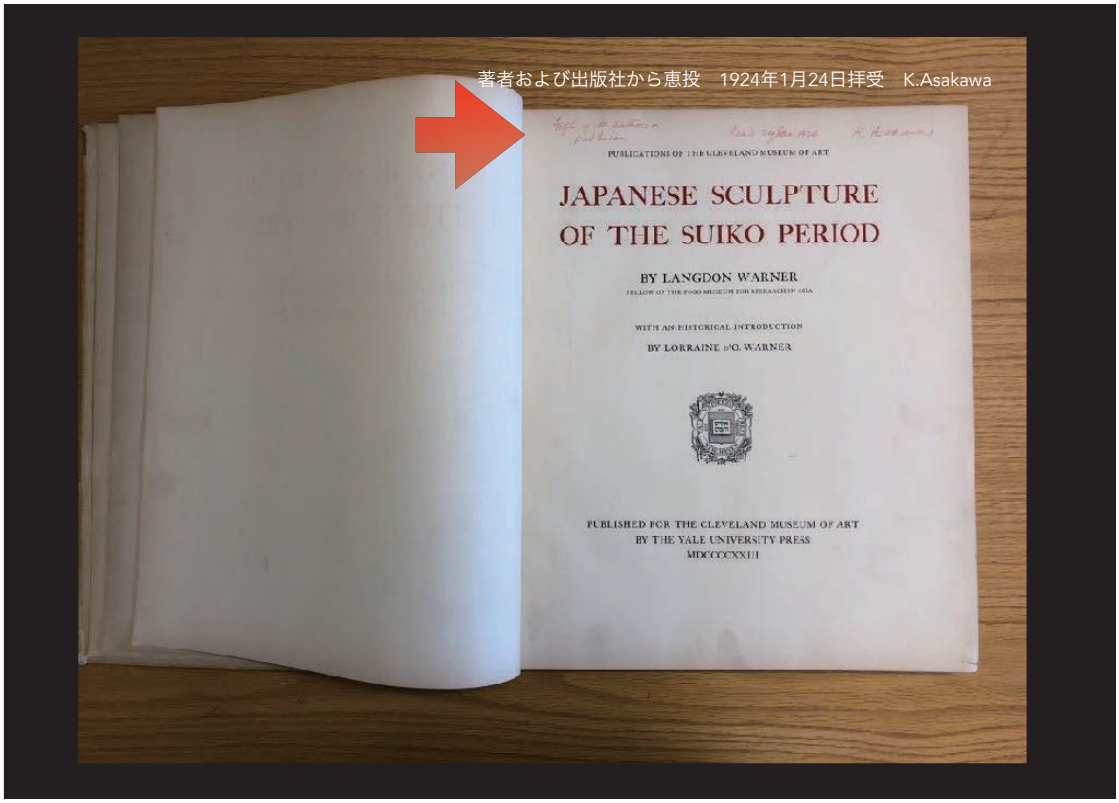
『推古期の日本彫刻』
ラングドン・ウォナー著
JAPANESE SCULPTURE
OF THE SUIKO PERIOD
BY LANGDON WARNER
1923年刊行

スライド 8

スライド 9

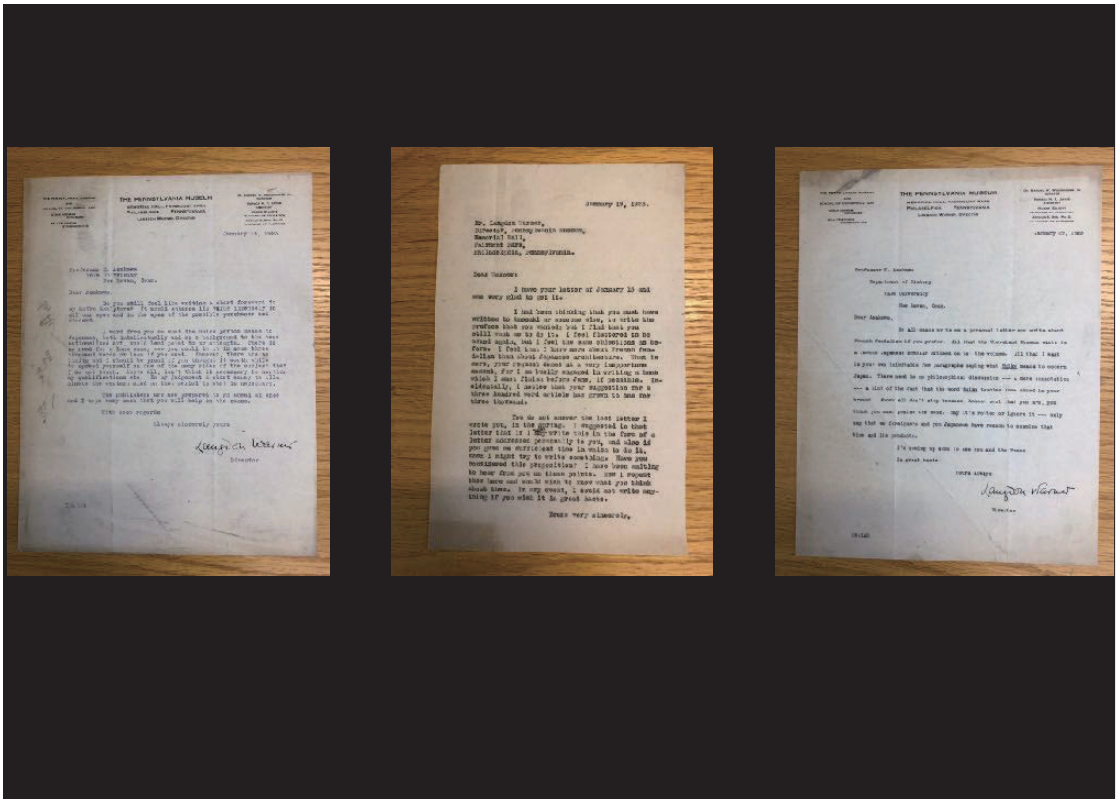


スライド 10

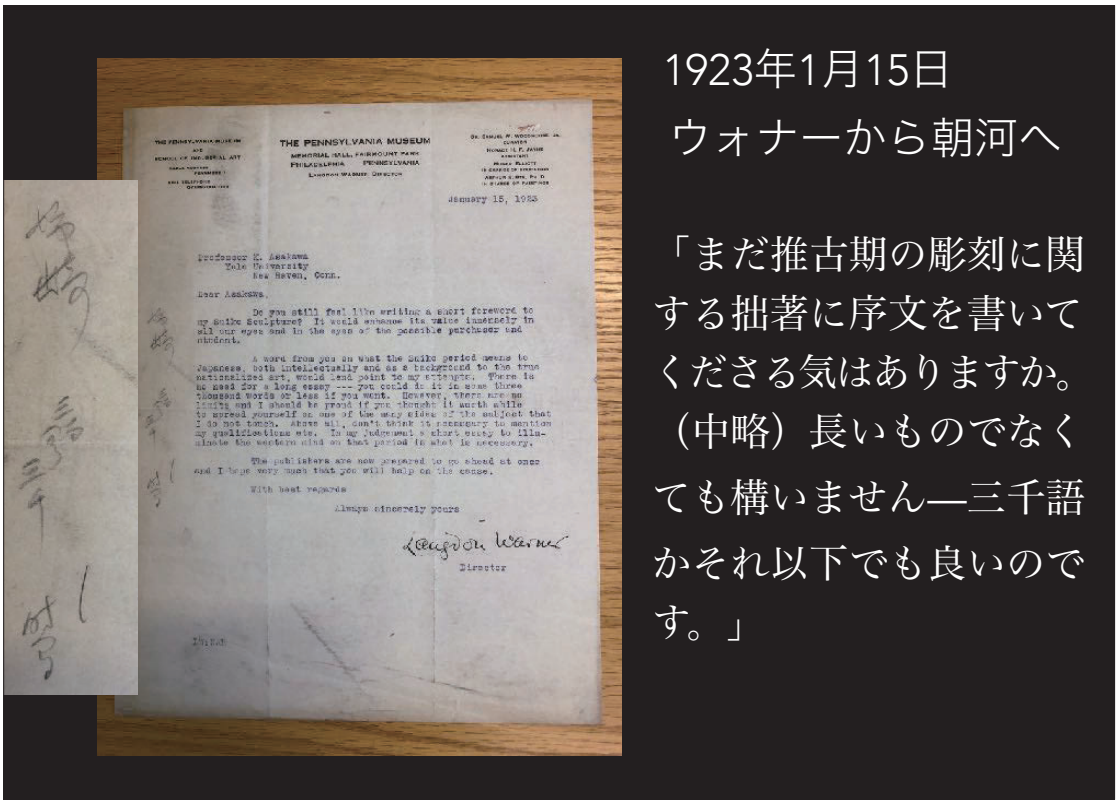


スライド 11

スライド 12



スライド 13



1923年1月15日
ウォナーから朝河へ

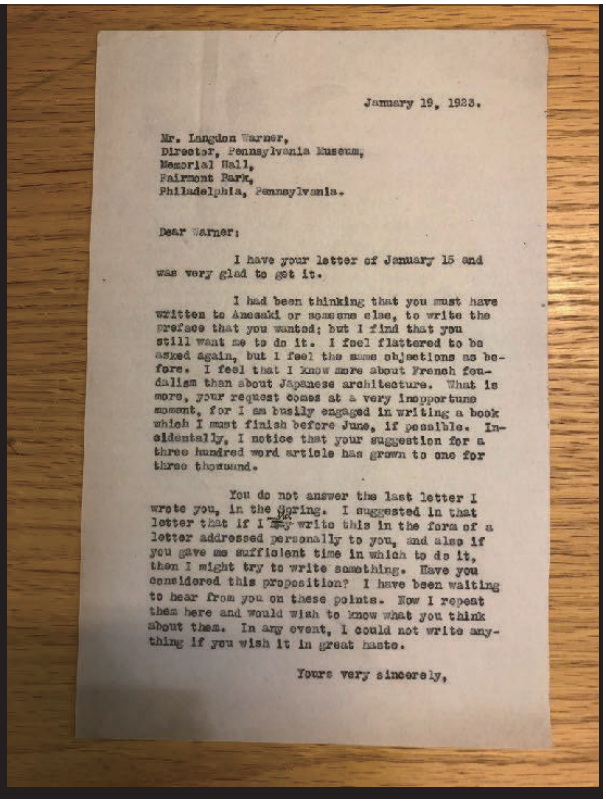
「まだ推古期の彫刻に関する拙著に序文を書いてくださる気はありますか。（中略）長いものでなくても構いません—三千語かそれ以下でも良いのです。」

スライド 14

1923年1月19日（草案）
朝河からウォナーへ

「あなたの著作への序文については姉崎か誰かに頼んでいるのかと思っていました。しかし私にとお考えのご様子…あまり気が進まないのです…どうしても忙しい…」

三百語→三千語？



January 19, 1923.

Mr. Langdon Warner,
Director, Pennsylvania Museum,
Memorial Hall,
Fairmont Park,
Philadelphia, Pennsylvania.

Dear Warner:

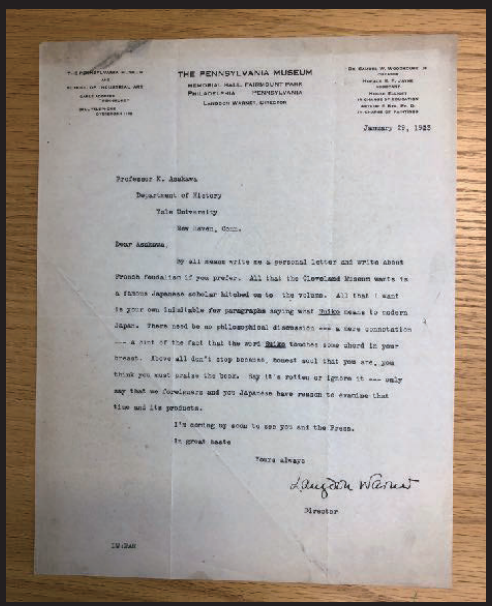
I have your letter of January 15 and was very glad to get it.

I had been thinking that you must have written to Anesaki or someone else, to write the Preface that you wanted; but I find that you still want me to do it. I feel flattered to be asked again, but I feel the same objections as before. I feel that I know more about French feudalism than about Japanese architecture. What is more, your request comes at a very inopportune moment, for I am busily engaged in writing a book which I must finish before June, if possible. Incidentally, I notice that your suggestion for a three hundred word article has grown to one for three thousand.

You do not answer the last letter I wrote you, in the spring. I suggested in that letter that if I may write this in the form of a letter addressed personally to you, and also if you gave me sufficient time in which to do it, then I might try to write something. Have you considered this proposition? I have been waiting to hear from you on these points. Now I repeat them here and would wish to know what you think about them. In any event, I could not write anything if you wish it in great haste.

Yours very sincerely,

スライド 15



THE PENNSYLVANIA MUSEUM
MEMORIAL HALL, FAIRMOUNT PARK
PHILADELPHIA PENNSYLVANIA
LANGDON WARNER, DIRECTOR

January 29, 1923

Professor K. Asakawa
Department of History
Yale University
New Haven, Conn.

Dear Asakawa,

By all means write me a personal letter and write about French feudalism if you prefer. All that the Cleveland Museum wants is a famous Japanese scholar latched on to the volume. All that I want is your own suitable few paragraphs saying what Buke means to modern Japan. There need be no philosophical discussion --- a mere connotation --- a hint of the fact that the word Buke teaches also chord in your breast. Above all don't stop because, honest soul that you are, you think you must explain the book. Say it's rotten or ignore it --- only say that we Occidentals and you Japanese have reason to examine that Buke and its products.

It's coming up soon to see you and the Press.

In great haste

Yours always

Langdon Warner

Director

1923年1月29日
ウォナーから朝河へ

「ぜひ個人的な手紙を書いてください。（中略）私が望んでいるのは現代日本には推古が意味するところのものとは何か、というあなたならではのご意見だけです。（中略）私たち外国人にも、あなたのような日本人にも、その時代とその産物について考えることは意味のあることだ、と書いていただきたいのです。」

スライド 16

朝河貫一博士没後70年記念シンポジウム
主催／国際文化会館、朝河貫一博士没後70年記念プロジェクト実行委員会

朝河貫一：天皇制民主主義の学問的起源

山内晴子　朝河貫一研究会理事

――― 続きまして、山内晴子様にご講演いただきます。山内様は朝河貫一研究会理事で、朝河貫一研究の第一人者です。司会の私が所属している早稲田大学アジア太平洋研究科の卒業生で、博士号も修士号も朝河貫一の研究で取得されています。『朝河貫一論：その学問形成と実践』（早稲田大学学術叢書 7）など、多数のご著書と論文もおありです。

本日は、このように著名な先生方とご一緒に報告させていただきますことを大変光栄に存じております。私は年のわりにはヤングスカラーでございますので、今日は博士論文『朝河貫一論：その学問形成と実践』の執筆の切っ掛けとなりました疑問「ラングドン・ウォーナーは日米開戦阻止のために、なぜ朝河に天皇への大統領親書を提案したか」という謎解きをご紹介したいと思います。

と申しますのも、2016 年 8 月 8 日に天皇陛下は「全身全霊をもって象徴の務めを果たしていくことが難しくなるのではないかと案じています」と、生前退位をにじませた「おことば」を表明され、来年 4 月 30 日が退位日と決まりました。本日は皇后陛下のお誕生日でございますが、敗戦後にも天皇制度が存続したのは占領軍の押し付けではなく、理想とする「民主主義」が日本に根付くことを願った朝河の歴史学があったことを皆さまと確認したいと思います。

朝河は、本郷教会の横井時雄牧師〔小楠の長男〕から洗礼を受けた東京専門学校時代と、最初の留学先ダートマス大学の学長タッカー牧師から、理想とする「民主主義」を体得します。それは、国家至上主義の対極にあって、集団ではなく、個人一人ひとりを大切に考え、寛容な精神と、神の前では何人も平等であるという大前提を抜きにしては成り立たない「民主主義」でした。差異と多様性を重んじ、反対の論も「平気に淡白に面と向かって説くことのできる」思いやりのある批判精神を奨励します。重要なのは、立憲主義に立ち、公の話し合いによる合意形成と現実的な解決を目指す姿勢、そして、他人の成功を喜ぶ度量の広さと、ユーモアを忘れない「民主主義」でした。

厚さ 10 センチぐらいの『朝河貫一書簡集』がございますが、朝河は書簡を通して、戦争を回避するために、国民に真実を伝える知識人の責任、学問と記録の大切さ、言論と報道の自由、民主主義教育の必要を訴え続けていました。

朝河は敗戦後軍部を追い出し、全体主義である共産主義化を防ぎ、日本をスムーズに民主主義国へ移行させるには、天皇制度との共存以外ないと、一見矛盾する異文化融合の戦後構想を欧米知識人に説得し続けていました。なぜこのような戦後構想を持つに至ったのでしょうか。

すべては戦争回避のための、1941 年 10 月 12 日付金子堅太郎枢密院顧問宛の朝河貫一長文書簡から始まります。この書簡の 3/4 は、なぜナチス・ドイツに追随してはならないかを解説しています。最後の 1/4 で、日本が取るべき外交を説いています。今、大河ドラマで『西郷どん』をやっておりますが、朝河は、軍部自身が徳川慶喜や勝海舟ほどに勇退する道義的勇気がないのであれば、改革は天皇の聖旨で断行する以外にないと提言します。イェール大学の Asakawa Papers に残る金子宛書簡の草稿の真ん中辺りに「海舟」や「慶喜」という字が見えると思います（資料スライド 6）。この書簡は、日本にはもう届きませんでした。英国検査官が開封後に、鄭重に朝河に返しています。

重要なのは、同じ内容の 1941 年 10 月 10 日付金子宛英文書簡です。これを読んだラングドン・ウォーナーが、日米戦争阻止のために、朝河に天皇への大統領親書を提案します。朝河は親書草案を書き、ウォーナーがスティムソン陸軍長官、ハル国務長官をはじめ、政府高官に渡します。朝河貫一研究会の故齋藤襄治教授は、マクリューシュ米国議会図書館長本人に、朝河の親書草案を大統領に渡したと確認されています。マクリューシュはまた後に出てきますので、ちょっと覚えておいて下さい。朝河の草案は実際の親書に一部使われましたが、内容は朝河の意図したものではなく、ご存知のとおり届いたのは 12 月 8 日の開戦後でした。

この表は、金子宛英文書簡と親書草案を受け取った人たちです（資料スライド 8。〔拙著『朝河貫一論』524 頁〕）。これだけの人たちが読んでいるということは、朝河の金子宛英文書簡は、その頃流行っていたオープンレター（回覧書簡）だったのです。信頼出来る知識人に同じ内容の書簡を送り、朝河は名前を伏せることを条件に、回覧を依頼しています。私は、イェール大学の Asakawa Papers に金子宛英文書簡の 5 種類の英文タイプの原稿を見つけました。一つだけお見せしますと、これは 5 番目の一番訂正のないものですが、Letter from a Japanese Historian to Count K., Privy Councillor と、名前を書いておりません。（資料スライド 10）

なぜ、ウォーナーは金子宛書簡を読んで、日米開戦阻止のために朝河に天皇への大統領親書を提案したのかなと考えておりました時、ウォーナーが、朝河の著書や論文の中に天皇制度に関するの学説があることを知っていたからではないか、朝河の著書や論文の中に「民主主義と天皇制

度との共存」という、朝河の戦後構想に導く天皇や天皇制度の学説があるのではないかと思いつきまして、調べました。朝河がそれをどのように欧米人に紹介しているかは、私の『朝河貫一論』第８章に書きましたが、ご一緒に見ていきたいと思います。

まず 1903 年の『大化改新』です。朝河の著書は目次と注や索引が詳しく、後の研究者が大変助かるのですが、索引の Emperor の E. and Reform は序論で「大化改新と明治維新を結ぶのは、天皇である、天皇が二つの制度的大変革を成功させた」と書いています（資料スライド 13)。theory of succession では「天皇が現れると八百万の神々が登場しなくなる」と、天皇が一部族の首長として大和を征服したと記しています。征服理論は、欧米知識人には受け入れやすいのです。Relation to the people, tradition of には、初期の天皇の生活は素朴で、自由に住まいもかえ、人々と交わり、愛嬌のある欠点さえ、さらけ出した人間的関係であったと紹介しています。「朝鮮人と中国人が帰化し、北方や南方の未開人が同化され…単一民族の理論は、せいぜい体裁の良いフィクションであることはいうまでもない」とあっさりと否定して、私たちを驚かせるのです。さらに結論の E. and the State の冒頭で「大化改新が天皇個人ではなく、天皇という制度によって引き起こされた事実が、決定的な特徴」であると、「天皇制度」という言葉を使って、重要なメッセージを提示しています（拙訳)。

一般に、憲法上の天皇の地位を欧米人に紹介したのが、1907 年ロッジ編 *The History of Nations* シリーズ *Japan* の第 16 章 “The Constitution in Theory and in Practice, 1893-1906” です。朝河が資料請求して、伊藤博文の『憲法義解』を基に、天皇をはっきりと「国家の機関」と紹介しています。これが 1935 年ぐらいまで通説だった天皇機関説です。伊藤の師のウィーン大学のシュタイン教授は君主を国家の一機関であるシンボルと捉らえております。この天皇機関説が、敗戦後に天皇無罪論を占領軍に説得させるわけです。天皇は専制君主ではなく、建国以来、天皇を政治上非人格と見なす習慣があると説明します。この *Japan* は、私の博士論文の主査の山岡道男教授がトレド大学図書館で発見された資料です。

次は、1912 年の “Japan, Old and New” の付録「立憲君主としての明治天皇」です。「田舎サムライの低い階級から…はい上がった者たちと、若い天皇はたえず一緒におり」、15 歳で即位した明治天皇が「試練に耐え、支配者としての性格を顕著に発展させ」て、社会的高貴さと政治的な非個人性に徹して 45 年間を治世したと紹介しています。また天皇は常に国会図書館で法律の原本と他の主な資料類を熟考のために閲覧し、大臣は代るが天皇は代らないため、誰よりも国事に精通したと書いています。

次に注目したいのが、先ほど Botsman 先生がご紹介くださった 1923 年のウォーナー夫妻の

『推古期の日本彫刻』への序文です。朝河は、法隆寺が建立されたときに、推古天皇の甥で摂政の聖徳太子が導く指導者達、つまり天皇制度が、土着文化と大陸文化を融合する際に大きな働きをなしたと説明しています。

続いて 1929 年の『入来文書』を見てみましょう（資料スライド 17)。天皇制度に関して大事なのは､英文で出版する際に加えられた第 155 号｢旧体制の移行にかかわる文書　1860 年～ 1870 年｣です。これは、制度大変革期における天皇制度の有効性を欧米知識人に再確認させました。前年には張作霖爆殺事件がおきています。155A と 155B は、1920 年に渋沢栄一から朝河に献本された『徳川慶喜公伝』を基に書いています。155A は（『徳川慶喜公伝』巻 7，116-122 頁の平山敬忠日記から〔拙訳〕）｢慶應三年六月國律案｣で､徳川幕府が天皇を政治的機関と見なしています。｢大政奉還｣と普通いいますが、155B は『徳川慶喜公伝』では二條摂政記の｢慶應三年十月十四日政権奉還の上表｣です（資料スライド 18)。155C は｢版籍奉還の上表｣です。

1930 年に、朝河はマルク・ブロックとセリグマン編『社会科学百科事典』に日欧の封建制度を共同執筆します。ブロックが、主宰する *Annales* の書評で、朝河が執筆した日本の封建制度について最も重視したのは、最終的に従士制を破壊して、天皇制度が明治維新を成し遂げたことでした。

以上、朝河の主要著書と論文に一貫して見られる天皇制度に関する学説は、圧倒的に優れた異文化を受け入れる制度的大変革を成功させたのは、連綿と続いたが、専制的ではなかった天皇制度であるという学説です。この学説をウォーナーは熟知していたので、金子堅太郎宛英文書簡を読んですぐに、日米開戦阻止のために朝河に大統領親書を提案することができたのです。｢民主主義｣と天皇制度の共存という一見矛盾したように見える異文化融合の朝河の戦後構想は、1902 年の博士論文｢大化改新｣以来の歴史学から導き出された結論でした。朝河の学説が、天皇制民主主義の学門的起源です。

1942 年、弟子のウィルコックス宛朝河書簡もオープンレターで、たくさんの人が読んでいます。朝河は｢たった一つの私の小さな望みは、軍部を改心させることではなく（もう改心させることなどできないわけです)、彼等を追い払うことの出来るただ一つの権力、すなわち天皇による追放の可能性であり､枢密院を通して実現可能であったのです。現在は､大化改新や明治維新と同様です。宣戦は、…軍部簒奪者の不忠な裏切り｣と説明しています。

1944 年フィッシャー宛オープンレターにも｢徹底した改革がいかなるものであっても、…天皇の是認と支持が必要になる｣と記しています。フィッシャーは同期のスティムソンと共に、イェール大学のアメリカを牛耳るエリート集団の秘密結社スカル＆ボーンズのメンバーであることから、

指導者層に浸透したことが窺えます。

日本を理解するための、アメリカの学者達の取り組みもありました。その一つは、私が発見したACLS〔全米学術団体協議会〕日本研究委員会です（資料スライド23 ~ 25）。朝河は、1930年創設メンバーの一人で1936年度まで記録が残っています。初代委員長はウォーナーだったのです。日本研究委員会が、最初に日本に送った留学生が、『戦後日本の設計者』のヒュー・ボートン、駐日大使のエドウィン・O・ライシャワー、アメリカの心理作戦「日本計画」に重要な役割を果たしたとされるチャールズ・ファーズです。彼らは二・二六事件に遭遇し、1941年までには揃ってACLS日本研究委員会のメンバーになります。三人は極東政策の立案と遂行を通して、朝河の学説に基づく天皇制度と「民主主義」の異文化融合の戦後構想を実現させたのです。

朝河の親書草案を大統領に渡すことになるマクリューシュ議会図書館館長は、COI〔情報調整局〕が発足する際の1941年7月、ACLS・NARA〔国立公文書館〕・SSRC〔全米社会科学研究協議会〕の要人を集めています。朝河は日本に関する知識と意見を、書簡を通して語ることは、自分の使命であると考えていますが、プロパガンダは評価しません。

1946年夏にウォーナーに宛てた100頁ぐらいの書簡があります。この書簡で朝河は、日本敗北の原因は、日本人の「妥協・追従」の習性で、議論せず無抵抗に「黙従」した国民が、当局によってすっきりと整えて表現された命令を遂行し、知識人はそれを説明する事で忠実に支えたからだと分析しています。この手書き書簡の私の翻刻・翻訳は、『朝河貫一資料』（早稲田大学アジア太平洋研究センター刊）に出ておりますので、ご覧になっていただきたいと思います。

日本は民主主義国になってほしい、平和国家になってほしいと心から願った朝河の学説に基づいていたからこそ、「民主主義」と天皇制度との共存という朝河の戦後構想が実現したのだと思います。Peace Advocateの朝河没後70年、日本は国民も他国民も一人も戦死させずに憲法9条を守ってきました。朝河の書簡は、今も私たちに、歴史を学び、「市民にふさわしい良心を持とう」と呼びかけています。「市民一人ひとりが個人的責任感」を持てるように教育されているか、文民統制の危機はないか、真実を伝えるために記録と報道と言論の自由を確保して平和を希求しているかを監視し、警告を発する必要があると訴えていると思います。ご清聴ありがとうございました。

◆ 質疑応答

安齋：　シンポジウム実行委員長の安齋です。講演に登場されましたウォーナー氏に関するドキュメンタリー映画「ウォーナーの謎のリスト」について感想をいただけませんか。

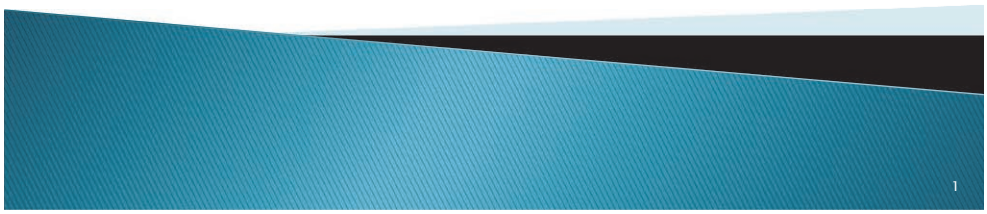
山内： 会場には「ウォーナーの謎のリスト」を制作された金高謙二監督がいらっしゃいますので、私よりも監督から一言よろしくお願いいたします。

金高： 私は、ラングドン・ウォーナーについて、日本の文化財を救った人だということで、映画にしようと思いました。今日いらっしゃっている矢吹先生や Botsman 先生にインタビューをさせていただいて、この映画が出来上がりました。その中で、後半の 3 分の 1 は朝河貫一が出てきます。私はそれまでまったく朝河貫一のことを知らなかったのですが、こんな偉大な人が日本人にいたのか、もっと知るべきだと、映画を作っていく中で強く感じました。安齋さんのお力で、皆さまのお手元に DVD をプレゼントさせていただきましたので、ぜひご覧いただき、朝河貫一を世間に広めていただければと思います。

朝河貫一博士没後70年記念シンポジューム
於:国際文化会館　岩崎小彌太記念ホール

朝河貫一
―天皇制民主主義の学問的起源―©

山内　晴子Ph.D.(朝河貫一研究会理事)
2018.10.20

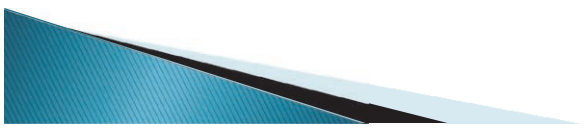


1

スライド 1

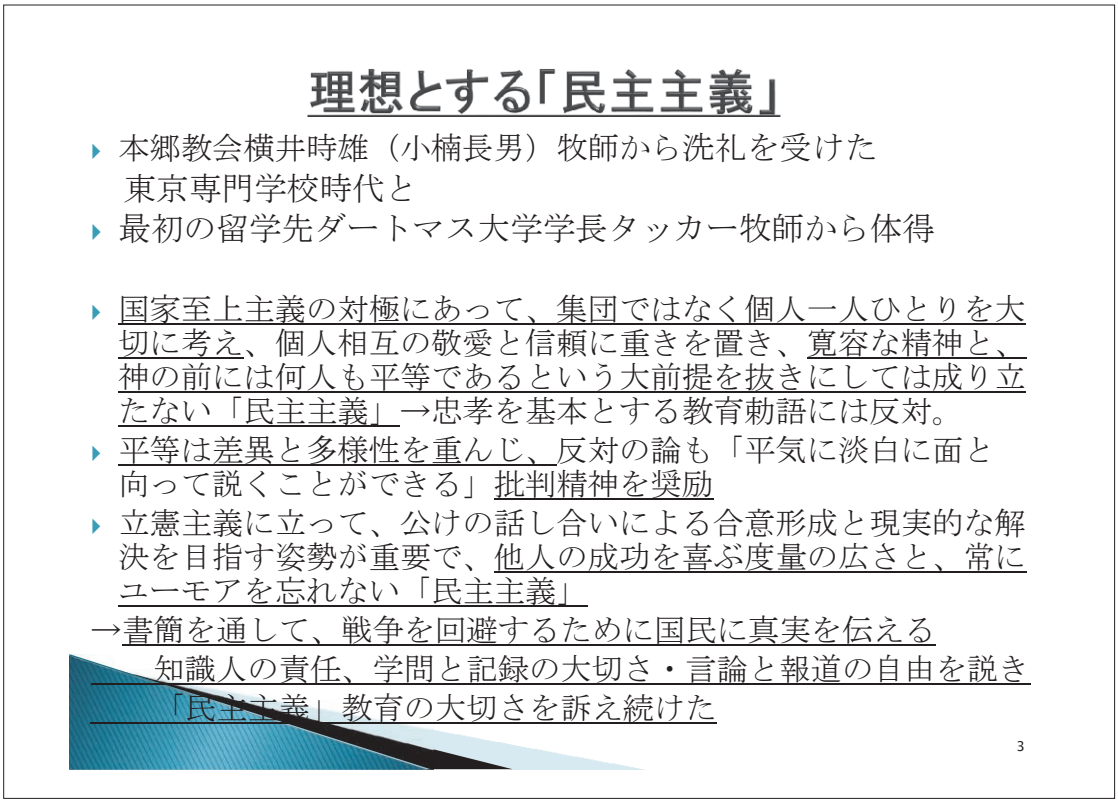
はじめに

- 本日は、博士論文『朝河貫一論:その学問形成と実践』の執筆の切っ掛けとなった疑問「ラングドン・ウォーナーは日米開戦阻止のために、なぜ朝河に天皇への大統領親書を提案したか」の謎解きをご紹介したいと思います。
- 2016年8月8日天皇陛下は、「全身全霊をもって象徴の務めを果たしていくことが、難しくなるのではないかと案じています」と生前退位をにじませた「おことば」を表明され来年4月30日が退位日と決まりました今日
- 敗戦後も天皇制度が存続したのは、占領軍の押し付けではなく、
- 理想とする「民主主義」が日本に根付くことを願った朝河の歴史学があったことを皆様と確認したいと思います。

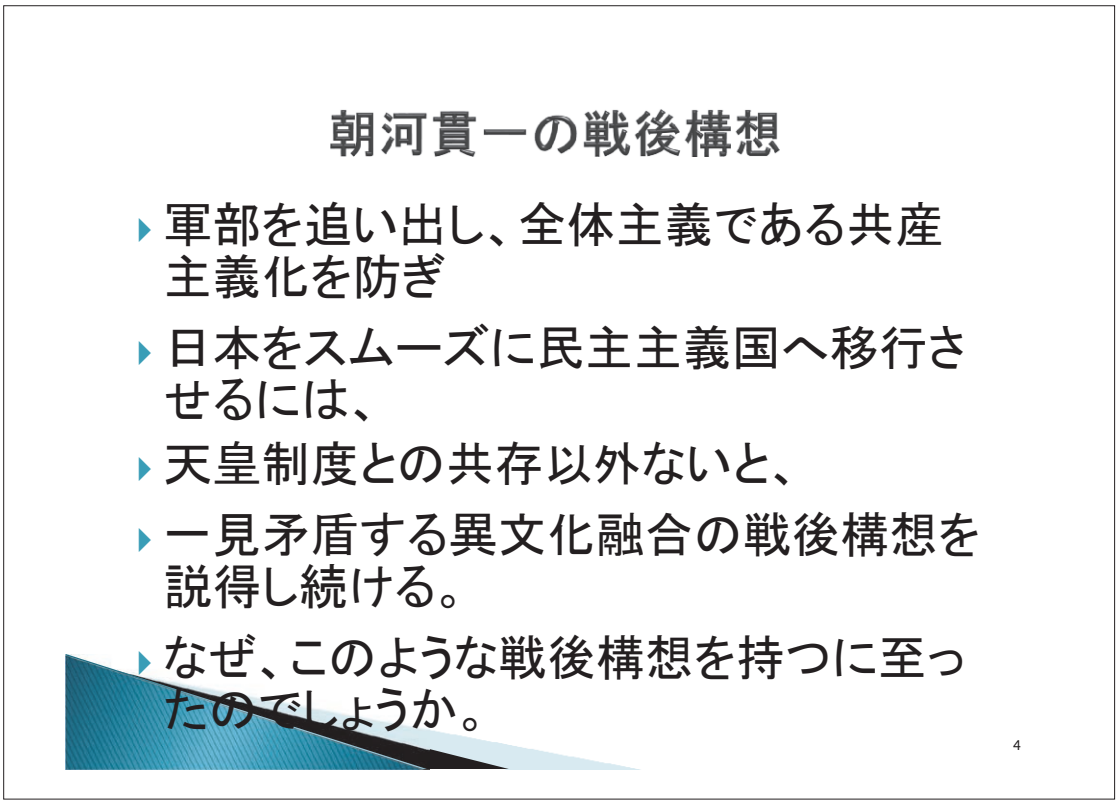


2

スライド 2


理想とする「民主主義」
本郷教会横井時雄（小楠長男）牧師から洗礼を受けた
東京専門学校時代と
最初の留学先ダートマス大学学長タッカー牧師から体得
国家至上主義の対極にあって、集団ではなく個人一人ひとりを大切に考え、個人相互の敬愛と信頼に重きを置き、寛容な精神と、神の前には何人も平等であるという大前提を抜きにしては成り立たない「民主主義」→忠孝を基本とする教育勅語には反対。
平等は差異と多様性を重んじ、反対の論も「平気に淡白に面と向って説くことができる」批判精神を奨励
立憲主義に立って、公けの話し合いによる合意形成と現実的な解決を目指す姿勢が重要で、他人の成功を喜ぶ度量の広さと、常にユーモアを忘れない「民主主義」
→書簡を通して、戦争を回避するために国民に真実を伝える
知識人の責任、学問と記録の大切さ・言論と報道の自由を説き
「民主主義」教育の大切さを訴え続けた
3

スライド 3


朝河貫一の戦後構想
軍部を追い出し、全体主義である共産主義化を防ぎ
日本をスムーズに民主主義国へ移行させるには、
天皇制度との共存以外ないと、
一見矛盾する異文化融合の戦後構想を説得し続ける。
なぜ、このような戦後構想を持つに至ったのでしょうか。
4

スライド 4

すべては戦争回避のための1941年10月12日付金子堅太郎（枢密院顧問官）宛朝河書簡から始まる

この書簡の3/4は、ナチに追随してはならないと、ドイツの国民性から解き明かし説得
最後の1/4で日本が取るべき外交を解き、

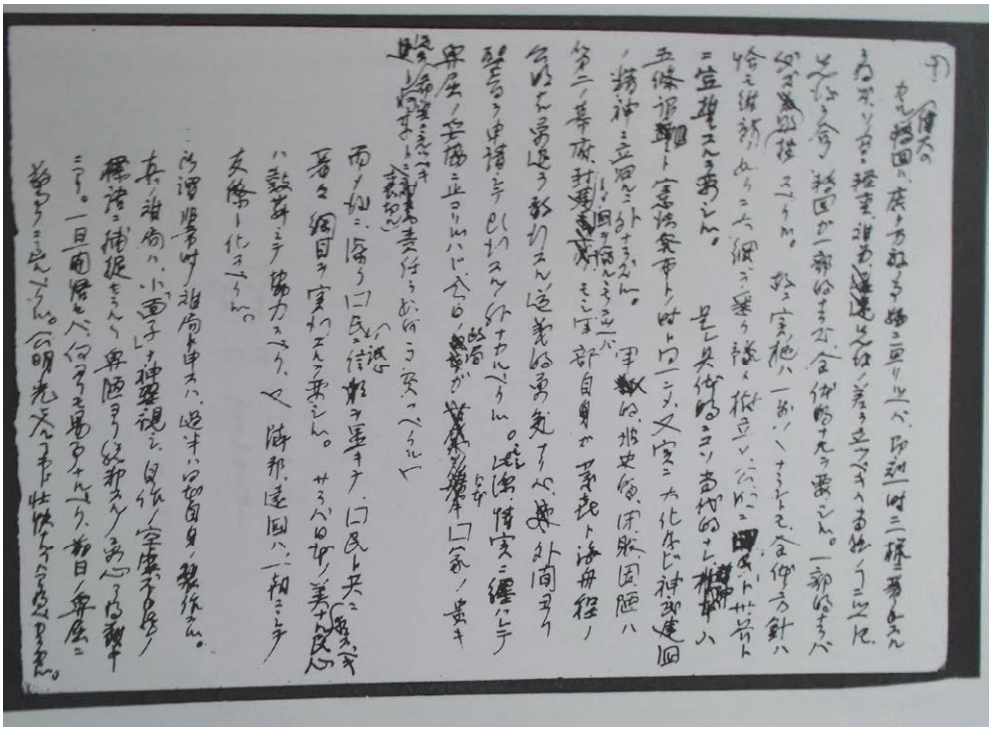
→軍部自身が、慶喜や海舟ほどの、勇退する道義的勇気がないのであれば、改革は天皇の聖旨で断行する以外にないと説得

（モシ軍部自身ガ 慶喜ト海舟程ノ 公明ナル勇退ヲ敢行スル 道義的勇気ナクバ 外間ヨリ聖旨ヲ申請シテ断行スルノ外ナカルベク候）

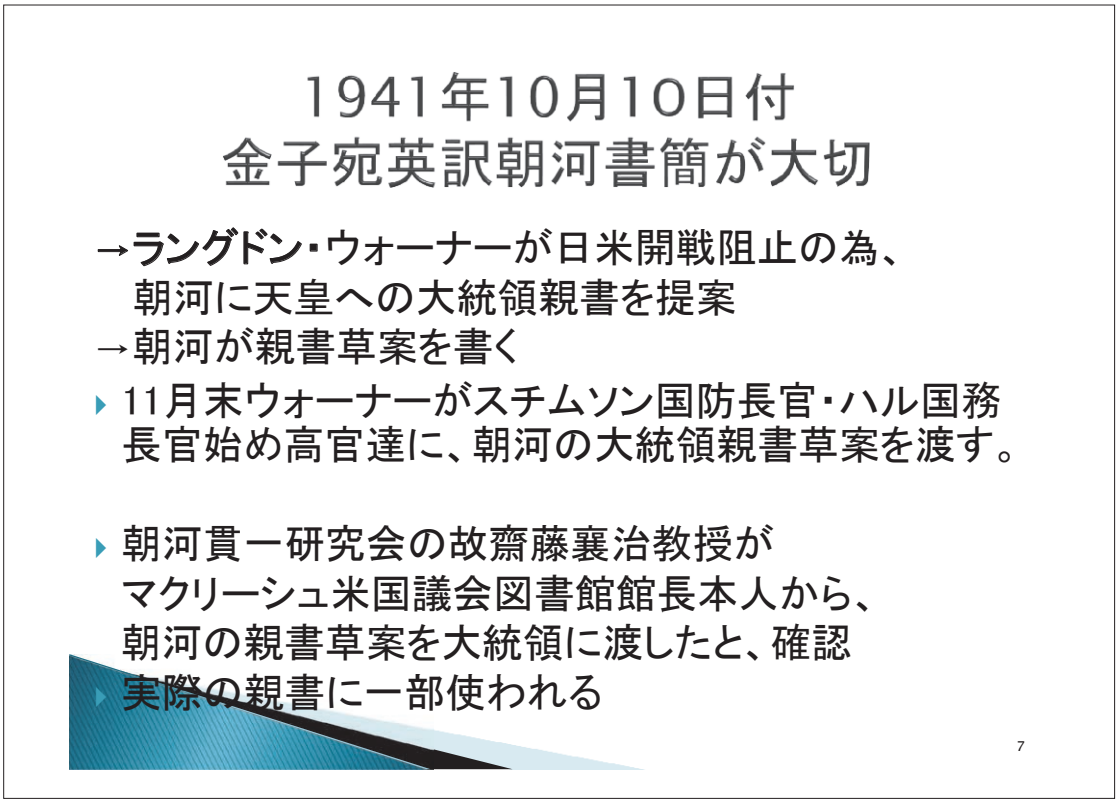
- この書簡は英国検査官が開封後に鄭重に返却←日本にはもう届かない

5

スライド 5



スライド 6



スライド 7

1941年10月10日付金子堅太郎宛英文書簡・大統領親書草案を受信したことが確認できる書簡一覧

A= Asakawa Papers Series No.1, Box No.3, のFolder No., B=『朝河貫一文書』の頁。
C-=『朝河貫一書簡集』の頁。山内作成。山内『朝河貫一論』524頁を修正加筆。

年月日	発信者または宛名（ ）内はその他に読んだ人物	A	B	C
1941.11.14.	イェール大学シーモア学長書簡	1	21008	
1941.11.18.	ラングドン・ウォーナー書簡	1	21056-7	
1941.11.30.	ラングドン・ウォーナー書簡（スティムソン陸軍長官、ハル国務長官、サムナー・ウェルズ国務次官、アーチボールド・マクリューシュ議会図書館長、ローズヴェルト大統領、上院外交問題委員会） （ ）内は大統領親書草案と共に1941年11月19日付ウォーナー宛朝河書簡を受け取った高官.	1	21607-8 21089-90	
1941.12.22.	ニューヨーク在住ダートマス大学元ドイツ語教授W. G. スタウトン書簡	2	30097-8	
1941.12.30.	米国国際補助語協会（IALA）の協力メンバーアリス・V・モリス書簡（ゴーデン夫人、モリス氏、ローレンス・ヒューズ）	2	30100	
1942.1.3.	イェール大学ジョン・バーダン書簡（Sam, Bert, Sid）	3	30103-5	
1942.1.3.	イェール大学歴史学教授チャールズ・M・アンドルーズ書簡	3	30106-8	
1942.1.4.	戦略情報局（OSS）調査分析部（R&A）シャーマン・ケント書簡	3	30110-12	
1942.1.8.	アンティオーク大学学長モーガン書簡	3	30117-22	794-796
1942.1.14.	上院議員・教育労働委員会エルバート・トーマス書簡	3	30123-4	

8

スライド 8

金子宛英文書簡はOpen Letter

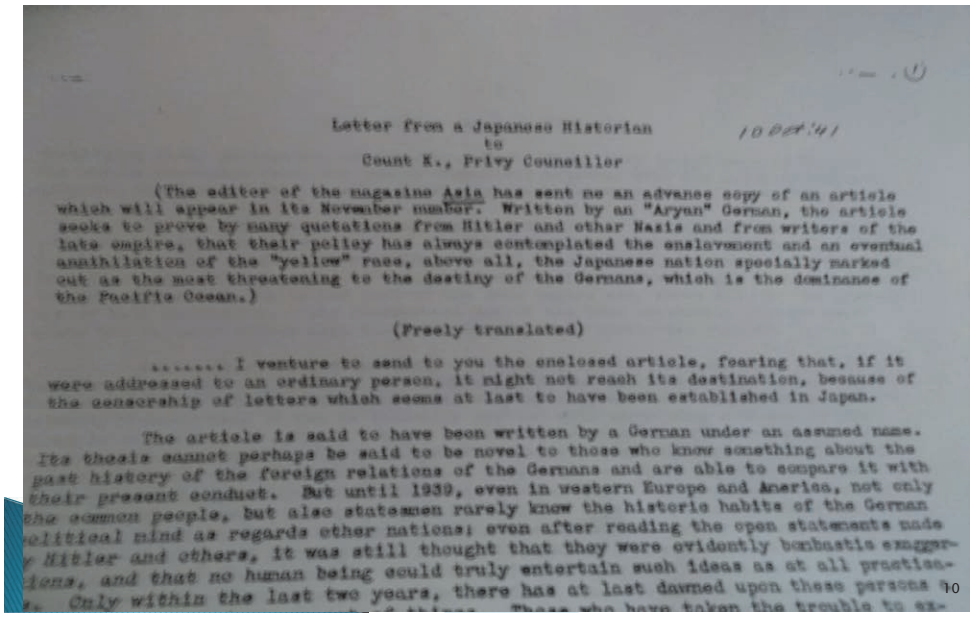
Open Letter
（信頼できる知人に送り、
名前を伏せて回覧を依頼した書簡）

Yale大学図書館のAsakawa Papersに、
5種類の英文タイプの10月10日付金子宛書簡
（カーボンコピー原稿も含む）

9

スライド 9

Asakawa Papersの
5番目の金子宛英文open letter



Letter from a Japanese Historian
to
Count K., Privy Counsiller

(The editor of the magazine Asia has sent me an advance copy of an article which will appear in its November number. Written by an "Aryan" German, the article seeks to prove by many quotations from Hitler and other Nazis and from writers of the late empire, that their policy has always contemplated the enslavement and an eventual annihilation of the "yellow" race, above all, the Japanese nation specially marked out as the most threatening to the destiny of the Germans, which is the dominance of the Pacific Ocean.)

(Freely translated)

..... I venture to send to you the enclosed article, fearing that, if it were addressed to an ordinary person, it might not reach its destination, because of the censorship of letters which seems at last to have been established in Japan.

The article is said to have been written by a German under an assumed name. Its thesis cannot perhaps be said to be novel to those who know something about the past history of the foreign relations of the Germans and are able to compare it with their present conduct. But until 1939, even in western Europe and America, not only the common people, but also statesmen rarely know the historic habits of the German political mind as regards other nations; even after reading the open statements made by Hitler and others, it was still thought that they were evidently bombastic exaggerations, and that no human being could truly entertain such ideas as at all practicable. Only within the last two years, there has at last dawned upon these persons

10

スライド 10

なぜウォーナーは金子宛書簡を読んで、日米開戦阻止の為に朝河に天皇への大統領親書を提案したのか？

→①ウォーナーが、朝河の著書や論文の中に、天皇制度に関する学説があることを知っていたからではないか？

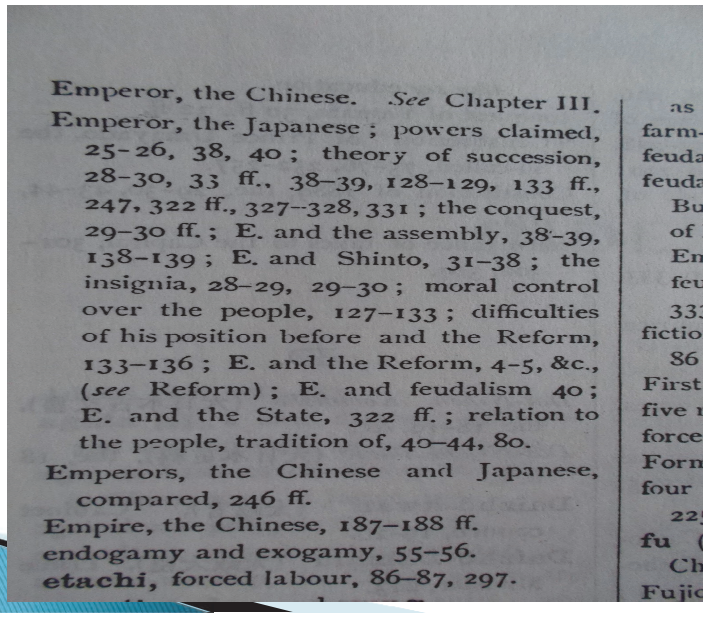
→②朝河の著書や論文の中に、「民主主義」と天皇制度の共存の朝河の戦後構想を導く天皇や天皇制度の学説があるのではないか？

- 朝河が、天皇と天皇制度をどのように欧米知識人に紹介しているかをご一緒に見ていきたいと思います。

11

スライド 11

朝河の論文の、読めば内容の分かる目次・詳しい注・詳しい索引（大化改新Emperor,349頁）を手掛かりに



Emperor, the Chinese. *See* Chapter III.
Emperor, the Japanese; powers claimed, 25–26, 38, 40; theory of succession, 28–30, 33 ff., 38–39, 128–129, 133 ff., 247, 322 ff., 327–328, 331; the conquest, 29–30 ff.; E. and the assembly, 38–39, 138–139; E. and Shinto, 31–38; the insignia, 28–29, 29–30; moral control over the people, 127–133; difficulties of his position before and the Reform, 133–136; E. and the Reform, 4–5, &c., (*see* Reform); E. and feudalism 40; E. and the State, 322 ff.; relation to the people, tradition of, 40–44, 80.
Emperors, the Chinese and Japanese, compared, 246 ff.
Empire, the Chinese, 187–188 ff.
endogamy and exogamy, 55–56.
etachi, forced labour, 86–87, 297.

12

スライド 12

①1903年 *The Early Institutional Life of Japan: A Study in the Reform of 645 A.D.*『大化改新』

- 序論:「大化改新と明治維新を結ぶのは、天皇」と、天皇が2つの制度的大変革を成功させた
- theory of succession「天皇が現れると八百万の神々が登場しなくなる」→天皇が一部族の長として征服
- Relation to the people, tradition of 天皇の生活は素朴で自由に住まいも変え人々と交わり、愛嬌のある欠点さえ、さらけ出した人間的関係にあったと紹介。

「朝鮮人と中国人が帰化し、北方や南方の未開人が同化され・・・単一民族の理論は、せいぜい体裁の良いフィクションであることはいうまでもない」とあっさり否定。

- E. and State「大化改新が天皇個人ではなく、天皇という制度によって引き起こされた事実が、決定的な特徴」

13

スライド 13

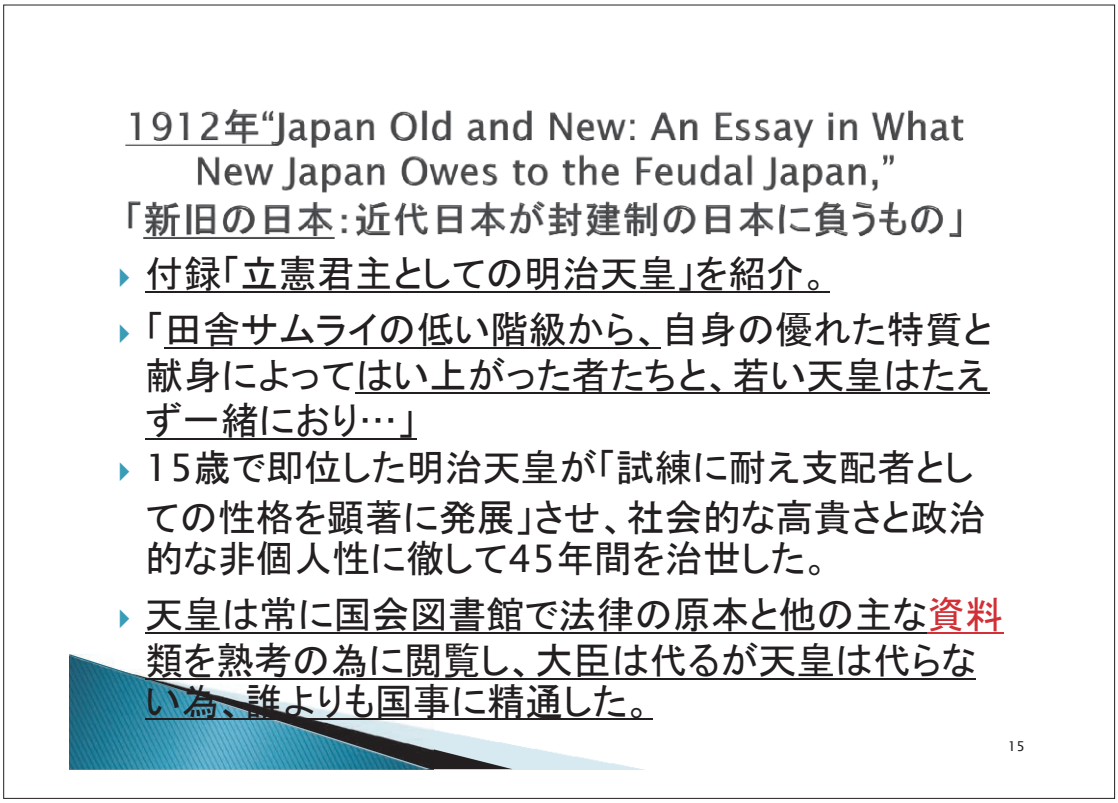
1907年～ロッジ編*History of Nations* シリーズの*Japan*_第16章 "The Constitution in Theory and in Practice, 1893-1906"

- 憲法上の天皇の位置を、伊藤博文の『憲法義解』を基に、天皇をはっきりと「国家の機関」と紹介→天皇機関説。
- 伊藤の師、ウィーン大学の国家学者ローレンツ・フォン・シュタインは、国家有機体論者で、君主は国家の一機関であるシンボルと捕らえた。
- 天皇機関説が敗戦後に天皇無罪論を占領軍に説得させる
- 主権者である天皇は陸海軍の統帥権をもつが、専制君主ではなく、建国以来、天皇を政治上非人格と見なす習慣があると説明します。

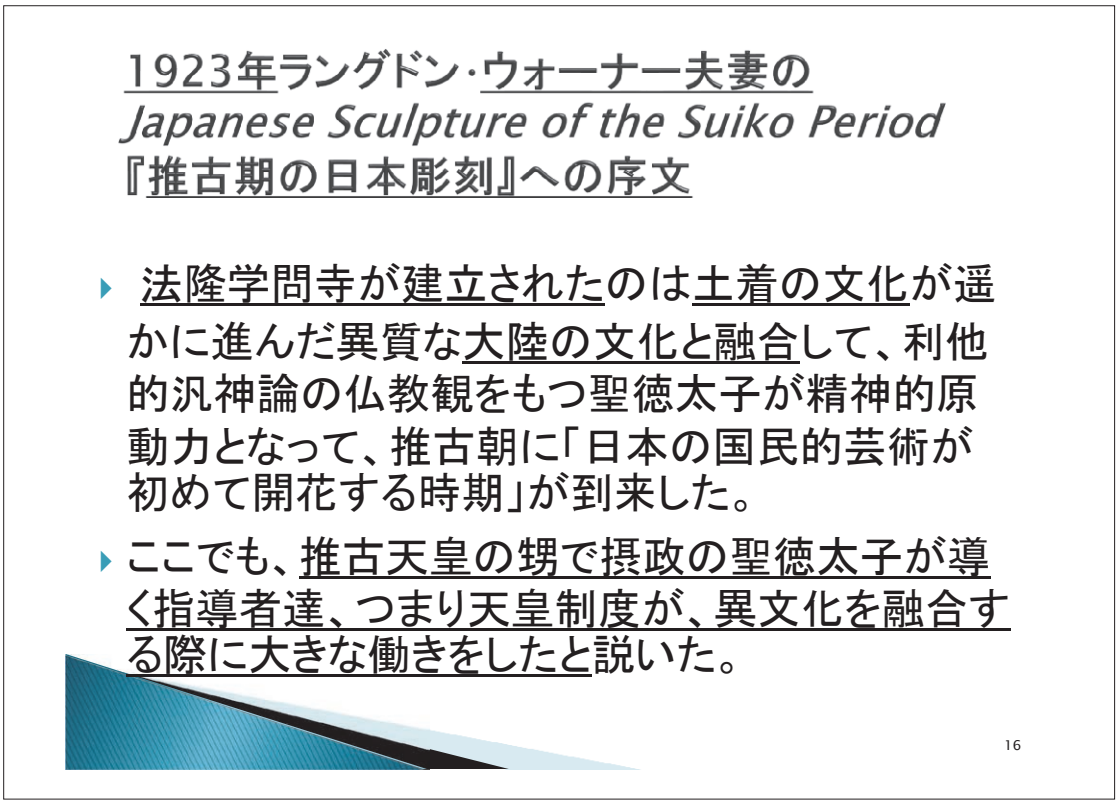
（*Japan*は、山岡道男教授がトレド大学図書館で発見された資料）

14

スライド 14



スライド 15



スライド 16

1929年 *The Documents of Iriki: Illustrative of the Development of the Feudal Institutions of Japan*
『入来文書：日本における封建制度の発展の実例』

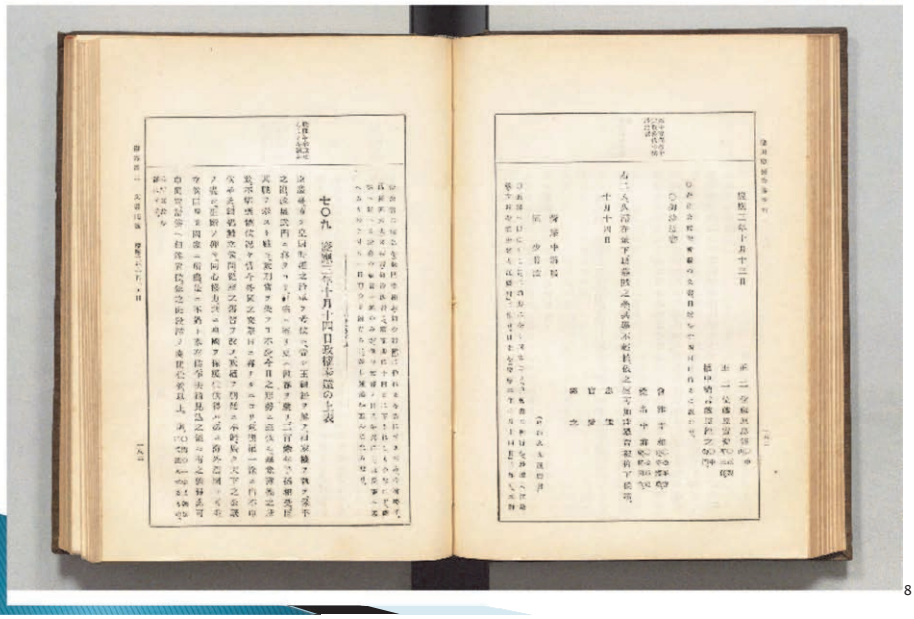
- 1929年に英文で出版する際に加えられた第155号「旧体制の移行にかかわる文書　1860年～1870年」
- →制度大変革期における天皇制度の有効性を欧米知識人に再確認させた（前年、張作霖爆殺事件）

- 155A（『徳川慶喜公伝』巻7、116-122頁、平山敬忠日記から）は、「慶應三年六月國律案」。日本の古代史から説き起こし将軍の権力は君から委任されたとする理論で、徳川幕府が天皇を政治的機関と見なす
- 155B（『徳川慶喜公伝』巻7、183頁、二條摂政記から）は「慶應三年十月十四日政権奉還の上表」で、世界の列強に伍す為、政治権力を朝廷に奉還し、全ての権威を結合して公論を広く求め、天皇の判断により皆と共に国土を守らねばならないとする慶喜の言葉。
- 155Cは（太政官日誌、明治2年、No.9、島津久光公実記、巻７、1-3頁他）の「毛利敬親、島津忠義、鍋島直大、山内豊信の版籍奉還の上表」で、封建支配が本質的に簒奪であり、高い志をもつ四藩の大名が、世襲の領地を自発的に天皇の政府に返上する事を提案した天皇への共同覚書。

17

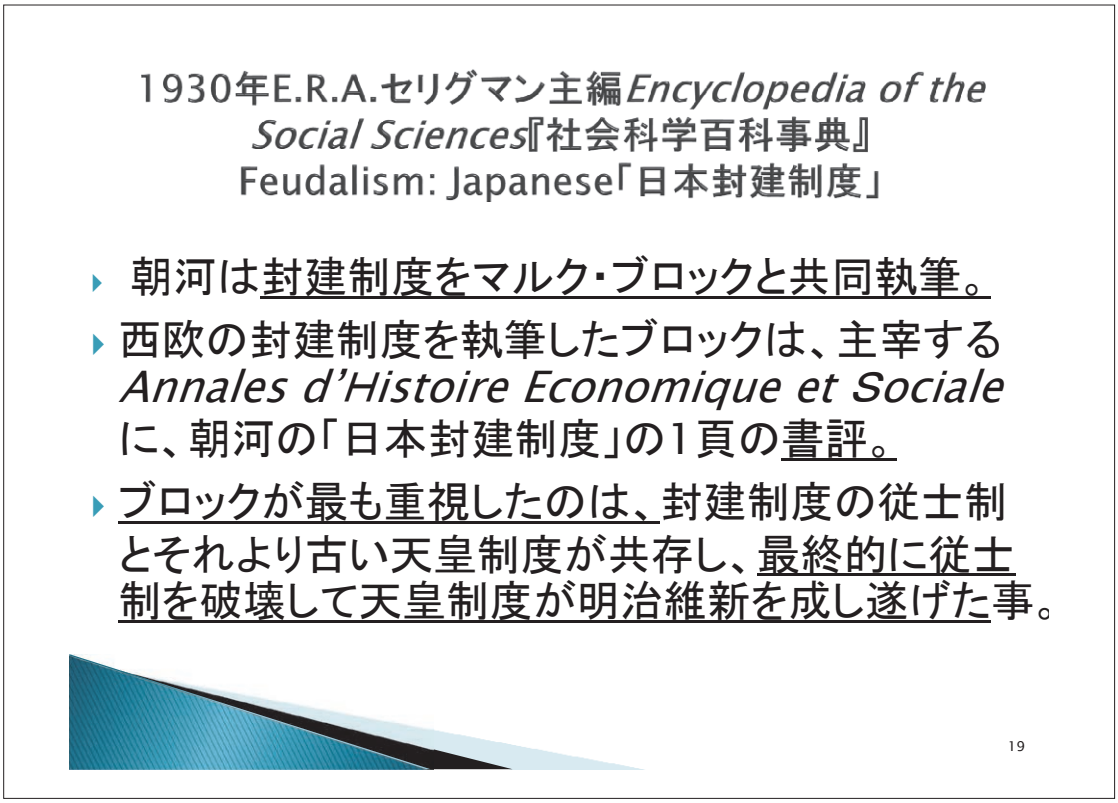
スライド 17

『入来文書』第155号B『徳川慶喜公伝』第7巻二條〔斎敬〕摂政記
B (Tokugawa Yoshinobu ko den,Ⅶ, 183, from Premier Nijyo's memorandum)『徳川慶喜公伝』は渋沢からの献本資料

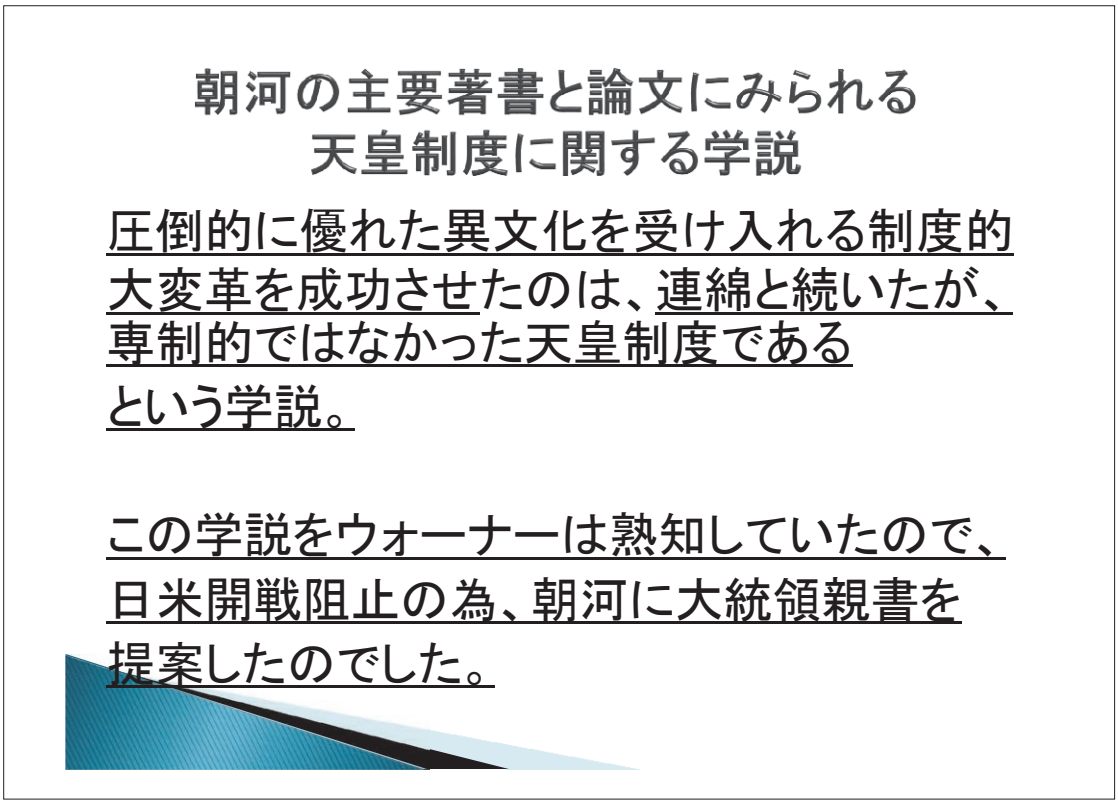


8

スライド 18



スライド 19



スライド 20

1942年2月22日W・ウィルコックス（ミシガン大学助教授）宛Open Letter

たった1つの私の小さな望みは、軍部を改心させることではなく、彼らを追い払うことのできるただ1つの権力、すなわち天皇による追放の可能性であり、枢密院を通して実現可能であった

現状は西暦645年〔大化改新〕と1868年〔明治維新〕と同様です。「宣戦は、…軍部簒奪者の不忠な裏切り」と説明

- 「民主主義」と天皇制度との共存という一見矛盾したように見える異文化融合の朝河の戦後構想は1902年の博士論文以来の歴史学から導き出された結論。

＝＞朝河の学説が天皇制民主主義の学問的起源

21

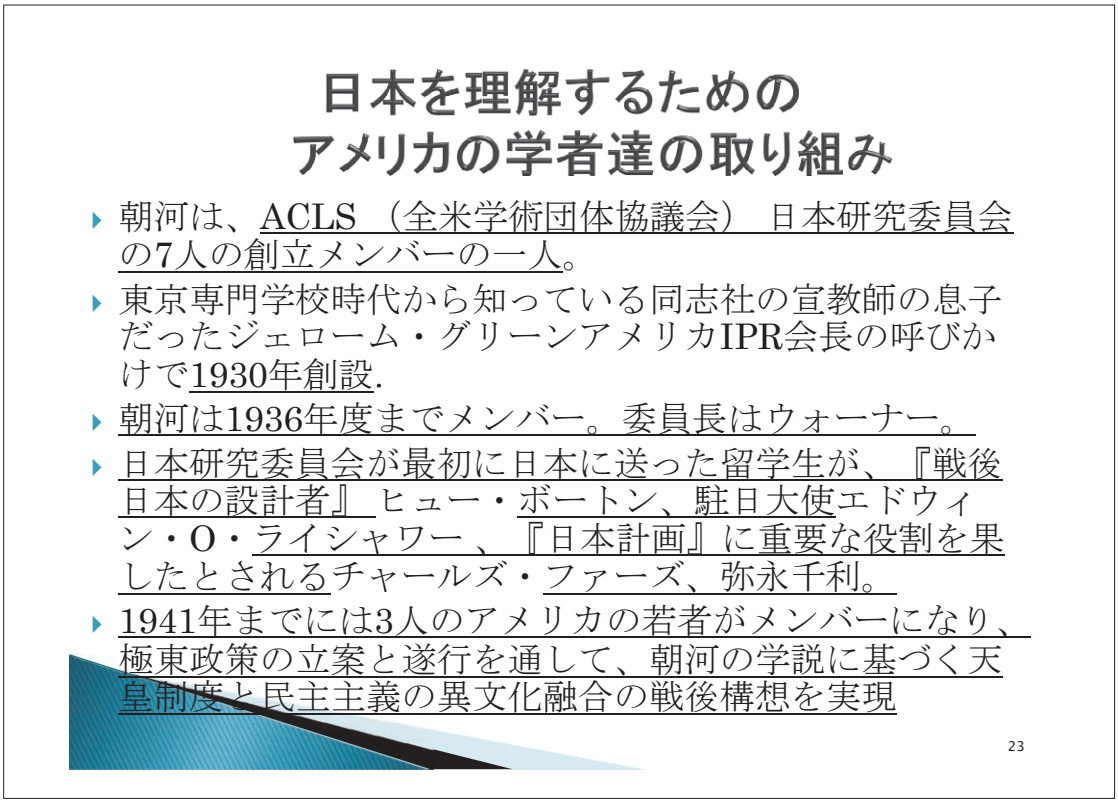
スライド 21

1944年10月2日付同僚の経済学者アーヴィング・フィッシャー宛Open Letter。

- 戦後の徹底した改革がいかなるものであっても、・・・天皇の是認と支持が必要になると確信しています。
- →このopen letterは、フィッシャーが同期のスチムソン国防長官とイエール大学の秘密結社スカル＆ボーンズのメンバーであることから指導者層に浸透

22

スライド 22



スライド 23

スライド 24

1937年6月ACLS日本研究委員会メンバー

ACLS Bulletin, No.26, June, 1937Committee on Japanese Studies Chairman, Robert K. Reischauer,PrincetonUniversity / **Hugh Borton,** Columbia University; / Serge Elisseeff, Harvard-Yenching Institute; Jerome D. Greene, Harvard University, / Louis V. Ledouz, New York City; / Langdon Warner, Harvard University; / Archibald G. Wenley, Freer Gallery of Art; / Mortimer Graves, American Council of Learned Society, secretary.

〔1936.11.25.日独防共協定　1937.7.7.盧溝橋事件→日中戦争〕

1941年7月ACLS日本研究委員会メンバー

ACLS Bulletin, No. 33, July, 1941　Committee on Japanese Studies Chairman, Serge Elisseeff, Harvard-Yenching Institute / Secretary, **Hugh Borton,** Columbia University / Kenneth W. Colegrove, Northwestern University; / **Charles B. Fahs,** Pomona College; / Evarts B.Greene, Columbia University; / Archibald G. Wenley, Freer Gallery of Art Corresponding Members: **Edwin O. Reischauer,** Harvard University; G. Nye Steiger, Simmons College; / Florence E. Walne, University of California.〔1940.9.27日独伊三国軍事同盟1941.8.1 米対日石油全面禁止〕

25

スライド 25

朝河の親書草案を大統領に渡すことになる
マクライシュ米国議会図書館館長

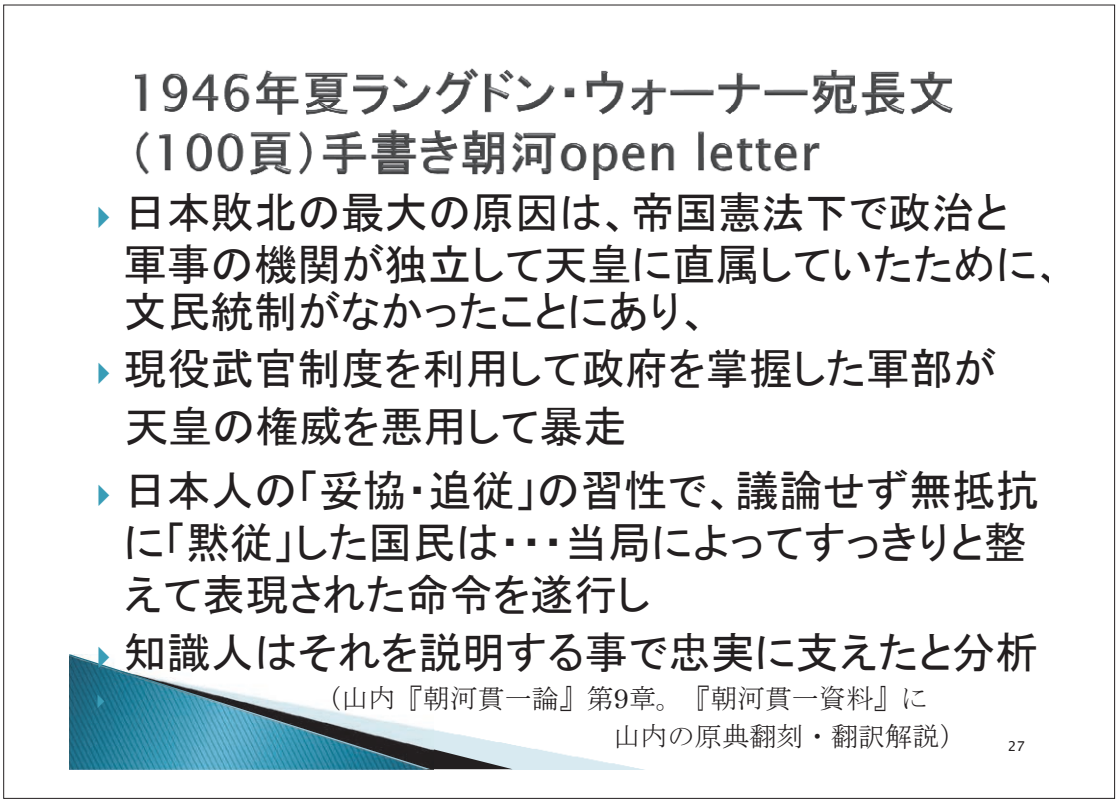
- 情報調整局（COI）が発足する1941年7月
- マクライシュ館長の呼び掛けで
- 全米学術団体協議会（ACLS）
- 全米社会科学研究協議会（SSRC）
- 国立公文書館（NARA）

の要人が集められる。

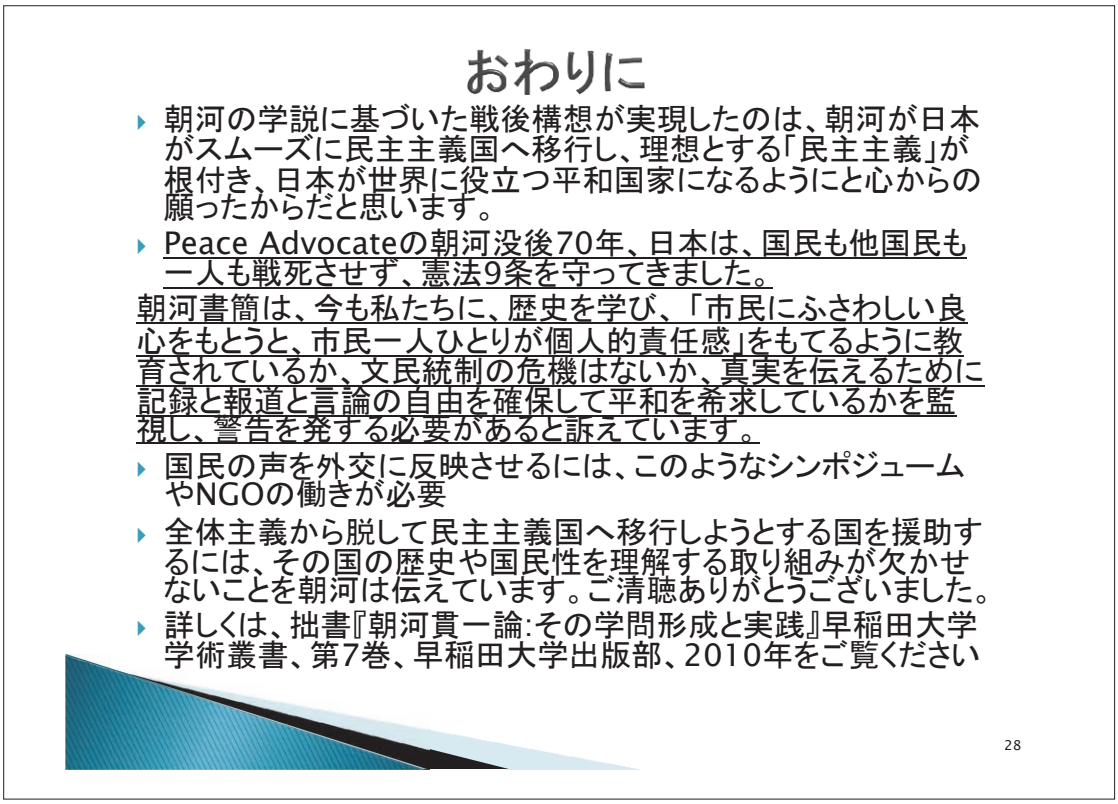
加藤哲郎『象徴天皇制の起源：アメリカの心理作戦「日本計画」』64頁

26

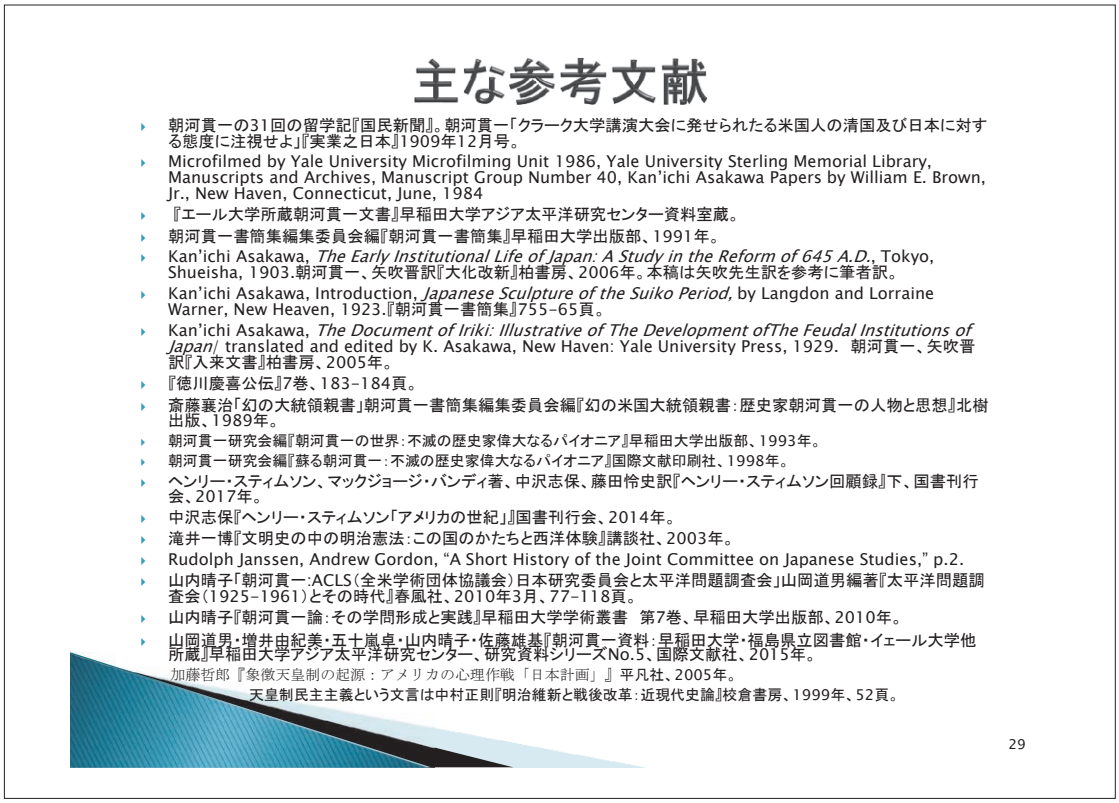
スライド 26



スライド 27



スライド 28


主な参考文献
朝河貫一の31回の留学記『国民新聞』。朝河貫一「クラーク大学講演大会に発せられたる米国人の清国及び日本に対する態度に注視せよ」『実業之日本』1909年12月号。
Microfilmed by Yale University Microfilming Unit 1986, Yale University Sterling Memorial Library, Manuscripts and Archives, Manuscript Group Number 40, Kan'ichi Asakawa Papers by William E. Brown, Jr., New Haven, Connecticut, June, 1984
『エール大学所蔵朝河貫一文書』早稲田大学アジア太平洋研究センター資料室蔵。
朝河貫一書簡集編集委員会編『朝河貫一書簡集』早稲田大学出版部、1991年。
Kan'ichi Asakawa, The Early Institutional Life of Japan: A Study in the Reform of 645 A.D., Tokyo, Shueisha, 1903.朝河貫一、矢吹晋訳『大化改新』柏書房、2006年。本稿は矢吹先生訳を参考に筆者訳。
Kan'ichi Asakawa, Introduction, Japanese Sculpture of the Suiko Period, by Langdon and Lorraine Warner, New Heaven, 1923.『朝河貫一書簡集』755-65頁。
Kan'ichi Asakawa, The Document of Iriki: Illustrative of The Development ofThe Feudal Institutions of Japan/ translated and edited by K. Asakawa, New Haven: Yale University Press, 1929. 朝河貫一、矢吹晋訳『入来文書』柏書房、2005年。
『徳川慶喜公伝』7巻、183-184頁。
斎藤襄治「幻の大統領親書」朝河貫一書簡集編集委員会編『幻の米国大統領親書：歴史家朝河貫一の人物と思想』北樹出版、1989年。
朝河貫一研究会編『朝河貫一の世界：不滅の歴史家偉大なるパイオニア』早稲田大学出版部、1993年。
朝河貫一研究会編『蘇る朝河貫一：不滅の歴史家偉大なるパイオニア』国際文献印刷社、1998年。
ヘンリー・スティムソン、マックジョージ・バンディ著、中沢志保、藤田怜史訳『ヘンリー・スティムソン回顧録』下、国書刊行会、2017年。
中沢志保『ヘンリー・スティムソン「アメリカの世紀」』国書刊行会、2014年。
滝井一博『文明史の中の明治憲法：この国のかたちと西洋体験』講談社、2003年。
Rudolph Janssen, Andrew Gordon, "A Short History of the Joint Committee on Japanese Studies," p.2.
山内晴子「朝河貫一:ACLS（全米学術団体協議会）日本研究委員会と太平洋問題調査会」山岡道男編著『太平洋問題調査会（1925-1961）とその時代』春風社、2010年3月、77-118頁。
山内晴子『朝河貫一論：その学問形成と実践』早稲田大学学術叢書 第7巻、早稲田大学出版部、2010年。
山岡道男・増井由紀美・五十嵐卓・山内晴子・佐藤雄基『朝河貫一資料：早稲田大学・福島県立図書館・イェール大学他所蔵』早稲田大学アジア太平洋研究センター、研究資料シリーズNo.5、国際文献社、2015年。
加藤哲郎『象徴天皇制の起源：アメリカの心理作戦「日本計画」』平凡社、2005年。
天皇制民主主義という文言は中村正則『明治維新と戦後改革：近現代史論』校倉書房、1999年、52頁。
29

スライド 29

講演

講演 1
日本と今後の東アジア――なかんずく中国との関係について
高原明生（東京大学公共政策大学院 院長）

講演 2
希望を諦めないリアリスト
Frances McCall Rosenbluth（イェール大学教授）

講演 3
今日の日米関係を朝河先生はどう見るか
加藤良三（元駐米大使）

講演 1
日本と今後の東アジア―― なかんずく中国との関係について

高原明生　東京大学公共政策大学院 院長

――― これからは 3 人の先生に講演いただきます。最初の講演者・高原明生東京大学教授は、日本の中でも中国の国内制度、国内政治の研究の第一人者です。最近は国際的な関係の中の中国、そして中国の外交ということで、研究はもちろんですが、多くの政策提言も行なっていらっしゃいます。

歴史を研究していらっしゃる先生方の面白いお話のあとで、現代中国を研究している私が、どういう話を申し上げるべきかと思案しております。私は、岡山県の出ですが、今日ばかりは、福島県人だったらよかったなとも思ってしまいます。本日は、朝河貫一先生がお書きになったことを元にして、浜田先生のお話にもありましたが、今私たちが何を考えれば、何をすればよいのかを、現代中国研究者の観点からお話ししたいと思います。

まずは、今日既に何回も話題になっています『日本の禍機』における内容について。その中では、今日的な意義を有する主張、ポーツマス条約の中で明言された、朝河の言うところの新外交の二大原則が主張されています。すなわち、列国民の機会均等ということが一つ。そして清国、当時の中国の主権と領土の保全。この二つが大変大事であるという主張でした。

しかし、日露戦争後の日本の清国における振る舞いは、せっかく日本が唱えたこの二つの原則から相当外れた状況になっている。そのことに強く憤り、正すべきだと訴える、そういう内容の本であることはご存じのとおりかと思います。実際には、日本はほかの列強と共に清国の利益を争い、むさぼっているということです。

ここで日本にとって必要なのは、いわば反省力のある愛国心である。先ほど浜田先生の講演の際に大越さんから愛国心についてのご質問がありましたが、自らを省みて、常に原則から踏み外れていないかを反省する愛国心が必要なのではないか。そのような主張が『日本の禍機』の中で行われているわけで、もちろんこの主張は現代の日本を生きる私たちにとっても大きな意味を有する考えだと思います。

『日本の禍機』の中で多々印象的な文章がありますが、朝河はこのような主張を唱えた上で、朝

河が自分で書いたものを読み、読者の中では次のように叫びたくなる人もいたかもしれないとも書いています。「汝（なんじ）」すなわち朝河「の論は外国本位と評するのほかなし。日本を愛するものは少々の不正を犯しても、わが国の利益を拡張せざるべからず。今日清国ややもすれば反対すといえども、彼は我に抗するの実力あるにあらざれば、多少彼の苦痛を忍びても、われはわが主張を貫徹して可なり」。自分の意見を読んで、そう思う人も多いのではないかと。特に当時の満州にいたり、現場に暮らしている人たちがこのように感じたとしても、自分はまったく理解できないわけではない。それに同情する面がないわけではないということも、朝河は書いています。

しかし世界を見れば、国際的な観点に立てば、こうした考え方が日本にとって害をもたらすものだという主張をしているわけです。1909 年の時点でこう唱えているのはまさに卓越した洞察であり、世界を知り、歴史を知る一人の研究者の優れた見解だと、今日も評価することができると考えます。

彼の文章に接して、現代の私たちが何を感じるか、現代中国研究者である私が何を感じるかと考えてみますと、彼の警告は、今日の東アジアを生きる私たちにとっても大変に身近なものであると言わざるを得ません。文中の日本を中国に置き換え、清国を日本、そしてそのほかの近隣の国の名前に置き換えた場合に、まさにこのような、いわば強気の、大変に自己中心的な考えを持つ人がわれわれの隣国で増えているというのは、残念ながら事実だと指摘せざるを得ないと思います。

今年はご存じのように、日本と中国の間で平和友好条約が締結されてから 40 周年という大変記念すべき年にあたり、いろいろな記念行事も行われます。その平和友好条約で 40 年前にうたわれたこと。その頃の中国の指導者たちが何を考え、何を語っていたかを思い起こすことが、実はこの文脈の中で大変重要だと、私は考えております。

そこで日中平和友好条約ですけれども、大して長いものではありませんが、そのポイントだけ簡単に振り返ってみたいと思います。

第一条の第 1 項（資料スライド 4）に書いてあることは、中国が 1950 年代に唱え始めたいわゆる平和 5 原則を踏襲し、その上で両国間の恒久的な平和友好関係を発展させるとすることが書いてある項目です。第 2 項では、国連憲章の原則を出し、すべての紛争を平和的手段により解決し、武力または武力による威嚇には訴えないという、国連憲章の大きな原則を取り入れています。

当時「覇権」という言葉を巡り、日本と中国の間で盛んに交渉が行われたわけですが、第二条を見てみますと（資料スライド 5）、両締約国はそのいずれもアジア太平洋地域において、または他のいずれの地域においても覇権を求めるべきではない。このような覇権を確立しようとする他の

いかなる国、または国の集団による試みにも反対することを表明することがうたわれております。

覇権を確立しようとする他のいかなる国がどこであるかですが、中国は主にソ連を念頭においていたことが当時の状況から推察されます。しかし、今日的に非常に重要なのは下線を引いた部分「日本も中国もいずれも覇権を求めない」ことを約束した点ではないかと思われます。

この交渉において、覇権という言葉が大変重要だったわけです。しかし、これが何を意味するのかについては、実は突き詰めた議論が行われたわけではありません。日本側が説明を求めると、中国側は「いや、ご存じでしょう？　分かるでしょう？」というような言い方で、はぐらかすような態度を取ることが常であったと聞いております。

そこで私は中国語の辞書を調べてみたのですが、「覇権」というのは次のような意味だと書いてあります。「国際関係上、実力をもって別の国を操縦あるいは支配する行為である」。言い換えれば、実力に頼んで自分の意思を他に押し付ける行為、それが覇権を行使するという行為であると受け止めてよいかと考えます。

それでは当時の指導者たちが、覇権について、あるいは日本なり中国が覇権を唱える可能性についてどういうことを言っていたかを確認したいと思います。例えば、鄧小平さんが当時の園田直外相との会談において「もし将来中国が覇権を求めるようなことがあれば、みんな反対してほしい。中国政府に中国の人民と共に反対してほしい」と述べています。これはわりと知られている話ですが、周恩来首相も実は同じようなことを言っており、あまり日本では知られていないと思いますので、簡単にご紹介します。

1973 年ですから、まだアメリカとの国交はないときです。その頃にアメリカの中国研究者の代表団が北京を訪ね、周恩来と面会したことがありました。これはマイケル・オクセンバーグという亡くなったミシガン大学の先生が論文の中で紹介していることですが、そのときに周恩来さんは、代表団の一人の若い女性研究者に尋ねたそうです。「あなたは将来、中国が覇権を求めるようになると思いますか」と。国交前に中国を訪れるような中国研究者の一団ですから、いわば親中的な人たちが多く、その若い女性研究者は即座に「いや、そのようなことはあり得ないと思います」と答えました。周恩来さんは「いや、それは分かりませんよ。しかし、もし将来の中国の指導者たちが覇権を求めるようなことがあれば、あなたは反対してください。そして、周恩来に反対するように言われたのだと、中国人に伝えてほしい」と述べたそうです。

私は、周恩来さんも鄧小平さんも冗談を言ったわけではなく、決してあり得ない話として言ったのでもないと思っています。人もそうかもしれませんが、人も国も日本が日露戦争の前と後でそうだったように、立場が変われば、あるいは実力が付いてくると、理想も振る舞いも変わり得

るということを自覚していた、知っていたのではないかと考えております。

今日はあまり細かいことをお話しする時間はないですが、現在の中国を観察しますと、私は行動第一主義と呼んでいますが、言葉の上では大変ソフトであり、フレンドリーなわけです。しかし、やっていることと言っていることがずれているのではないか。まずは行動して、あとは外交的な処理に任せる。行動第一、外交第二といった振る舞いが目に付きます。

もう一つの点としては、初めはアメリカとの関係に新型大国関係という名前を付け、第一に最も重点的な外交政策として、対米関係の協調、友好ということを訴えていました。しかし、新型大国関係という概念をアメリカ側が取り上げないことがはっきりした 2013 年頃から、いわば外交政策の振り子をアメリカ第一主義からユーラシア第一主義に振って、一帯一路という構想を打ち出しています。現在は、ヨーロッパも含め、中国から見て西側の国々に向けて外交政策を活発に展開しているのは皆さまもご存じのところです。

この現状を踏まえて、本題と言うべき、私たちは今何を考えこれから何をしていけばよいのかという点に入ります。もとより私にそれに対して正面から十分な答えを出す能力があるわけではありませんが、ささやかな観察と卑見を申し述べたいと思います。

おそらくは、中国の世界に冠たる大国になるという、彼らのアイデンティティーに基づく長期的な目標あるいは戦略は変わらないでしょう。そうしますと、何が予測されるか。今の覇権大国であるアメリカ。先ほどの定義からすれば、相当アメリカは最近、覇権主義的な行動に出ているわけですが、米中の間の戦略的な競争が激化することは避けられないのではないかと私には思われます。

しかし、冷戦の時代と違って中国は市場経済化を進め、経済を中心とする相互依存の関係も深まるばかり、拡大するばかりという現実が他方においてあります。いわば大変複雑なねじれた状況の下に、私たちは置かれていると言うことができます。

トランプ政権の政策、あとでさまざまな議論がされると思いますが、トランプ政権の厳しい対中国政策を見ていますと、この戦略的競争が激化する中で、アメリカと中国のはざまにある日本等の国々は大変難しい立場に立たされることになるのは間違いないような気もしております。

しかし、朝河先生がおっしゃったように、私たちが大事にすべき原則や価値は何なのかということを世界史の展開の中でどう読み解いて、それを確定させ、実現していくのか。そこに大いに意を払うべきではないでしょうか。特に中国との間では、どのような東アジア地域の秩序をつくっていくのか。どのような規範に基づいて私たちは新しい地域を共に築いていくのか。新しい地域秩序の規範について、特に私のような立場の者からすれば、中国の有識者の人たちと共に議論していくことが大事ではないかと思っております。

やはり中国との間では政治的な体制が違いますので、どうしても規範のずれがありますし、情報の共有が必ずしも円滑にできないことが現実の問題としてあるわけです。大変残念なことですが、今の政権の下で、海の向こうの中国では知識人たちが自由に発言できない、あるいは自由な情報の流通がない状況の中で、どのようにして私たちが彼らと交流し、考えをすり合わせ、あるいは戦わせ、新たな規範をこの地域において共に築いていくのか。これは簡単な作業ではありません。しかし、自分たちのできるところから、まさにこの部屋でもいろいろな交流が行われるところではありますが、そういう直接的な交流を進めていくほかはないのではないでしょうか。

それはなにも知識人だけではありません。今、青少年交流が大事ということで数千人の中国の若者が毎年日本にやって来ますが、日本の側からもたくさん向こう側に出掛けています。相手がどういうことを考えているのか、何を大事にしているのか、私たちが知っている事実、彼らが知らないことはたくさんあります。それを交換しあって情報ギャップを埋めていく。情報ギャップを埋めることで少しでも認識ギャップを縮めて、新たな地域をつくっていくことが大変大事かと思います。

共に築いていく「秩序の基礎となる規範が何か」が一番かと思いますが、なかなか自由、平等、友愛と言っても、中国の多くの人にはぴんとこない部分があります。とりあえずは「法の支配」の重要性という点で私たちは一致できると思いますので、そのあたりを糸口として、これからそうした大きな、あるいは大事な原則や規範の問題について相互理解を進めていきたいと私自身は考えております。大変浅はかな考えではありますが、それだけ申し述べまして私の報告とさせていただきます。

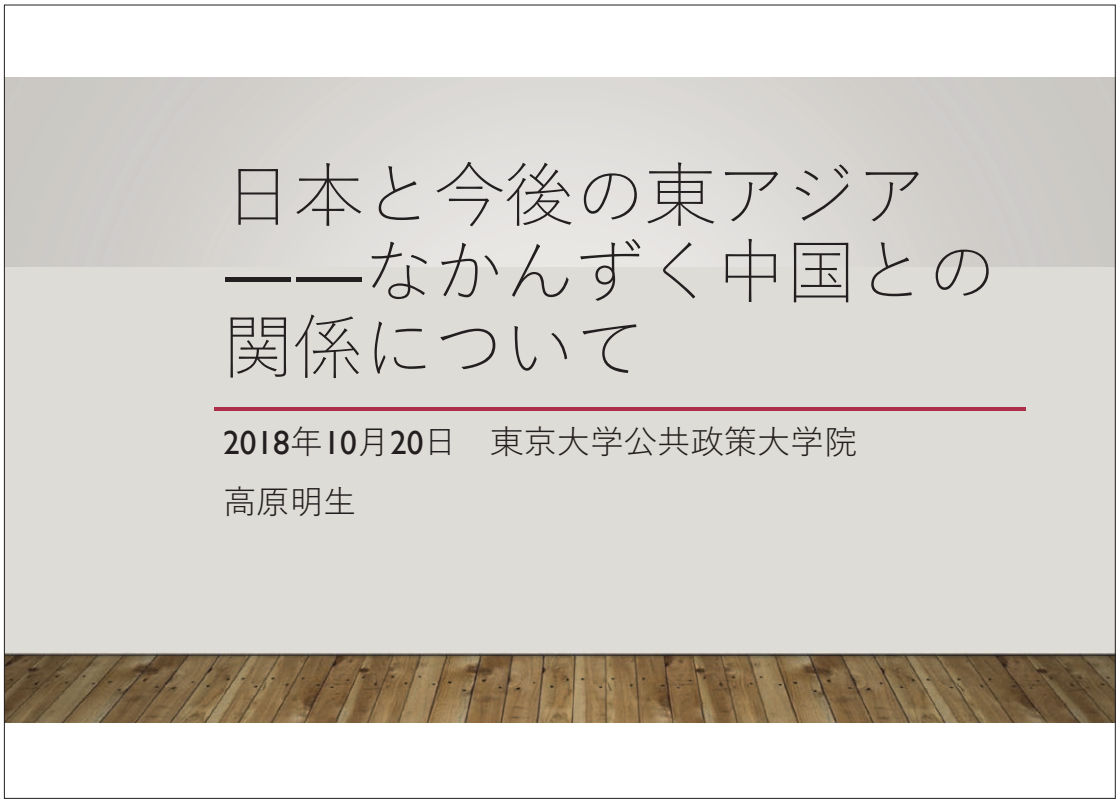
◆ 質疑応答

阿川： 「法の支配」というのが、私の印象では中国は rule by law で、本当のわれわれが求めているのは rule of law ではないかと思うのですが、いくら言っても聞いてくれないような気がします。ペシミストなわけではないけれども、かなりペシミストなのですが、いかがでしょう。

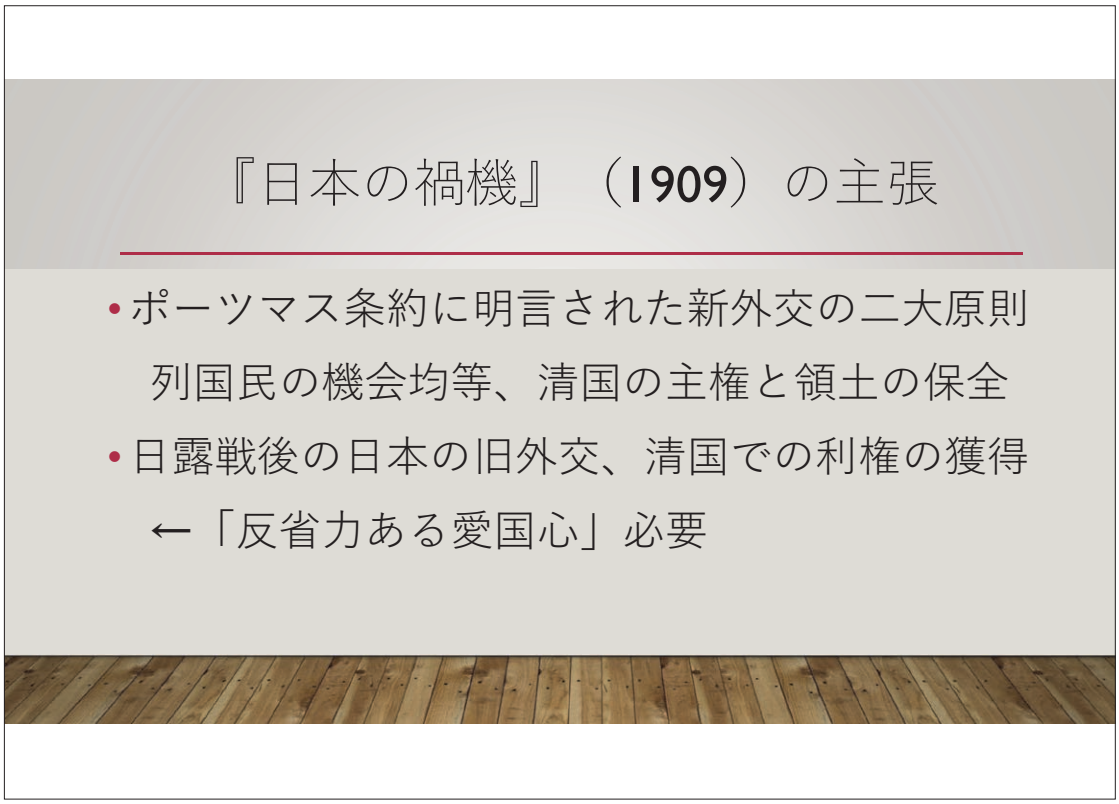
高原： ご指摘のとおりですね。今の政権が唱えている、中国法では法治と二つの漢字で書き表しますが、日本風に読めば法治が権力を制約するものではなくて、権力の側が社会を統治する道具としての法という捉え方が一番の基本であると思います。しかし、いつまでもそのような考え方が社会の中で主流であり続けるのか、そこが問題ではないでしょうか。

中国の人たちは 21 世紀の時代の中で、情報が統制されているとはいえ、さまざまなルートを通してそれなりに海外の事情もよく知るようになっていますし、海外に行く中国人も大変多くなっています。若い優秀な、客観的に自分を見ることのできる開かれた心の持ち主が実にたくさん、日本にもアメリカにもヨーロッパにも出ています。しかし、中国は広い国、人口の多い国ですから矛盾することが同時に起きて、国内の宣伝色の強いいろいろな情報を吸収し、よりナショナリスティックになっている人たちも少なくない。それもまた事実です。

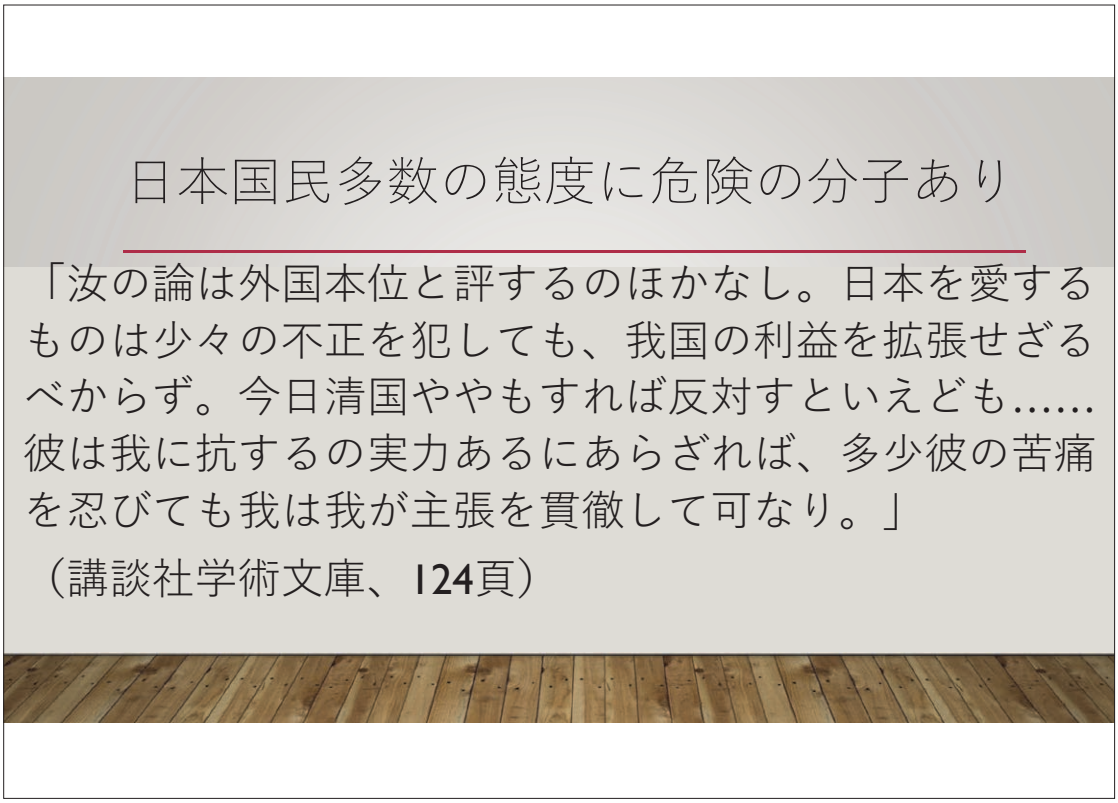
しかし、逆のベクトルも確かにあるわけで、そちらのより国際化していく、より rule of law の規範を大事にしていく考え方は放っておいても増大していくでしょう。外国に住む私たちとしては、中国の人たちにどう働きかけて、そういう考え方の広まりをサポートしていくのか。われわれが中国そのものを変えようとしてもできないと思います。よく私が言うことですが、中国を変えられるのは中国人しかいない。しかし、もしかしたら私たちにも中国人を変えることはできるかもしれない。あまり偉そうになにかをするということではなく、私たちの知っていることや大事に思っていることを、私たちの失敗の歴史も含めて語り、理解していただく、共感してもらうということが大事だと思っています。


日本と今後の東アジア
――なかんずく中国との関係について
2018年10月20日　東京大学公共政策大学院
高原明生

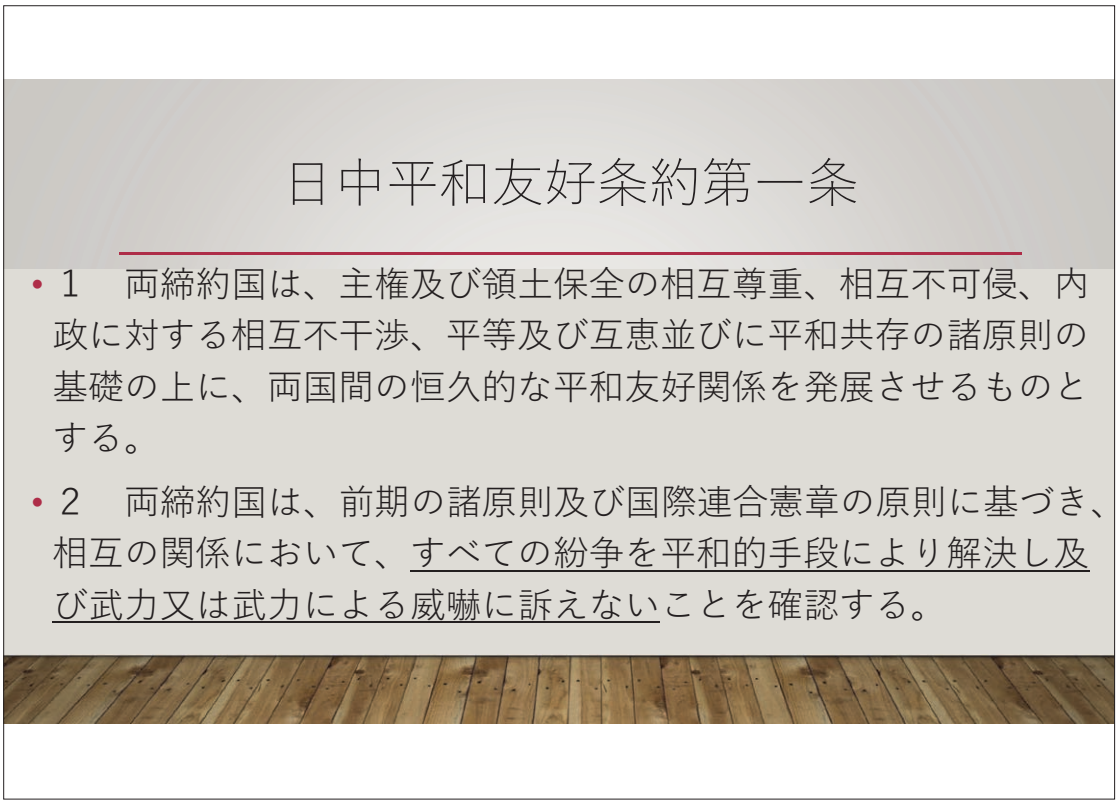
スライド 1


『日本の禍機』（1909）の主張
• ポーツマス条約に明言された新外交の二大原則
列国民の機会均等、清国の主権と領土の保全
• 日露戦後の日本の旧外交、清国での利権の獲得
←「反省力ある愛国心」必要

スライド 2


日本国民多数の態度に危険の分子あり
「汝の論は外国本位と評するのほかなし。日本を愛するものは少々の不正を犯しても、我国の利益を拡張せざるべからず。今日清国ややもすれば反対すといえども……彼は我に抗するの実力あるにあらざれば、多少彼の苦痛を忍びても我は我が主張を貫徹して可なり。」
（講談社学術文庫、124頁）

スライド 3


日中平和友好条約第一条
• 1　両締約国は、主権及び領土保全の相互尊重、相互不可侵、内政に対する相互不干渉、平等及び互恵並びに平和共存の諸原則の基礎の上に、両国間の恒久的な平和友好関係を発展させるものとする。
• 2　両締約国は、前期の諸原則及び国際連合憲章の原則に基づき、相互の関係において、すべての紛争を平和的手段により解決し及び武力又は武力による威嚇に訴えないことを確認する。

スライド 4

日中平和友好条約第二条

両締約国は、そのいずれも、アジア・太平洋地域においても又は他のいずれの地域においても覇権を求めるべきではなく、また、このような覇権を確立しようとする他のいかなる国又は国の集団による試みにも反対することを表明する。

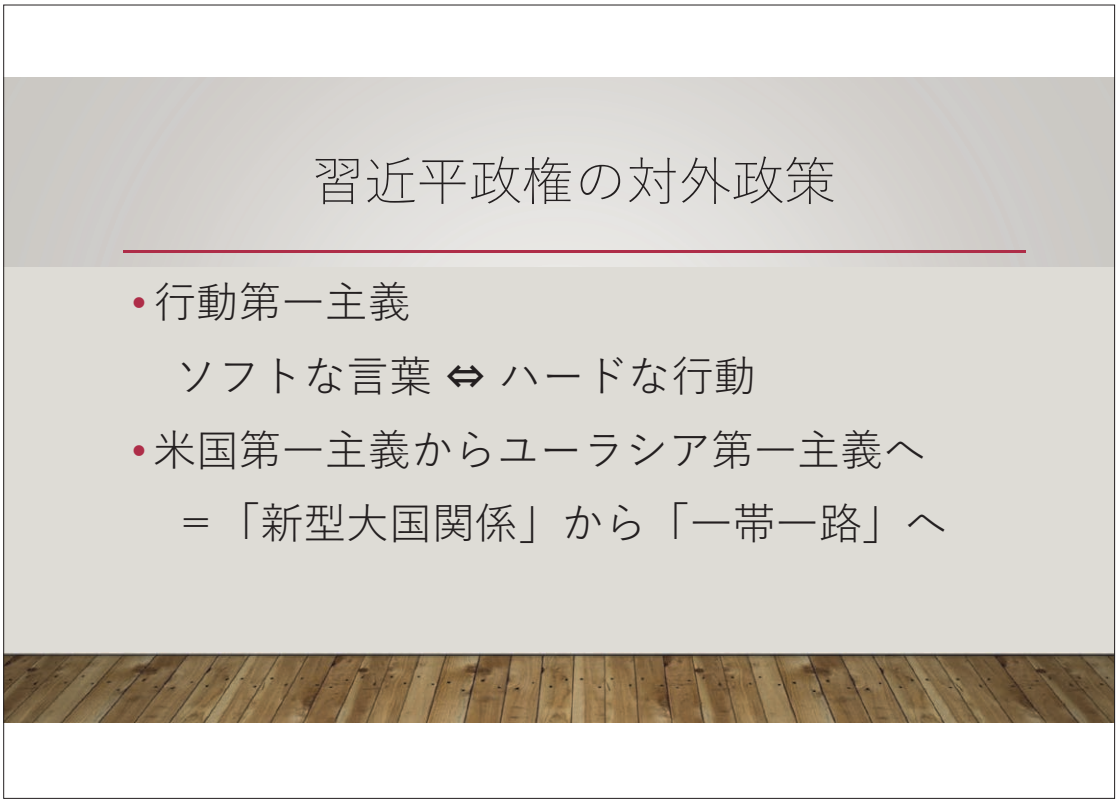
【覇権：国際関係上、実力をもって別の国を操縦あるいは支配する行為（現代漢語詞典）】

スライド 5

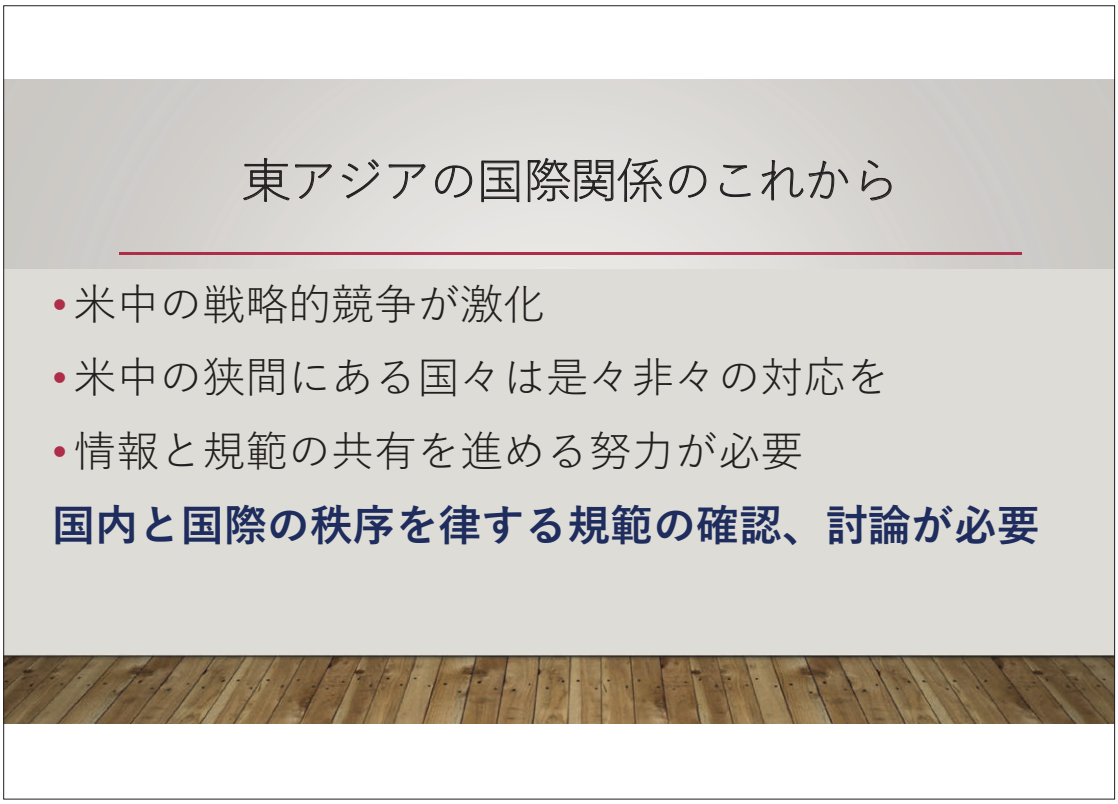
台頭する中国の自意識――「覇を称える？」

- 周恩来「中国が覇権の道を歩まないとは限らない、だがその時は反対すべきであり、周恩来に反対するように言われたのだと中国人に伝えて欲しい」（'73）
- 鄧小平「中国は将来強大になっても…覇権を求めない。もし将来覇権を求めることがあれば、世界の人民は中国の人民と共に覇権を求める中国政府に反対すべき」('78)

スライド 6


習近平政権の対外政策
•行動第一主義
ソフトな言葉 ⇔ ハードな行動
•米国第一主義からユーラシア第一主義へ
＝「新型大国関係」から「一帯一路」へ

スライド 7


東アジアの国際関係のこれから
•米中の戦略的競争が激化
•米中の狭間にある国々は是々非々の対応を
•情報と規範の共有を進める努力が必要
国内と国際の秩序を律する規範の確認、討論が必要

スライド 8

講演 2
希望を諦めないリアリスト

Frances McCall Rosenbluth　イェール大学教授

――― 続きまして、イェール大学の Frances McCall Rosenbluth 先生にご登壇いただきます。先生はフルブライト奨学生として東京大学に留学した経験もおありです。日本政治のご専門で『日本政治と合理的選択』、また『日本政治の大転換「鉄とコメの同盟」から日本型自由主義へ』といろいろな著書を書いておられます。

序

皆さん、こんにちは。この写真は若い頃の朝河先生ですけれども（資料スライド 1・2)、少し浜田宏一先生に似ているのではないでしょうか。

今日、私たちは朝河貫一没後 70 年を記念するために一堂に会した訳ですが、より重要なのは、朝河先生の生き様を讃えることです。朝河先生の一生は、日本が列強の一員として国際舞台に参入し、日中戦争と太平洋戦争の惨禍を経て、自由な世界に復帰する、まさに劇的な時代に重なるものでした。もしも、朝河が生きた時代の世界に、その英知がより広く知れ渡っていたとしたら、当時の世界はより良いものとなっていたでしょう。朝河が当時鳴らした警鐘は､今日でも未だ妥当性を失っていません。これは特筆すべきであり、また憂慮すべきでもあります。

第二次世界大戦後、国際連合と、国家間の自由貿易を促進するために設立された組織や制度は、まさに朝河が思い描いたとおりに、歴史上前例のない世界的な安定と繁栄の時代を築きました。しかし、その礎の上にある現在の世界は、世界的な繁栄を破壊した 1930 年代の貿易戦争を彷彿とさせる状況にあります。トランプ大統領が外国人を嫌悪している事実と彼が始めた貿易戦争により、今まさに根底から揺らいでいるかもしれません。

日本史、世界史に通暁した歴史家の朝河は、終始「希望を諦めないリアリスト」であったと言えるのではないでしょうか。明治初期に青年期を過ごした朝河は、日本が国内の改革を進めつつ、国際的なリーダーシップを獲得することに挑戦し始めた事実に鼓舞されただけでなく、日本の前

途が様々な危険に満ちていることを理解していました。その時代認識は、次の三つの分析レベルに分類することができます。

第一のレベルは、国際システムです。朝河が幻滅していたのは、中国、朝鮮の主権と、世界の自由貿易を列強がサポートする協力体制が存在しないことでした。結果的に各国が自国の最低限の利益を確保するため、「底辺への競争」に陥っていったのです。

第二のレベルは、国内政治です。朝河は、内政が脆弱であるため、中国と朝鮮で海外からの破壊的な介入を招くことを理解していました。また、ビスマルク率いるドイツに範を置いた明治憲法が、軍部と天皇陛下の距離を不適切なまでに近くすることを見通していました。

第三のレベルは、個々の政治指導者です。朝河は、政治指導者の間で人種差別が蔓延し、彼らが鈍感で、自らの傲慢さに気づかないことに失望していました。とりわけ、米国の政治指導者が、地政学的な勢力が国家の徳だと誤認していたことを、大いに嘆いていました。

朝河が有していた歴史と世界情勢についての深い理解を、当時の主要国家や政治的指導者が共有してさえいれば、朝河が生きた時代の世界は多くの惨禍を避けることができたでしょう。実際に、第二次世界大戦後、国際連合と国家間の自由貿易を促進するために設立された組織や制度は、まさに朝河が思い描いた通りに、歴史上先例のない世界的な安定と繁栄の時代を築きました。しかし、その礎の上にある現在の世界は、世界的な繁栄を破壊した 1930 年代の貿易戦争を彷彿させる状況にあります。トランプ大統領が外国人を嫌悪している事実と彼が始めた貿易戦争により、今まさにその根底が揺らいでいます。国連を含む国際組織や制度が今日、どれほど脆弱で機能不全に陥っているかは、周知の通りです。

本日の講演で私は、三つの分析レベルに対する朝河の見解から、我々が生きる現代にどのような価値ある洞察を引き出すことができるか、お話しさせていただきます。

I. 世界システム「自由貿易ではなく、ルールなき自由競争」

皆さんが小学校からずっと勉強した歴史ですが、日本史、世界史に精通した歴史学者の朝河は、まず世界のシステムから考えます。朝河が成人を迎えたのは、自由主義の台頭によって世界市場が発達し、経済的繁栄と freedom for all「万人の自由」を約束するかに見えた 19 世紀末でした。その頃中国は、free-for-all「万人にとってタダ」の国の時代。この英語の冗談を訳すと「freedom for all から free for all ＝誰にでもただで手に入れられる国」、そんなふうに列強から見られていたわけです。清朝が滅亡し、脆弱な共和主義的政府がこれを引き継ぐことになるわけですが、軍

事的に劣る地域は分割され、西洋列強により植民地化される結果となりました。

現在の早稲田大学を首席で卒業し、ダートマス大学で学んだ後、朝河は 1902 年、イェール大学大学院での学期末レポートとして、列強の植民地主義とその重商主義的起源に関する 70 ページの比較論文を書き上げました。朝河は、列強が互いに競争する結果、植民地化を通じ特殊権益を確保する誘引構造があることを理解していました。しかし朝河は、国家が道理をわきまえて行動すれば、全ての国々に利益をもたらす政策に同意しうること、そして、品格をもった政治的指導者が、その政策を完遂することができることを信じていました。その政策とは、貿易を通じ自国利益を確保すると同時に、朝鮮や中国などの弱小国を助け、政治的に自立するまで経済インフラを強化する、というものでした。

国際関係を律する法秩序の可能性に幻滅していた福沢諭吉とは対照的に、朝河は理想を抱き続け、その理想からどれほど乖離しているかで列強諸国を評価しました。1904 年に出版され、後世に大きな影響を残した『日露衝突』で朝河は、リカードが唱えた「比較優位の概念に基づいて、朝鮮と満州での日本の特別な役割を擁護しました。いわく「日本の利益は、全産業国に均等な機会が与えられることを前提とするが、ロシアの利益は極めて独占的な政策によってのみ維持、確保される」。朝河は、門戸開放と自由貿易を通して、日本が朝鮮と満州の政治的そして経済的な成長を助け、日本と世界の繁栄がより強固になるための条件を同時に創り出すことができると信じていました。当時ロシアは未だ農業国であり、貿易を行う上での比較優位産業を確立していませんでした。ロシアは時代遅れの政治的支配と排他的通商政策によってのみ、朝鮮半島での立場を築くことができると見ていました。対して日本の命運は、公正であるかどうかに懸かっており、「東洋の何百万人もの命運は日本の命運に懸かっているように思われる」と朝河は述べています。

日本が、朝鮮と中国が国家として発展するのを支援するのではなく、他の列強と同様に両国の領土を併合する結果になったとき、朝河がどれほど失望したかは想像に難くありません。1905 年の 10 月に出版されたダートマス大学紀要掲載論文で、朝河は次のように述べています。「我が国が朝鮮を併合するなら (中略)、我が国の愛国心はその純粋さを失い、その方針に対して、内密であれ公然であれ、疑義を呈する市民も出てくる。祖国の大義に対する人民の忠誠は、それまでとは違い最早明白でも、誠実でもなくなり、それゆえに我が祖国は、特筆すべき旗印を失う。歴史のページが祖国への反逆と無秩序で満たされる欧州諸国の水準へ堕落する。我が国は、予想外の勝利で自制心を失ってしまった。」

II. 国内政治

次に国内政治のレベルです。大隈重信の後ろ盾を得ていた朝河は、イギリスをモデルとし、文民統制を確立する憲法案を支持する陣営に与していました。しかし結局は、(プロセインがオーストリアとフランスの旧体制に対して象徴的な軍事的勝利を収めたことから、)プロシア憲法に倣う案を掲げていた伊藤博文が優勢になりました。

朝河は、日本が国際社会での指導力においてより高い基準を設定することを期待していました。それだけに、1910 年の韓国併合、1915 年対華二十一カ条要求、1918 年に山東省の権益をドイツから引き継いだことに失望しました。と同時に彼は、文民指導者が軍部からの圧力に晒されていたことも分かっていました。外務大臣であった加藤高明子爵が、中国でのさらなる軍事的介入を目論んでいた軍部を対中交渉から排除すべく、対華二十一カ条要求を突きつけた可能性があることも理解していました。

明治憲法において軍部は特権的な地位を得ていましたが、朝河は、天皇と枢密院が牽制することで、最終的には日本国民のプラグマティズムが勝ると感じていました。朝河は、米国上院議員ウィリアム・ロッジなど、反日感情に扇動され人種差別を憚らなかった人々を軽蔑していました。朝河は、1919 年の夏、早稲田大学を訪れた際、旧友であるウィリアム・ブースに宛てて、次の手紙を書いています。

「日本は混乱の中にあり、あらゆることが不安定だ。それゆえロッジ議員は、あなたが思うほど日本に影響を与えてはいない。他の問題と同様、山東省について日本国内に多様な意見が存在し、この問題について存外自由な議論がなされている。報道を通じ日本国民の意見と感情の真のあり様を把握することには困難が伴う。(中略)中国と朝鮮に関し、いかなる見解もひとたび公表されれば称賛を受ける。ロッジ氏は、そういった意見や感情の影を非難しているようなものだ。(中略)未だ多くの保守的な人々が高い地位に就いており、彼らは、我が国の民主主義が混乱に陥っている最中、時代遅れだ。そして、特に神道と皇室については、表現の自由はほとんどない。とはいえ、不都合はない。というのも、彼らの政策は、あくまで建前として、人々に受け入れられていて、日本国民のこの反応によってさらに過激な意見を抱くことはおそらくなかろう。実際的でありすぎ、かつ聡明でありすぎる。こういった素質からすれば、我が国が軍国主義的な国家になることは決してない。いかなる状況においても、我が国が第二のプロイセンになることはない。日本民族の真の品格を考慮したことのない外国人が、正反対の意見を持っていても」

なるほど、日本のプラグマティズムと日本国民の多様な意見に関する朝河の見立ては正鵠を射

ていました。しかし、当時の軍部の力に関する見方は誤っていました。事実、軍部は他の意見を押し切り、三井と三菱が 1932 年に南満州鉄道事業への投資から身を引くと、鮎川儀助が創始した新財閥をその事業へと引き込みました。朝河は戦争へ突入することを避けるよう枢密院と陛下に強く要請していましたが、その試みは軍部政権によって阻止されました。

III. 政治指導者個々人の資質

朝河は、日本が国際システム、国内政治二つのレベルで不利な戦いに挑んでいることを熟知していました。しかし、彼は尚も第三のレベル、すなわち先見性をもち、道理をわきまえた政治指導者に対する希望を諦めていませんでした。朝河の理解では、人間の本性とは洋の東西を問わず同一であり、自己統治と自己研鑽を通して、種としての人間に固有の自己陶酔を超越し、環境依存的で文化的に特有な人格上の欠点を克服することができる、というものでした。朝河曰く、米国人の欠点は、彼らの祖国が強力だったが故に生じた傲慢さであり、中国のそれは、国家が分裂し、無秩序状態であったが故に生じた日和見主義でした。

1912 年 2 月 10 日にウィリアム・ブースに宛てた手紙で、成功裏に終わった明治維新と頓挫した辛亥革命を比較し、国内の改革を行う上で日本が有した二つの利点を指摘しています。朝河が指摘する第一の利点は、曰く「制度としての天皇制だ。日本史で最も長く、最も権威を持つ制度であり、天皇制を中心に国家統一の運動が組織化された。」ことで、第二の利点は、「中国と比較し、当時中心的な指導者の間で、日和見主義が蔓延しなかったこと」です。(それ故、大義のため命を賭した。自己利益を顧みず、実際に多くが大義のために命を捧げた。(中略) 中国はいずれの要素も欠き、立憲君主制の導入すら、時期尚早だ。立憲君主制を導入すれば、比較的少数の、しかも相互に嫉妬心を抱く人々に過度の権力を与えかねない。(中略) 日本のとるべき道は、中国の国家としての保全と中国国内での平等な商業上の機会の確保という最低限の基準に基づいている。独善的で、歴史についての無知を露呈するだけの米国内の報道と米国民は、全くもって滑稽と言うほかない。)

朝河は、日中戦争が泥沼化してもなお、強固な品格の備わった人々が事態を正しい方向へ収拾すると期待していました。1941 年 10 月 10 日に、枢密顧問官の近衛文麿に宛てた手紙で、朝河はおそらくヒトラー率いるドイツと共闘することを思い留まらせようとしました。朝河は次のように主張しています。「中国大陸から軍隊を撤退させ、占領した領地を適切な時に、適切な方法で返還すべき。独伊との同盟を糾弾し、その履行を拒否すべき。両国と全世界に対し、両国との誓約の

明白な破棄が、何ゆえに必要なのか、すなわち、我が国が今日まで誤った方向へ舵をきっていたが故に、背を向けざるを得なかったより偉大な大義のためであると、公然かつ明確に宣言すべきだ。政治の運営と軍事の運営を明確かつ厳密に分離するために、国家の基本法を根本から書き直す必要がある。国民が享受する教育を、両者を縛りつけるくだらない軛から解放し、他国との自由な意見交換と、貿易を再開することである。可能なら、人類共通の敵と戦う同士に対し、与うる限りの援助を施すべきだ。」

日本の政治指導者に、戦争へ突入することを阻止するものが現れるという、朝河の希望は無残にも打ち砕かれました。しかし、後に近衛と昭和天皇が平和への道を模索していたことを知り、朝河は安堵の感を抱いたようです。1946 年 1 月に友人に宛てた手紙で、述懐しています。「先日自ら命を絶った前首相の近衛文麿公の回顧録を手元に置くことができ、つくづく自分は運がいい人間だと実感する。近衛公は 1941 年 4 月から辞任を余儀なくされた 10 月に至るまで、戦争回避のための困難に満ちた闘争について、克明に記している。同回顧録には、1945 年当時の内閣官房長官の手による回顧録も所収されており、それは 8 月 14 日の日本降伏までに開かれた政府内と全ての御前会議について、その場にいた者の意見や感情の動向を含めて、詳細に記してある。そこでは、増加の一途をたどる軍部の傲慢さに反する、若き天皇陛下の平和への御尽力が、悲劇的に描き出されている。」

1947 年 5 月 4 日に、ニューヘイブンで満開の桜を観た朝河は、美しい花びらに彩られた「真っ直ぐで、ほっそりとした」枝と優美で繊細な若葉に感銘を受け、次世代の若き日本人に望みを託しました（資料スライド 14）。

終戦とともに迎えた晩年、朝河は自身に続く次世代へ心を向けるようになります。1945 年 12 月 28 日、イェールの大学院で指導し、当時マサチューセッツの高校で教鞭を執っていたマーガレット・イェリソンに宛てた手紙で、朝河は述べます。「万事がうまく行く時代を期待することはできない。…多くの人々が、過去を省みず、将来を賭し、危険に満ちた近道を選択する。世界で指導的な地位を占めることになった米国も、ほとんど考えてはいない。…我々は、この時代を導くために必要な、鋭敏な公共的良心と知性を備える人物を必要とする。それ故、教育に携わるあらゆる人々に、計り知れない責任が生ずる。」

1948 年 8 月にこの世を去るまでの 3 年間を、朝河は学問追究と自己研鑽に注ぎ、これを、もって生まれた省察力、集中力、自己鍛錬力に焦点を当てた武士道精神の現れの一つだと記していました。時機に応じて、朝河は GHQ 指揮下の占領政策に関する関心から筆を執り、1947 年 4 月 27 日に、当時の極端な農地改革に対して警告を発しています。しかし彼はほとんどの問題に関して、

若い世代にバトンを繋ぎ、必要な知識と人格を備えていると自身が判断した人々に、問題の対応を委ねるようになりました。

亡くなる 3 日前、つまり 1948 年 8 月 8 日に記された彼の最後の日記には、自然の中を散歩し、その美しさに触れる喜びについて記す一方、過度に概念的な手法をとるイギリスの歴史家トインビーと、論敵コリングウッドについて論じています。

IV. 結　論

最後になりますが、平和のもろさについての朝河の認識が当てはまる時代は、今以外にないと思われます。その問題に我々が対処するうえで、彼自身がそうであったように、「希望を諦めないリアリスト」である他に、より建設的な方法は見当たりません。朝河が残した英知は、国家間の協調を促進する国際的な制度を維持するよう、現代の我々にはっきり示しています。国内政治の説明責任を確保し、何が公共善に貢献するのか識別した上で、その実現のために行動できる知性と人格を絶えず研鑽するよう、我々を諭しています。

彼は、1943 年に記した覚書で、時代を超越してあてはまる、市民の義務について記しています。「民主主義の成熟には常に、個人の道徳的活力が必要だ。またそれ故に、良心を涵養し、精気を与える努力を、日頃から自主的に重ねる必要がある。民主主義の究極の目的とは、民主主義それ自体の完成と、より優れた品格の創出であり、これら二つの目的は、一方無くして他方が存在することはありえない。各人の自由の獲得が、その自発的な自己研鑽に懸かる、この苦難多き道に踏み出す勇気を持つように。」

ご静聴、有難うございました。

◆ 質疑応答

渡部：　笹川平和財団の渡部恒雄と申します。ポーツマス講和条約の中の概念の門戸開放、これはオープンドアで、もともとはアメリカのジョン・ヘイ国務長官が提唱した有名なものですね。どの程度、この朝河貫一という人はアメリカのその当時のオープンドアというところに影響を受け、それを自分のものにしていたのでしょうか。またその後、ジョージ・ケナンは、オープンドアは格好ばかり付けていて、実質がなかったのではないかと批判しています。そのあたりも含め、先生が見ているところ、朝河とオープンドアの関係をぜひお聞きしたいと思います。

Rosenbluth：　大変によい質問で、答えるのは難しいですが、朝河先生の大学生からの論文を見ると、やはり 19 世紀の思想を本当に信じ、門戸開放、自由貿易というものは基本的にはよい政策だと思っていたようです。アメリカや列強諸国が、門戸開放を無視して、むしろ自分の利益のために力で土地を取ったりするのは、朝河先生の立場からするとがっかりするものですよね。ですから、理想はよいが実施は駄目だと思っていたでしょう。

浜田：　質問ではありませんが、よい機会なのでご紹介します。朝河先生のご出身の二本松市では、中学生・高校生をイェール大学など海外に派遣する「市民の翼」という国際交流を推進されています。会場にも、おそらく Rosenbluth 先生にイェール大学でいろいろお世話になった学生が 15 名ぐらいいるはずです。ちょっと手を挙げてください。先生に感謝の意を表したいと思います。

Rosenbluth：　こちらこそ、本当にどうも。皆さん、遠く二本松からよくいらっしゃいまして、私たちこそ感動していますよ。

◆資　料

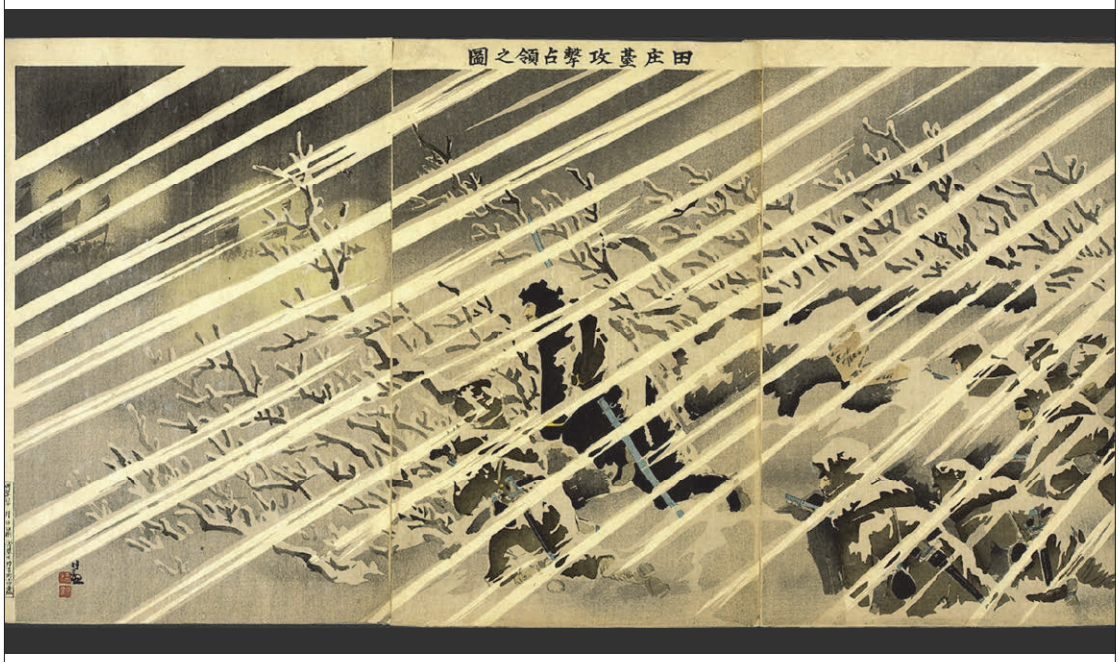
スライド 1

スライド 2

- 世界システム:「自由貿易ではなく、ルールなき自由競争」
- **国内政治**: 軍部の特権的な地位
- 政治指導者の資質

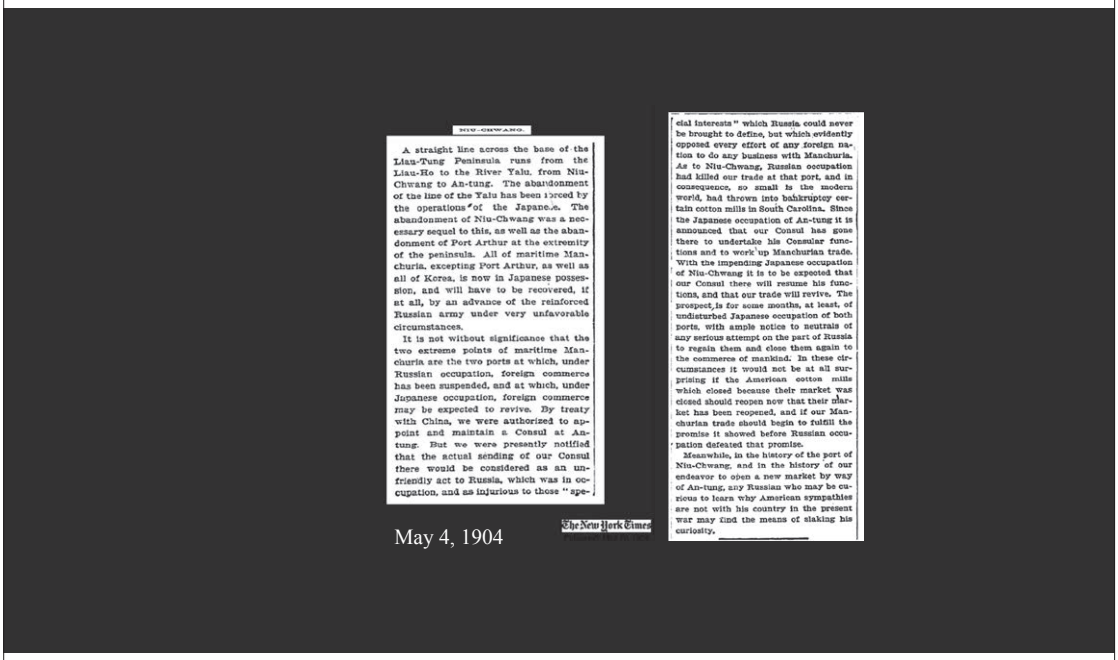
スライド 3

スライド 4



スライド 5

スライド 6



NIU-CHWANG.

A straight line across the base of the Liau-Tung Peninsula runs from the Liau-Ho to the River Yalu, from Niu-Chwang to An-tung. The abandonment of the line of the Yalu has been forced by the operations of the Japanese. The abandonment of Niu-Chwang was a necessary sequel to this, as well as the abandonment of Port Arthur at the extremity of the peninsula. All of maritime Manchuria, excepting Port Arthur, as well as all of Korea, is now in Japanese possession, and will have to be recovered, if at all, by an advance of the reinforced Russian army under very unfavorable circumstances.

It is not without significance that the two extreme points of maritime Manchuria are the two ports at which, under Russian occupation, foreign commerce has been suspended, and at which, under Japanese occupation, foreign commerce may be expected to revive. By treaty with China, we were authorized to appoint and maintain a Consul at An-tung. But we were presently notified that the actual sending of our Consul there would be considered as an unfriendly act to Russia, which was in occupation, and as injurious to those "special interests" which Russia could never be brought to define, but which evidently opposed every effort of any foreign nation to do any business with Manchuria. As to Niu-Chwang, Russian occupation had killed our trade at that port, and in consequence, so small is the modern world, had thrown into bankruptcy certain cotton mills in South Carolina. Since the Japanese occupation of An-tung it is announced that our Consul has gone there to undertake his Consular functions and to work up Manchurian trade. With the impending Japanese occupation of Niu-Chwang it is to be expected that our Consul there will resume his functions, and that our trade will revive. The prospect, is for some months, at least, of undisturbed Japanese occupation of both ports, with ample notice to neutrals of any serious attempt on the part of Russia to regain them and close them again to the commerce of mankind. In these circumstances it would not be at all surprising if the American cotton mills which closed because their market was closed should reopen now that their market has been reopened, and if our Manchurian trade should begin to fulfill the promise it showed before Russian occupation defeated that promise.

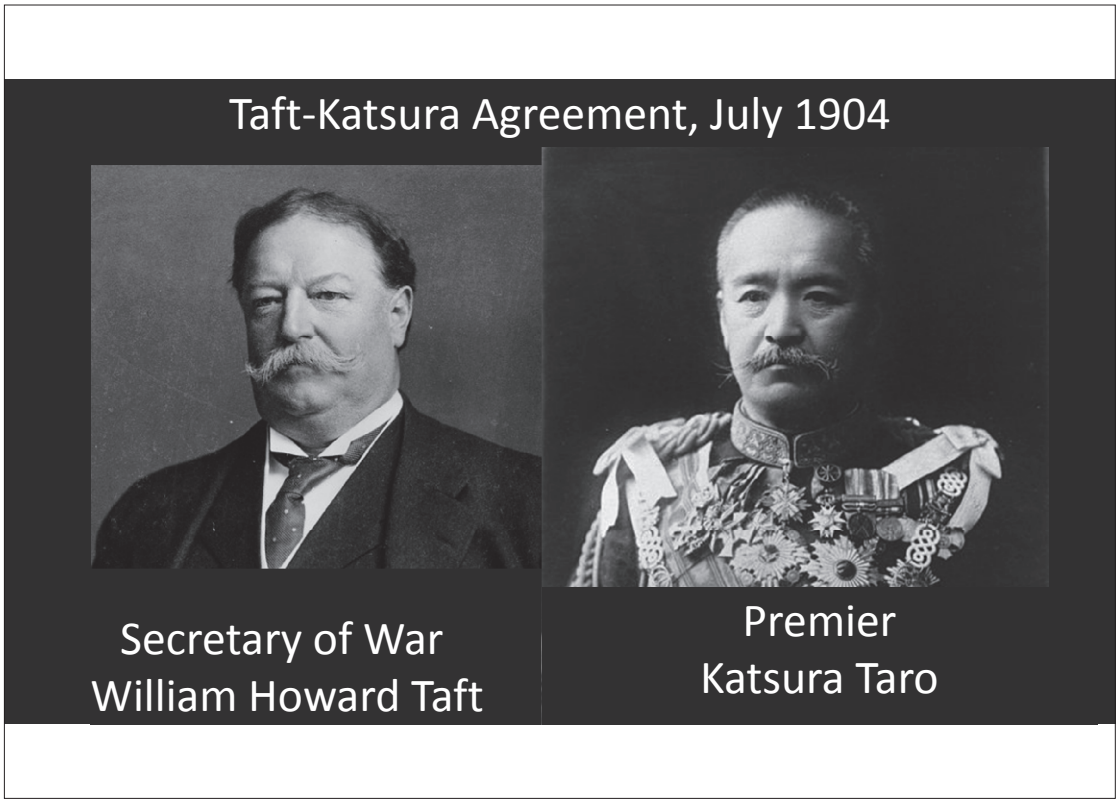
Meanwhile, in the history of the port of Niu-Chwang, and in the history of our endeavor to open a new market by way of An-tung, any Russian who may be curious to learn why American sympathies are not with his country in the present war may find the means of slaking his curiosity.

The New York Times

May 4, 1904

スライド 7

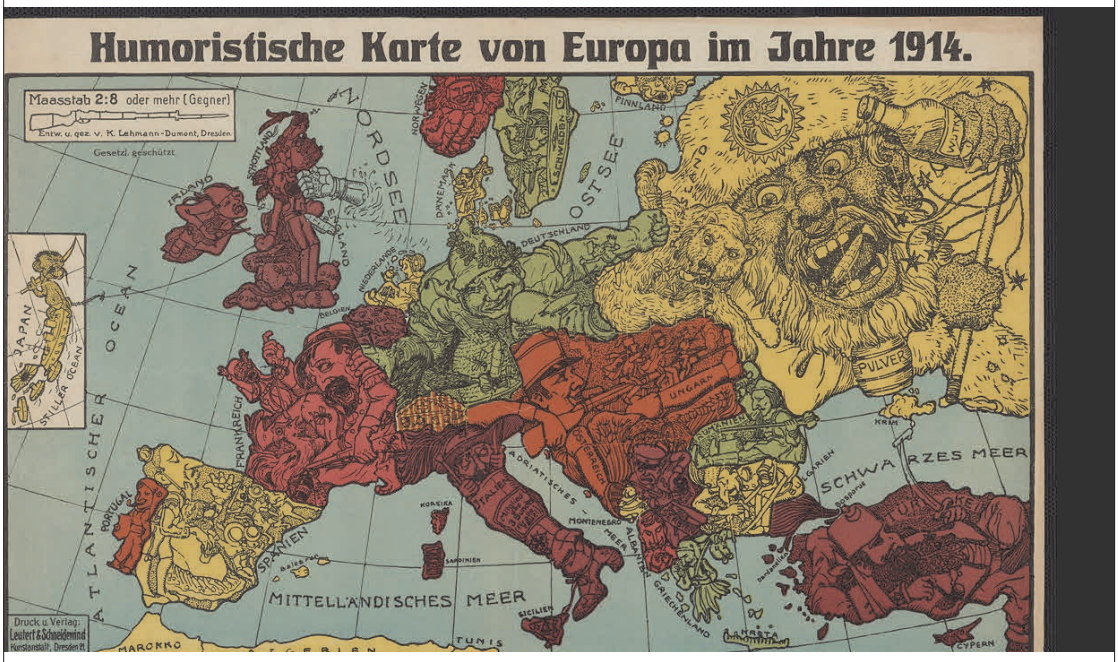
スライド 8



スライド 9

スライド 10

スライド 11



スライド 12

政治指導者の資質

- Although Asakawa's hopes were dashed when certain individuals could not stop the war, he was relieved to learn afterwards that Konoe and the Emperor had been on the side of peace.

先日自ら命を絶った前首相の近衛文麿公の回顧録を手元に置くことができ、
近衛公は1941年4月から辞任を余儀なくされた10月に至るまで、
戦争回避のための困難に満ちた闘争について、
克明に記している。

スライド 13

1947年5月4日

「真っ直ぐで、
ほっそりとした」枝
と優美で繊細な若葉
に感銘を受け、
次世代の若き日本人
に望みを託しました

スライド 14

Democracy constantly makes an imperative demand on the moral energy of the individual and therefore stimulates his independent effort to develop and invigorate it. The ultimate ends of democracy are the perfection of itself and the creation of better characters, the double purposes which depend on each other. Embark upon an arduous road on which the liberty of each person has to be bought daily at the price of his and her willing sacrifice.

民主主義の成熟には常に、
個人の道徳的活力が必要だ。
またそれ故に、良心を涵養し、
精気を与える努力を、
日頃から自主的に重ねる必要がある
。
民主主義の究極の目的とは、
民主主義それ自体の完成と、
より優れた品格の創出であり、
これら二つの目的は、一方無くして
他方が存在することはありえない。

スライド 15

Miss Caroline Furness of Vassar College, who went to Japan to attend the Pan Pacific Conference, photographed addressing the students of the Girls' Professional Education School at Tokyo.

スライド 16

講演３
今日の日米関係を朝河先生はどう見るか

加藤良三　元駐米大使

――― 次は、外交官として長らく日本のために尽くされ、2001 年から 2008 年まで駐米全権大使として活躍された加藤良三大使です。2001 年は、アメリカが世界の軍事力で 51％という絶大な力を誇っていたときであり、新たなテロの攻撃に遭った時代です。そのときに日米関係発展のため、日夜外交官としてお務めになりました。加藤大使は、若い方に必ず朝河貫一の『日本の禍機』をお勧めになるとお聞きしていますので、どこを読めばよいかなども教えていただければと思います。

ご紹介いただいたほど、私はいろいろなことに通じてはいません。今日のお話も、朝河貫一先生流の『日本の禍機』の書き方によれば、「演者は独断、誤謬（ごびゅう）の類至って多く、知的検証に堪える語彙はなはだ豊富ならず。願わくば諸兄、これを諒とされよ」というところから始めなければいけない状態です。

朝河先生は多方面にわたっての業績が多く、私はすべてに触れることはできません。それで、皆さまが引用される『日本の禍機』のアメリカ人論のところに則して申し上げます。『日本の禍機』の中で、朝河先生は、日本のアメリカに対する当時の議論を三つ挙げております。

一つは、日本人はアメリカを拝金主義、金だけの国だと思っていること。二つ目は、日本人はアメリカを膨張主義による対外の誤策を犯す国だと思っていること。三つ目は、アメリカにはここから来る民情の不統一があるということです。それを挙げた上で、朝河先生は一つずつ自分の論点を提起しておられます。

第一の拝金主義については、そういう面はあるけれども、アメリカは元気、つまりエネルギーと申しますか、元気が腐敗を上回るということを指摘しておられます。それとの関連で、道義的反動力が非常に強いと言っておられます。そして、アメリカには貧富の差が確かにあるけれども、貧者が富者になる機会が他国よりも大であるとも書いてあり、これは今のわれわれの言葉で言うとアメリカンドリームというものだろうと思います。

日本では、アメリカは民衆の趣味の低きことなど言っているが、実際にアメリカの中に入ってみると、社会および家庭の雰囲気は厳粛を好む家庭が多い。その意味では、アメリカには非常に保守的な生活があると書いてあります。

その次に、日本人はアメリカでの教育は実利的にして、児童に倫理すら教えず、大学生は怠惰という議論があるが、これはまったくとんでもない軽薄な意見であると記しています。アメリカの教育は、朝河先生の言葉によれば「実利」（ユーティリティー）と「訓練」（カルチャー）の両面があって、日本よりもある意味では底堅い、つまりここでリベラルアーツというものの重要性を強調しておられるわけで、今日性もあることだと思っております。そして、私自身、日本の大学生よりアメリカの学生のほうがずっと勉強するという感じがいたしました。ちょっと脇に外れますが、私の知っている日本人の私学の中学校・高等学校の先生が、アメリカの友人と教育論を話すと、行き着くところは、どうも日本とアメリカで教育についての考え方が基本的に違うようだと申しておりました。

日本では教育というと、国が定めたものを先生が下に教える、与えるという感じのもので、矢印で言えば上から下へ向かうものです。一方、アメリカは、次世代の、その次にアメリカという国をつくる若い者にどういう国づくりをさせるか、彼らの自由な発想をエンカレッジするために、その資材を提供するという、矢印でいうと下から上への教育になる。ここが大きな違いじゃないかという話を聞きました。非常に乱暴な言い方を許していただければ、教育だけは国に任せるなというのがアメリカの考え方だろうと思います。アメリカ憲法の下、教育は連邦の所掌ではありません。

余談ですが、私の友達がいいユーモア小説を読んだといって、こんなことを教えてくれました。例えば、中学や高校どこでもよいのですが、打率 10 割の野球選手でないとコーチになれないというのはおかしい。逆に名コーチというのはだいたい打率は低くて、選手時代は不遇だった人が多く、それがよいコーチになっていく。そういうコーチが先生として活かされるべきだという話です。

2 番目の膨張主義による対外的な誤策という点ですが、1908 年に『日本の禍機』を書かれた頃の状況もありますが、朝河先生もアメリカは本来、植民地経営などには行かないという国是だったはずと書かれています。クリーブランド大統領を朝河さんは非常に評価しておられますが、クリーブランド大統領でも植民地政策については妥協したところがある。ただし妥協しつつも、「真にやむを得ず植民地獲得に動くが、異人種の進歩と幸福を図ることこそ責任」、と自分を納得させようとしているところがあると。現在のアメリカを見ましても、私はアメリカに領土的な野心はないと思います。

3番の民情の不統一、国論が分かれるという点。ここは読まれた方も多いと思いますが、朝河先生は、外国人に対してアメリカ人は自国の弱点および短所を語るのをはばからず、自分の国の悪口を言うと記されています。しかし、「国家創立の根本思想、または愛国心の根拠および性質に関しては識者、国民ともこれを疑わず、史上および現今の国事を自在に非難する人といえども、自国生存の根本的問題に関しては熱烈な信仰を有する。米人の愛国心の極めて深厚なるを見得たりと信ずる」としています。これは先ほどの教育というものの考え方と相俟って、やはり歴史的訓練の結果、アメリカにはこういうものが根付いているのではないかという気がします。

その関連で朝河先生は、アメリカは新国なるがゆえに、伝説いまだ豊富ならずと続けます。つまり個々人のルーツは別にして、国として変えるべき神話の故郷がない国だから、現在価値で勝負するしかない国だ。「されど民主国なり。信頼するところは人民の知見」、と言っておられます。アメリカには、絶大な反省力と共にユーモアのセンスがあります。戦争で死ぬ間際までユーモアのセンスを発揮するようなところがあるという趣旨のことを書いておられます。

いまここに朝河先生がご存命でおられて、私がおずおずと出ていき「今日のアメリカを見る時どう評価したらよろしいのでございましょう」と聞いたら何と言われるか。先生は、難しい顔をされながら「それは変わったもの変わらないもの、変わるべきもの変わらざるべきもの、これを見分けることです」ぐらいは言われると思います。でも私からすると、それが分かれば世話はないという感じもするのですが。これは全部私の妄想ですので、朝河先生にご迷惑をかけるつもりはありません（笑）。

ただし、例えば、アユが最近うまくなくなったなどと言う場合に、自分が年を取って舌がおかしくなっているのと、アユそのものが養殖かなにかでまずくなったというケースの二つがあると思います。私が1965年、劣等感の塊としてアメリカのイェールの研修に参りました頃、オレンジがとてもおいしかった。しかし、そのあと1987年に19年ぶりにアメリカに参り、そのときに食べたオレンジはどうも期待したほどおいしくなかった。これは私の舌が変わったというより、オレンジが変わったのだという気がします。

私には、かつて光り輝く60年代のアメリカというもののイメージが強烈に焼き付いています。なにもかも劣等感に悩む日本からの学生の頃、その後の若き書記官の時代も、アメリカのものは万事光り輝くように見えました。しかし、今私はアメリカに対してクリティカルなことを言います。そこには、アメリカが変わってしまったところが確かにあると思うからです。しかし、自分が変わったことを認めない、アメリカだけが変わったのだと言う場合には、自分が傲慢になっていることもあるはずで、自分としては自戒したいところだと思っております。

アメリカでは、私が在勤していた頃から公民権法やアファーマティブ・アクションやポリティカル・コレクトネス（PC）といった社会規範の定着などがどんどんと続き、アメリカという国はすごいなと感じていました。この PC は行き過ぎもあるので、今、火が噴いているのでしょうが、「ジャップ」といった言葉を心配しなくてもいいような環境を作り出していたと思います。アメリカというのは「理念」の国ですね。理念というのは神棚に上げて、チーンと毎朝拝むようなものではなく、理念が崩れたら、その回復のために武力を行使しても立ち向かうという、これがアメリカなのだなという気がいたします。

身近なことですと、あるとき駐車場が混雑していて、身体障害者のための駐車スペースに停めると、アメリカの子供が出てきて「おじさん、そこに停めては駄目だよ」と言われました。私はもちろんそれに従いましたが、これがアメリカ、子どもの教育もいいなと思いました。

それから、免許証の切り替えなどいろいろとテストを受けるときがありますが、最初は試験官が意地悪な感じがする。ところが最後の瞬間、入るか入らないかというところになると、なんとかして入れてやろうという温かさが働くのがアメリカだという印象でした。

一方、今日の政治、情報が日本のメディアを通じてのものが主になってしまい、現実にワシントンやアメリカに行っていないのですが、例えばエリザベス・ウォーレン、マサチューセッツ州知事について。彼女にはインディアンの血が入っているか、入っていないか、そのための DNA 検査をやる。その結果、普通のアメリカ人よりもインディアンの血の比率がずっと低かったと。こうしたことが、大統領の選挙の文脈で出てくるのはどういうことなのか、どうなっているのかと思うところがあります。そういうマジョリティーが大統領になれない憲法はおかしいと、憲法改正の動きなどが出てくる。そんなことはないのかもしれませんが、つい妄想的に考えてしまうこともあります。私が感じてきたアメリカの寛容性はどうなるのだろう？

私は歴史家でもなんでもない不勉強な学生だったわけですけれども、確か高校のときに習ったローマのポリビオスという歴史家が、政体循環論というものを説いています。君主制から始まって、君主が暴君になり、これが貴族制に移っていく。やがて貴族制もなんだか分からなくなり、寡頭制（オリガーキー）になっていき、それでは民意が反映されないというので民主制になる。民主制は衆愚制になり、衆愚制からまた君主制に戻る、そんな循環の話だったと思います。

ローマ時代の話ですが、それが今日どれほど世界に妥当しているのか？　話があちこちに飛んで申し訳ないのですが、私がアメリカにいたとき、あるアメリカ人がアメリカは二軸型の国家である、「バイナリー」だと言いました。日本は中心が一つで、どちらかというとピラミッド型の秩序というものができると安心する国民です。しかし、アメリカは同心円というか核が二つないと安心で

きない国であると話していました。

アメリカの人種、宗教、文化その他を見ると、あれだけ多様な国はないと思います。だから、イタリアやイスラエルのような多党制になっても、少数政党乱立になっても全然おかしくない。州レベルなどでは、ますますそうなっても全然おかしくないように思うのですが、なぜかやはり二つに収斂されます。

政党で言えば、民主党と共和党。野球で言えば、アメリカンリーグとナショナルリーグ。フットボールで言えば、アメリカン・フットボール・カンファレンスとナショナル・フットボール・カンファレンス。さらにペプシコーラにコカ･コーラ(笑)。なぜかなんでも二つです。その二つが、森羅万象、あらゆるイシューについてのマニフェストをつくって対応する。そのとき主なイシューになったものについて、国民がどちらを選好するかということで結果が決まるといいます。

しかし、その中心になる問題は時代の変化とともに変わっていきます。例えば 50 年の周期で見ると、民主党の政策が共和党の政策になっていき、共和党の政策が民主党の政策になっていくこともある。例えば奴隷解放などはその一つです。さて、今、分裂が激しいアメリカで第三の核が出来る可能性はないのか？　たぶん少ないのだろうと思いますが、アメリカの真ん中を糾合するという要請、エネルギーはこれからどうなっていくのでしょうね？

最後になりますが、朝河先生が言われたアメリカ人のユーモアのセンスについて。例えば、レーガンさんは非常にユーモアのセンスがありましたし、その昔、日本では吉田茂さんはとてもユーモアのセンスがあったと思います。

古い話ですが 1980 年代後半、竹下総理の頃に、トロントでの G7 サミットでレーガンさんと田村元通産大臣とのやりとりがあった。そのとき、田村さんが「レーガン大統領、あなたは会うたびに若くなられる。時計の針があなたの場合は逆に回っているようだ」と言うと､レーガンさんは「ワハハ、うれしいことを言ってくれますな、田村さん。大変ありがとう。だけど、実は私は年を取っている。もう自分で日ごとに年を取っていることが如実に分かる。まず 3 点ある。第 1 はものすごく忘れやすくなった。これは致命的だ。それで、第 2 と第 3 は・・・忘れた」と言ったそうです（笑)。

それから古いですけど冗談ついでにもう一つ、戦後すぐ 50 年代の保守合同前の吉田茂さんのエピソードです。国会で徳田球一という沖縄出身の共産党の初代書記長というなかなかの大物が、予算委員会かなにかで吉田さんを質問で厳しく追求しました。国会が終わった後、吉田さんが座っている前を通り過ぎるとき彼は、「吉田さん、どうです？　今日の僕の質問にはぎゅっと参ったでしょう？」と言うと、吉田さんは「徳田君、君は見どころがある。共産党を辞めて自由党に入り

たまえ」と答えたそうです。どこかそういうスケールの大きさというか、乾いた上質な笑いがあったように思います。最近の笑いは世界のいたるところで、日本でもそういうところがあろうかと思いますが、概して引きつった笑いが多くなっているような気がいたします。

最後に私流のジョークも。夢の中で朝河先生に「どうもありがとうございました」と伝える。朝河先生は「君はどうだ、熱なき光で考えたか」と問う。それに対して私は「ただいま日本中 LED で、熱なき光で満ちております。ちなみに私自身は若干風邪気味で、せいぜい光なき微熱です」と返す。すると朝河先生から「君は相変わらず五里霧中だな。君に必要なのはフォグランプだ」と返される（笑）。最後に「君の成績はＦ！」と言われるのではないかと思いますが、そういう馬鹿な話で締めくくらせていただきます。ありがとうございました。

◆ 質疑応答

香田： 香田洋二と申します。アメリカには、ワシントンが桜の木を切って、お父さんに「自分がやりました」という逸話にあるような正直さ、自由、平等という建国の理念があります。しかし、英語さえ話せないラテン系アメリカ人が増えていく中、アメリカが連綿として受け継いできた理念は受け継がれていくのか。こういう理念、精神的なリーダーシップなくして、アメリカは世界のリーダーになれるのでしょうか。

加藤： 私の考えというほど立派なものはございませんが、従来アメリカには三つの顔があると思います。一つの顔は大西洋を見る顔です。もう一つの顔は太平洋を見る顔。もう一つの顔は西半球を見る顔であって、この西半球を見る顔が、いま香田さんが言われたことだろうと思います。もちろん、その三つの顔の基盤にアメリカ自身を見る顔があります。

従来、私が外交官として仕事をしていた頃は、大西洋を見るウェイトが NATO を含めてものすごく重かった。それがだんだん中国の台頭と日本が大国になったということなどもあり、太平洋のウェイトも上がっています。その一方で人口的、デモグラフィックの点ではヒスパニック、西半球の顔が比重を増してきたことにより、いまおっしゃった問題も抱えることとなった。しかし今日すぐ、明日すぐということではないでしょうし、その点は私も見通しが付きません。ただ、教育システムなども含めてなんらかの影響は当然出てくるだろうとは思います。

しかし、現在 100 人の上院議員のうち、ユダヤ系も含めてのマイノリティーは 9 人です。下院議員 435 人のうちマイノリティーは 92 人、22%。50 州の知事ではまだ 2、3 人です。いわゆる

市長レベルになれば、たくさん人数がいますが、それでも大半はマイノリティーではないと思います。これがだんだん変わってくることでその先どうなるのか。これはアメリカにしか解決できない問題です。ただ願わくは、アメリカにとっては迷惑かもしれませんが、外国人がアメリカ人になりたいとあこがれる国であってもらいたい。そのためにどういう精神を持ったアメリカであればいいのかということを、アメリカの方に一生懸命考えてもらいたいですし、日本はそういう人たちへの協力はできるだけするべきだと思っています。

パネルディスカッション

第一部　今、なぜ朝河貫一か

司会者：　船橋洋一（アジア・パシフィック・イニシアティブ理事長）
ディスカッサント：　玄葉光一郎（衆議院議員、元外務大臣）
黒川　清（政策研究大学院大学名誉教授）
田中明彦（政策研究大学院大学学長）

第二部　新しい太平洋時代――次世代に繋ぐ希望

司会者：　渡部恒雄（笹川平和財団上席研究員）
ディスカッサント：　阿川尚之（同志社大学特別客員教授、慶應義塾大学名誉教授）
瀬口清之（キヤノングローバル戦略研究所研究主幹）
秋田浩之（日本経済新聞社編集局コメンテーター）

第一部
今、なぜ朝河貫一か

司会者： **船橋洋一**　アジア・パシフィック・イニシアティブ理事長
ディスカッサント： **玄葉光一郎**　衆議院議員、元外務大臣
黒川　清　政策研究大学院大学名誉教授
田中明彦　政策研究大学院大学学長

――― これよりパネルディスカッションの第一部をはじめます。

司会は、船橋洋一さんです。船橋さんは、朝日新聞で緒方竹虎以来の主筆を務められた後、一般財団法人日本再建イニシアティブ（現在はアジア・パシフィック・イニシアティブ）を設立され、理事長を務めておられます。ワシントンの経験が長く、アメリカ、中国はもとよりロシアのことにも精通しておられます。安倍総理もそうですが、その前から船橋さんは地球を俯瞰しつつ分析することで著名でいらっしゃいます。

続いてディスカッサントの３名をご紹介します。玄葉光一郎衆議院議員は、元外務大臣で福島のご出身でもあります。今朝、ドイツからこの会のためにわざわざ戻ってきていただきました。

黒川清政策研究大学院大学・東京大学名誉教授は、日本医療政策機構の代表理事でもあり、福島原発の国会事故調査委員会の報告書をまとめられました。その報告書の中の「はじめに」で、朝河貫一先生の著書『日本の禍機』について触れ、日露戦争のあと変われなかった日本が今度は変われるのかという、大きな命題を突きつけていらっしゃいます。

最後は、政策研究大学院大学学長の田中明彦先生です。田中明彦先生は、国際協力機構（JICA）の理事長を務められました。国際関係、国際政治のご専門で、長らく東京大学の教授をお務めになりました。MIT の卒業生の大先輩でもあり、日本、アメリカ、中国、そして世界全体の状況、新しい中世、リベラリズムに根ざした国際システムということも研究されています。

テーマは「今、なぜ朝河貫一か」です。皆さまよろしくお願いいたします。

船橋：　本日は、既に基調講演で皆さまに大変密度の濃い、レベルの高いお話を伺い、問題や課題もたくさんご提示いただきました。

浜田先生がお話しされた、朝河貫一は日本と中国とアメリカ、地政学的な競争を考えて、どうしたらよいのかを真剣に悩み考え抜いたとおっしゃっていたこと、これは、本日の大きいテー

マの一つです。

もう一つ、加藤大使がアメリカをどう見るかとお話しされた点。当時、日露戦争直後の時代のアメリカで起こっていたこと、アメリカのパワーが漲ってこようとするところで、それに対する日本のアメリカ観。現在、アメリカは大きく変わっていますが、今の日本はアメリカのパワーの衰えにどのように対応するのか、それも同盟国としてというテーマもあります。

日露戦争後もうひとつ、それまでのロシアに対する嫌悪感が、今度は日本に対する嫌悪感になってしまった。日本に対する同情は、今度は中国に対する同情に変わってしまった。日露戦争後にそのような大きな変化が生まれ、朝河は非常に危機感を抱くわけです。そのときの日本の置かれた状況に、今中国が部分的にあるのではないか、そのような点から、中国をどう見るのかということもあります。

Botsman 先生、Rosenbluth 先生も本当に深い学殖に裏打ちされた、朝河貫一論のお話を聞かせていただき、とても感銘を覚えました。やはり日本からアメリカに、アメリカを一つのモデルとして、エミュレーションとしてのアメリカという形で日本はやってきた。日米の関係論もそういった立ち位置だったと。特に戦後は、アメリカの世紀の中の日本ということで、ずっと同盟も含めて、価値体系も、貿易システム、自由貿易も、そういう形でリベラル・インターナショナル・オーダーという世界の秩序、地域の秩序を考えたときに、アメリカは日本にとって不可欠の存在だった。その世界秩序をこれからどのように維持していくのか。

とても盛りだくさんで全部はカバーできないと思いますが、先ほど植木さんが紹介された３人のパネリストの方々に、最初に 10 分ずつお話を伺ってからパネルディスカッションに移りたいと思います。それでは玄葉さん、最初にお願いいたします。

安積艮斎と朝河貫一の師弟関係を考察　玄葉光一郎

玄葉：　ご紹介いただいた玄葉光一郎です。冒頭に朝河貫一との縁（えにし）を申し上げたいと思います。司会からお話がありましたが、私は福島県の出身でございます。同じ中通りですが、

朝河貫一さんは高校の先輩にあたります。高校時代に朝河桜の話はよく聞かされました。安積（あさか）という高校ですが、高山樗牛賞とか久米正雄賞とか結構文学者も出ていて、それに並んで朝河貫一賞というものがあり、学生をエンカレッジする賞を設けています。

私は国会議員になって 25 年になりますが、最初に衆議院選挙に出たときの後援会長さんが、県議会議長もお務めになられた、遠藤正二さんという方です。文化人で神官さんでもありました。その方は、先ほどお話しされた矢吹教授のおじさんです。もっと言えば、『最後の「日本人」』を、改めて私も今回読んできましたが、その著者である阿部先生も時々遠藤先生のところに行かれていたようです。

国会議員になって 12 ～ 13 年経ったとき、イェール大で朝河のシンポジウムをやるからおいでと招待状が届き、短いスピーチをやった記憶があります。そのとき加藤大使や NHK の大越さんがいらっしゃっていて、いろいろな意味で縁があります。

私が『日本の禍機』という本を読んだのは 30 代前半で、もう国会議員になっていましたが、非常に感動と衝撃を覚えました。特に、世界史の根底に流れる道義心とか、反省力ある愛国心とか、私曲という言葉とか。非常にワーディングも上手で強く印象に残っています。

加藤大使がそんなに朝河貫一ファンだとは知りませんでした。また、当時外務委員会で私と同じく筆頭理事をされていた、まだ総理になる前の福田康夫さんに『日本の禍機』のことを申し上げたら、実は自分にとっても「私の一冊」なのだと。確かその直後ぐらいに朝日新聞に、私の一冊として紹介されていたのが『日本の禍機』でした。福田康夫元総理も朝河には非常に感動していたと記憶しています。

もう一つ、縁の延長線上で、問題提起の一つでもありますが、実は今回、『最後の「日本人」』とか、朝河貫一研究会の『甦る朝河貫一』を読んでみましたが、朝河貫一は安積艮斎（あさかごんさい）の影響を結構受けているのではないかという感じがしました。安積艮斎と聞いて、どのぐらいの方がご存知か分からないですが、安積艮斎と朝河貫一は実は親戚になります。安積艮斎は江戸の末期の儒学者で、ここは岩崎小彌太のホールですか？ NHK の大河ドラマの「龍馬伝」で岩崎弥太郎は「江戸に出て天下第一党の安積艮斎先生に弟子入りするぜよ」と、言っているのです。

佐藤一斎先生の弟子でもある安積艮斎は、大変な学者だと私は思っています。当時の『洋外紀略』などという本を読んでみ

ると、世界のことが江戸末期に分かっていた。吉田松陰なども弟子入りしていた。少なくとも影響を与えていたことは間違いないと言われている方です。二本松、郡山と関係があって、安積国造神社が安積艮斎の生家です。神社に生まれたわけですが、確か朝河貫一のおばさんが艮斎の生家に嫁いでいる。朝河貫一が安積高校に通っていたときは、安積艮斎の神社に下宿していた。だから、いろいろな意味で影響を受けていたのではないかと思われます。

今日は、地元の方々もいらっしゃるので、むしろご意見もお伺いしたいです。というのは、結局、会津を擁する福島県ですが、実は安積艮斎は郡山の出身で、儒学者であり朱子学を学んで、かなり合理主義者です。だから会津がもっと安積艮斎に学んでいたら、幕末にああいう態度は取らなかった可能性があると私は思っています。

二本松藩の政治顧問だったのですが、あの幕末の、最後の局面で彼が生きていれば、西に付けと言ったのではないかと、安積艮斎に詳しい方は言っています。ですから、その安積艮斎の影響を、学ぶ姿勢も含めて、実は受けているのではないかという感じを受けています。本日は研究者の方々もたくさんいらっしゃっているので、ここは研究者の方々への問題提起として申し上げたいと思います。

朝河貫一が今のアメリカをどう見るかということを加藤大使がお話しされましたが、今の世界の情勢を見ると、ミー・ファーストというか、自分たちの国第一というのが特に大国において蔓延しているのではないでしょうか。アメリカだけではなくて、中国であるとか、ロシアであるとか。それに対して、もっとルールで秩序をつくっていこうという立場があると思います。

日本は、当然そういう立場に立たなければいけないし、立っているわけです。朝河貫一が生きていれば、世界史の根底に流れる道義心とか、私曲という言葉を使っていたでしょう。でも同時に、先ほどホープフル・リアリストという話がありましたが、リアリストでもあるから、たぶんパワーとか力は全否定をしないと思います。ただし、必要なものだけれども、それだけになってはいけないということを、やはり厳しく指摘をしていたのではないかと思います。

船橋：　玄葉さんは、職業を間違えたんじゃないんですか（笑）？歴史学者になったほうがよかったのでは。

玄葉：　結構いま勉強しているところで（笑）。

朝河の視点で考える、グローバル化の先に見えるもの　田中明彦

船橋：　では田中明彦さんお願いいたします。

田中：　本日は朝河貫一没後 70 年ということでのパネルディスカッションに加えていただき、大変光栄です。特に朝河は二本松出身ということで申し上げますと、私は前職で国際協力機構（JICA）の理事長を務めておりました。二本松には JICA の青年海外協力隊訓練所があります。JICA ボランティアで世界中に行き、開発途上国の皆さんと一緒になって地面の上で働いて苦労する、現場で働く国際人を育てているのが二本松であり、JICA は常々感謝しておるわけです。まさにその場所で生まれた、日本の 20 世紀を代表する国際人である朝河貫一の業績をこれから振り返り、今後の世界をどう見るか、あるいはアメリカ、中国をどう見るかということについての議論に参加できることを大変うれしく思います。

私自身は玄葉先生のようなヒストリアンではないので、朝河の業績と現代を結び付けることはできないのですが、先ほど玄葉先生がおっしゃったように、今の時代に朝河がいたらどのようにものを見るか。その中でホープフル・リアリスト、希望を諦めない現実主義者はどのようにものを見るのだろうかと考えてみました。朝河はホープフル・リアリストとして大変苦労して思いどおりにならなかったわけですが、今の時代もホープフル・リアリストであるのは難しい時代ではないかと思っています。

というのは、ちょうど来年ぐらいが冷戦後 30 年です。30 年というのはかなり長い年月であります。1989 年のベルリンの壁崩壊から来年で 30 年。これを振り返ってみると、私は最初の 20 年ぐらいは、ある種第二次世界大戦後の最初の 20 年ぐらいと同じように、少なくとも戦後の西側陣営と言いますか、それと同じように、驚くべき成長の時代だったと思います。

グローバリゼーションが進み、世界中で経済相互依存が進むこの背景に冷戦後の時代でいえば、まさに驚くほどの情報技術の進歩があったわけです。今私どもが普通に使っているインターネットのブラウザが発明されたのは 1990 年のことで、冷戦の終わりの年のことです。これが商業化されたのが 1995 年ぐらいからですが、いまやブラウザがなかったらほとんど生きていくことができないような時代になっています。

日本にいると、この時代が驚くべき高度成長の時代だったなどとは実感できないですし、日本にとってみるとまったくフラットな時代です。しかしながら、世界全体で見れば、1 人当たりの世界総生産がこれほど伸びた時代は歴史上ありません。1990 年から 2010 年ぐらいにかけて、驚くほど 1 人当たりの世界総生産は伸びております。それでいて、冷戦が終わったこともあり、政治体制でいうとデモクラシー、民主主義、民主化が進むという傾向がありました。アジア危機のあとインドネシアが民主化したというのは、アジアにとってみるとある種の驚きでありますが、民主主義が進むという傾向もありました。

ところが、この驚くべき高度成長とグローバリゼーションの時代は、統計などを見てみると、2008 年のリーマンショック後あたりから少しずつ加速度が低下しています。世界総生産に占める貿易の割合も、90 年代から 2010 年ぐらいまではどんどん伸びていますが、世界総生産に占める貿易の割合も 2010 年ぐらいからだいたい平らになってしまいます。外国投資もそのあたりから、ジグザグはありますが、あまり伸びていません。

しかも 2010 年ぐらいから、いわゆる権威主義的な大国の、先ほど高原先生がおっしゃった言葉でいうと、覇権主義的行動が目につくようになります。2008 年に当時グルジアとわれわれが言っていた国の南オセチアとアブハジアを、ロシアが攻めて無理やり独立させました。日本では、2012 年尖閣諸島で中国との間で対立があり、南シナ海でも中国がいろいろなことをやるわけです。

2010 年ぐらいから徐々に、どうもグローバリゼーションというものは一本調子で伸びるものではないと判ってきます。この頃になると、新たに民主主義国になる国は非常に減り、権威主義体制が強まる傾向が出てきています。ですから 2018 年から見て振り返って、直近の 7 ～ 8 年は、その前の 20 年と比べると、かなり変化が起こっている時代なのです。ただ、底流で流れていることはなかなか気付きにくい。この傾向を明らかにしたのが、合衆国でトランプさんが大統領になったことだと見ています。

この背景には、グローバリゼーションで驚くべき高度成長をし世界全体では貧しい人がどんどん減りましたが、先進国の中間層、ロウワー・ミドルがこの 20 年の間にほとんど収入を伸ばしていなかったことがあります。世銀のブランコ・ミラノビッチさんという人の本で書かれた、有名な象のカーブというものです。それで明らかになった結果、どうもこの冷戦後 30 年経ったぐらい、あるいは冷戦の最初の 20 年が終わった次の 10 年で、グローバリゼーションがやや停滞している中で、世界の中では先ほど玄葉先生がおっしゃったように、片方でアメリカファーストであると、片方では、その中で成長した中国が、権威主義体制を弱めずどんどん経済発展できるモデルをつくったのだとなるのです。

貿易戦争的な傾向が出てくる中で、世界全体が 30 年代のようなおそろしいブロック化に向かうとは思いませんが、それでも今までと比べると、かなり経済相互依存も、グローバル化も弱めて、各国が国益に基づいた形の行動を取る傾向が出てくるかもしれないという感じです。その中でどうやって希望を諦めないで、しかも現実主義的に国際関係をやっていくのか。なかなか難しい課題であり、朝河貫一にもう一回生まれてきて教えてほしいところです。

朝河のように世界に出て日本を考える機会を　黒川　清

船橋：　田中さん、ありがとうございました。次は、黒川清さんにお願いしたいと思います。

黒川：　私は、国会による福島原発事故調査委員会という、日本の憲政史上初めての形式の委員会を引き受けました。これは法律もできてやりました。私は福島の原発事故の 3 カ月前、たまたまチュニスにいました。奥田碩さんを団長にして 200 社ぐらいと訪問し、私もお話をしましたが、チュニスは落ち着いた素晴らしい印象でした。ところが、帰国して 1 週間後、アラブの春が起こったのです。あっという間にいろいろなことが広がっているので、何が起こっているのか、ツイッターでずいぶんと情報をフォローしました。

その 3 カ月後に、あの福島の事故が起きたのです。最初の 1 週間は、いったい何が起こっているのかをツイッターで追いかけ続けました。すると日本は明らかに適切に情報を発していないということが分かったのです。私は、せっせとツイート、リツイートしていましたが、これはまずい、日本の信用がガタ落ちになっている、と感じました。アメリカのナショナルアカデミーの 3 人の委員長（科学アカデミー、技術アカデミー、医学アカデミー）もみんな知っていますので、連絡を始め、国会議員や役所に、どう対処すべきかをずいぶんとお話ししました。国際的な、独立した調査委員会をつくる可能性について話をすべく、ゴールデンウィークもワシントンに行き、いろいろな人に会いました。結局、これが実際に法律になっていったわけです。

その頃、船橋さんが、今は「民間事故調」と言っているものを企画しており、私もそれに参加していました。こちらを 2 回か 3 回やったとき、国会でやっと法案が通りました、9 月のことです。

その後、国会議員が委員を選び始め、11 月 20 日ぐらいに 9 人選んだ後に、私に委員長をやってくれと依頼が来ました。「委員を選ぶところでは何も言わないで、決まってからなぜ頼むんだ。政治家として頼み方が不適切」と言った記憶があります。船橋さんには、こういうことになったので、そっちは辞めますとご連絡しました。

そんな状況でしたので、本当にヤバイと思いました。10 人の委員でやるけれど、どうなるのか。このようなことを半年ぐらいでやれるような、独立で行うには超有能なプロジェクトマネージャー（プロマネ）が必須。だけどそんな人が日本にいると思いますか？ 10 人の委員でごちゃごちゃとやっているようでは、なにもまとまらない。そのときにふと気が付いたのが、宇田左近さんという人物です。10 分ぐらい電話で状況を説明し、「プロマネをやってくれないか」とお願いすると、「やる」と言ってくれた。その宇田さんが、実は二本松の出身だということはあとで分かりました。

今日は、国会事故調に提出した報告書の「はじめに」というところをお持ちしています（資料スライド 1・2)。ここに「実は朝河貫一という人がこんなことは 100 年前に言っていた、日本は変われるのかね」というメッセージを出しました。私は朝河さんの専門家ではないけれど、『日本の禍機』を読んでいたので、これはもうぴったりだと思いました。

そのときに国会事故調がまとまったのは本当に宇田さんのおかげで、そのチームで 100 人ぐらいがいろいろな部分に関わっています。最後に報告書を書く際、私は委員長として「はじめに」を書かないといけなかったのですが、すぐに浮かんだのは 3 人の人でした。一人は朝河貫一。日本人でイェール大の教授、海外のそれなりの大学の教授になった最初の人です。

二人目はやはり福島ということで、山川健次郎。彼は白虎隊の生き残りで、14 歳、新潟の方に逃げますが、黒田清輝が認めてくれて官費で米国に留学、しかし、官費だと薩長の連中ばかり。そこでイェール大学に正式に入り、そして卒業した最初の日本人となります。山川は、第 6 代東京帝国大学総長になり、4 年間務め、九州帝国大学に、初代総長として赴きます。その後、また東京帝国大学に戻り 8 年間総長をやりますが、その間、京都帝国大学の総長も兼ねていたという人です。日本の近代の科学の基礎をつくり、人材の育成に注力した人でした。今の武蔵高校の 2 代目の校長先生も務められ、人を育てるのは大事だということを自分の苦労した身から体験している。次世代の育成が一番大事だと実践された方です。

三人目は、スペースシャトルのチャレンジャー大爆発、この大事故の独立検証委員会の一人リチャード・ファインマン、カリフォルニア工科大学（Caltech）の教授です。物理学者でノーベル賞をもらっている人ですが、議会で事故原因の実験も行い、「O リング」のせいだということを証

明します。こういうことをやるときには、政府はいろいろなことを言うけれども、やはり技術的なことではなく、社会に対してしっかり、国民と共有すべく、それは科学的な根拠でなくてはいけない。そうきちんと報告書の最後に書かれています。つまり技術を PR するのは結構だけれど、現実にちゃんと目を向けろと言っている。これも非常に有名な言葉なので、この 3 人のことを考えました。

「はじめに」を書いているうちに 6 ～ 7 ページになり、宇田さんに「長すぎるから 2 ページに」と言われたので、やはり朝河さんにしました。この報告書の最後に、委員の皆さんには 1 ページぐらいメッセージを書いてもらっていますので、ファインマンさんと山川さんの話は、私の最後のところに書いておきました。

私は朝河さんのエキスパートではないけれど、これを書いたことで、いろいろな反応がありました。宇田さんは「私も二本松なんだ」と言われました。安齋さんには「朝河さんを書いてくれてありがとう」とすぐに電話をいただき、後で山内晴子先生とかいろいろな人と会うことにもなったのです。

私が今日、特に言いたいのは、福島の事故が起きてから日本は本当に変わったのだろうかということです。最近の日本は、免震の何とか、神戸製鋼、三菱マテリアルとか、オリンパス以後いろいろな問題がもうボンボン出ている。私のウェブサイトは「Kiyoshi Kurokawa」でグーグルするとすぐ出てきますが、今年の 5 月にペンシルバニア大学ロー・スクールに論文を書いています。読んでみてください。

この論文の前半は福島原発事故の話で、日本は本質的に何も変わっていないという話を書いていますが、後半は最近の日本企業のスキャンダルは同じ背景なのだと。最後のページに、オリンパスからはじまる日本の優良企業（ブルーチップカンパニー）のスキャンダルをリストしてあります。東芝だってあっという間に崩壊してしまったでしょう。その究極が福島の事故だったでしょう。世界中にバレてしまったけど、なぜそうなるのかがよく海外の人には理解できないのです。

一番の問題は、教育です。戦後の教育は、昭和 20 年で大学進学率 3％です。東京オリンピックの 4 年前の 1960 年、日本の大学進学率は 10％です。だけどイギリスなどは 5 ～ 6％です。アメリカは 20％ですが、これは徴兵から帰って来たら若者が公立大学へ行けるからです。UCLA を含むカリフォルニア大学、テキサス大学はみんな公立です。一方、日本を含め経済先進国の大学進学率はここ十数年ずっと 50％を超えています。

だから「キャンパスのレジャーランド化」になってしまったけれども、日本の教育は基本的には偏差値の高い大学に入るための教育、それが幼稚園から大学まで、ばかげていますよ。先日、

自民党でもお話ししましたが、大学に入るときに「文系・理系」と分かれているのは日本ぐらいのものです。例えばアメリカのプリンストン、ハーバード、UC バークレーみたいなトップの大学では、学部はないけれど、最初の 2 年間はリベラルアーツと言われる教育をやります。カリキュラムはあるけれど、どんなものを学ばせるか知っていますか？マイケル・サンデルを見ると分かるように、教材を読んでいないと参加できない、そのことを議論するわけですから。

使われる教材で一番頻度が高いのは何か知っていますか？プラトンです。アリストテレス、さらにマキャヴェッリの『君主論』、それからマルクスの『共産党宣言』、ホッブスの『リヴァイアサン』、トクヴィルの『アメリカのデモクラシー』もトップ 10 に入っています。そういうものを、物理を取ろうが何をしようが 4 年間必ずやらなければならないのです。

この間も東大法学部を卒業して、財務省などに行く人に言いましたが、そういうことを勉強した連中と、あなたたちは勝負ができると思っているのかと。さすがにみんな 10 秒ぐらいシーンとしていました。問題は、そういう教育の違いを旧帝国大学の教授が知りもしないのか、発言もしないところに問題があります。自民党でも言いましたが、そういうことを知らない人たちが今のエリートでは困るじゃないかと。

さらに、こんな質問もします。「三菱 UFJ 銀行に入ったら、三井住友銀行に移れますか？外資系には移ってよいのは、どうしてですか？日立のエンジニアが、パナソニックに移れないのはなぜですか？世界中にそんな国ありますか？」と。皆さん、それが常識だと思っている。

ではこれからどうするのか。もう「教育、教育、教育」しかありません。だけど偏差値を目指した教育なんてナンセンスです。先ほどから言っているように、浜田さんもそうだけど、やはり中学でも高校でも大学でもよい。特に大学は、1 年間海外に出すとか、4 年の授業料で 5 年かけて卒業できるようにするとか。日本ではまだ新卒で雇っているから、肩書がついてしまうけれど、大学のときは個人の資格で海外に行ってほしい。

何が言いたいか分かるでしょうか。実体験ですよ。世界にはこんな貧困があるのか、なぜと思うでしょう。いろいろなことがあるけれど、自分がしたいことに会う確率が増えるはずです。2 番目、個人で行っているので、日本のことが気になり、日本のニュースを見る。すると、日本は何かこれ違うよねということを実態的に感じることができます。やはり自分たちのよいところは誰でも分かりやすいけれど、弱いところを認識するのは難しいのです。テレビでもやっているでしょう、「ジャパン、クールだね」と。ここが弱いよねというのは視聴率が取れないんですよ。だから個人で海外に行くということは、日本が気になるからこそ、実体験から国を思う心が生まれるのです。日本を「相対的」に感じとれるようになる。これが朝河貫一の思ったことです。個人

の資格で行っているからこそ、国のことが気になって、勉強して、いろいろなことを考える、紐付きで留学したとか、ケネディスクールに行っても、こうなると思いますか？

そこが一番大事なのです。みんなほとんどの企業も役所も紐付きで行っているけれど、個人で行かせるほうがよい。大学院でもそうですが、最近は研究力がどんどん落ちています。学生ビザでアメリカで博士号（PhD）を取っている日本人が毎年どのくらいか知っていますか？この 15 年で 300 人から 170 人になりました。台湾は 700 人です。韓国は 1200 人。というようなことで、次の世代の人たちをどんどん外へ出しましょう。必ず健全な愛国心が育まれてくるだろうと思います。

中国を責任ある大国へ導くには　玄葉光一郎

船橋： 黒川さん、ありがとうございました。先ほど田中さんがおっしゃったことで、グローバル化などで中産階級もどんどんできて、史上空前の黄金時代だったが、それが変わったきっかけはリーマンショックではないかということですよね。玄葉さんは民主党政権で外務大臣をなさっていた。リーマンショックのもう少しあとには、尖閣問題が発生してくる。これは民主党政権のときですね。日米関係も、鳩山さんがいきなり米軍基地の「県外移設」を言い出したり、アメリカ抜きの「東アジア共同体」とか言って、緊張してしまった。それを一つの背景として中国の対日姿勢も変わってきた。先ほど田中さんの表現を使うと、覇権主義的になる。高原さんもおっしゃっていたけれども。明らかに変質してきているということですよね。ここに大きな転換点があった。

これを振り返って、玄葉さんに伺いたいのですが、まずそのような、先ほどの Rosenbluth さんの表現を使うと、「平和のもろさ」というものをどのようにお感じになって、そういうものに対して新たな対応をしないといけないと当時お考えになったのか。そのへんを教えていただけますか。

玄葉： 経験も含めて、そういう話をするようにということですね。明らかに今の日本の、もっと言えば、世界全体の最大の外交課題は、中国という国を責任ある大国にすることだと思います。中国はもともとご承知のとおり、「韜光養晦」といって、能ある鷹は爪を隠すということで、じっと力を蓄えてきました。それが、私たちの領海である尖閣に入ってきたのは確か 2008 年、あの頃から力を剥き出しにし始め、私はちょうどそのことと向き合わなければなり

ませんでした。

ではどう向き合うのかといえば、力も必要だけれど、力だけでも駄目だと思います。４～５日前の話ですが、ハガティさんという東京にいるアメリカ大使と、1 時間ぐらい話をする機会があって、アメリカの外交政策の説明がありました。中国とロシアは、力の外交を進めているから、私たちも力で外交をすると話していました。私がそのときに言ったのは、力は大事だと。力は大事だが、やはり先ほど法の支配の話が出ましたけれど、中国には法の支配という話は聞いてもらえないかもしれないけれど、まずアメリカが言わないと駄目だと。アメリカが法の支配を言わずしてどこが言うのだと、ハガティさんに伝えたんです。

同じ力の外交を進めている中国やロシアと、アメリカが同レベルになってしまうのではまったく駄目なのです。先ほど民主主義なのか、むしろ中国のようなモデルなのかという、結構深い話も実はあるけれど、法の支配であるとか、WTO のような自由貿易の話であるとか、民主主義であるとか、人間の尊厳であるとか、そういった問題はやはり日本がアメリカをエンカレッジしながら進めていくべきです。

トランプさんのことを好きだという人は、私はあまりいないと思いますが、見方を変えれば、みんながどこかでうそをついているものを白日のもとに曝しているみたいなところもあります。最近ギボンの『ローマ帝国衰亡史』も読んでいるのですが、なんだかんだ言って、現実を踏まえれば、歴史上最初に地球社会全体を構想したのは、やはりアメリカなのですよ。ローマ帝国は地球社会全体ではないですし、大英帝国も地域覇権です。現在の最強国はなんだかんだ言ってまだアメリカです。だから、そことの関係をもっと上手にやらないといけないのは確かで、その意味において米国にしっかり注文をつけることが大事ではないかと考えます。

中国は、先ほど阿川先生がおっしゃっていましたが、おそらく法の支配ということを聞く気がないだろうと。ただ自分の経験でいうと、法の支配について国際社会全体の世論を盛り上げていくと、中国という国は意外と世の評判を気にします。だから、アメリカが言わないなら、日本がアメリカを説き伏せてでもそういう問題についてきちんと説き、国際社会全体で向き合うべきだと思います。日独フォーラムでは、ドイツのブルフさんという前大統領も参加され、共にプレゼンテーションを行いました。まさに日本もドイツも協力してアメリカを説き伏せるぐらいのことをしながら、中国を慫慂するというか取り込んでいく、よい意味で関与していくことが非常に大事な局面だという議論になりました。

朝河の生きていた時代と今は、結構似ているのではないかという感じがします。1910 年代と似ていると思う方は多いのではないでしょうか。今日は歴史を研究されている方が多いですが、そ

れはやはり 1910 年代に車とか、電気、あるいはエネルギーとかが出てきて便利になって、グローバリゼーションが進み、そのあと反動が来るわけです。リーマンショックも含めて、今、同じことがある意味起きていると思います。

私も若い人たちとできるだけ触れ合うようにしているのですが、若い人たちは意外と強いリーダーを望んでいます。だからプーチンとか習近平とかが意外と好きなんです。あるいはトランプのことだって意外と好きなんですよ、若い人は。そういうことも含めてどう考えるのかは、朝河の生きた時代と似ているから、非常に今回のテーマは時宜を得たテーマではないかと考えています。

今後のアメリカの動きをどう見つめるか　田中明彦

船橋：　玄葉さん、ありがとうございました。

田中さんに伺います。朝河貫一の時代、日露戦争後の日本の中のアメリカ観というものは、アメリカは拝金主義、膨張主義、民情の不統一であったが、それに対して、いや、アメリカはもう少しダイナミックで反省力もあると話されました。しかし、今のアメリカを見ると、まさに拝金主義で、膨張主義で、民情の不統一そのものではないでしょうか。

例えばウォール街でリーマンショック後、1% vs 99%が出てくる。日本は不良債権問題で金融危機になったあと、日本長期信用銀行の大野木頭取などは牢屋にぶち込まれてしまった。結局無罪で。しかし年金はなくなるわ、それから副頭取の方が自殺されるとか、何人もの方が社会的制裁も法的な裁きも受けました。ところがウォール街はゼロですよね。ですから、この間ニューヨーク・タイムズが 10 年の特集をしたときに、アメリカのリーマンショックで牢屋にぶち込まれたウォール街の幹部の数、そのページは完全にブランクにしているんですよね。

今のシリコンバレーもそうだと思います。winner-take-all（勝者がすべてを取る）とか。拝金主義がいきすぎているのではないかと。それが不安定化（destabilize）になる。膨張主義も、トランプみたいに通商法 232 条とか振りかざして、日米同盟なのに安全保障条項でもって、鉄鋼にも関税をかけるとか。いずれここに自動車も入れるかもしれない。こういうようなルール無視になっている。加えて、民情の不統一というのはアメリカの政治を見ていると、これほどまでにも極分化してしまったのかと感じます。

問題の一つとして指摘されているのがアイデンティティ・ポリティクスですね。例えばメルティング・ポット（人種のるつぼ）という言葉はポリティカリー・インコレクト（政治的に不適切）

だから使ってはいけないとか。そういうアメリカと今、玄葉さんもおっしゃっているように、アメリカをうまく説いて、日米でもう一回やるってどうやるのだろうか。安倍さんはトランプとやっている。枝野さんはサンダースとやっている。真ん中のアメリカとは誰がやるのか、そもそも真ん中のアメリカは誰なのかと思いますよね。

田中：　これは難問であります。このあとで阿川さんがきっと訂正してくださると思いますが、40％ぐらいのアメリカ国民がトランプ大統領を支持しているので、私はトランプさん登場の背景にはそれなりの構造的理由があると考えます。先ほど言った、象のカーブですね。これが現実だと思います。ただ、その 40％の支持で出てきた非常に特異な大統領は、いったい何ができるのか。おっしゃったことは私どもが通常考える範囲からすると非常識というか、問題外、カウンター・プロダクティブ（非生産的）、そういうものばかりです。

その中で、言ってきたことには非常に変なことがありますが、東アジアの安全保障の面でいえば、実際にいまアメリカがやっていること自体はそんなに非常識なことをやっているわけではない。たぶん通商政策が一番非常識に見えます。つまり同盟国も何もみんな一緒にして関税をかけると最初に言ってしまうのは非常識なのですが、最近の傾向をみると新しい NAFTA、それからヨーロッパとの合意等をみると、自由貿易主義からみると望ましい動きではないけれども、そんなに破滅的な決着をしているわけではない。

日米交渉ももうすぐ始まると思いますが、これはマルチラテラリズム（多国間協調主義）という面からみれば望ましいことではないけれども、元から日米自由貿易協定をやろうという考え方がなかったわけではない。私の観測では、最終的にはそれほど破滅的なものができるわけではないと思うのです。なぜそのようなことになっているかというと、結局のところ、アメリカの政治体制というものが、いかにめちゃくちゃなツイートをやろうとも、言っていることを全部実行できるシステムではないからです。

この間ニューヨーク・タイムズにアノニマス（匿名）のコラムというものが出ました。不思議なコラムですが、あの中にサイレント・レジスタンス（沈黙の抵抗）というものが政権内にあると指摘されていました。大統領がやろうと思っていても、アメリカの国益に照らして望ましくないものは今のホワイトハウスにいる人たちですら、みんなサボタージュしてできないようにしていると。どのぐらい信憑性があるのかはよく分からないですが、トランプさんのような特異な人でも、いきなりアメリカで独裁者になって、現実に何でもできるというわけではない。そう考えると、ジェームス・マディソンがつくった憲法は、少なくともティラニー（専制政治）を防ぐという意

味ではよくできた憲法であると考えます。

つまりマディソンがいう、賢明でない指導者が出てきてもティラニーにならないような憲法をつくったわけです。今まさにティラニーになることを、アメリカのさまざまなシステムがいろいろなところでサボタージュしたり、機能不全に陥ったり、変なことになりつつ、デモクラシーを守っているということではないかと思っております。

最近のトーマス・フリードマンさんの新しい本などによると、アメリカのコミュニティはまだ相当健全で、いろいろなプロダクティブなことをやっています。やや楽観的かもしれませんが、何とかアメリカの、40%でない、60%の人たちが次の中間選挙と大統領選挙でよい結果をもたらしてくれるのではないかと期待しております。

本質を見分け、理解できる日本人となるには　黒川　清

船橋：　ありがとうございます。ホープフル・リアリズムですかね。まあホープレス（希望のない）・リアリズムよりましですよね（笑）。

次に黒川さんに伺いたいのですが、朝河貫一は朝鮮半島と満州、日露戦争後のこの日本の既得権益は一応認める立場であった。私が朝河貫一に非常に関心を持ったのは、石橋湛山の本を書いたとき朝河の主張が湛山の論考とすごく似ているなあと思ったこともあります。湛山は、朝河と同じく日露戦争から第二次世界大戦までの間で一番活躍しましたが、満州などあんなもの要らない、捨ててしまえと言い切った。朝河貫一はこれを二大原則―機会均等、門戸開放―とか、それから国際法で捉えていました。そういう文明の中で、ほかの国にもフレンドリーな形で開放すればいいではないかという考え方ですよね。しかし実際はそうならなかった。

先ほど Rosenbluth さんも、朝河貫一の見方の中には一つの死角というか、問題点もあったと指摘されています。それは日本の統治とガバナンスの問題点――軍隊に対する文民統制も含めて――を十分に読みきれなかったということではないかと。つまりいくらビジョンを描いても、戦略というものは統治を超えられない。それで先ほどおっしゃった国会の事故調ですが、まさに黒川さんがおっしゃったように、これは行きつくところ日本の文化に問題があるのでしょうか？

黒川：　そうですね。

船橋：　つまりガバナンスの問題だとおっしゃっていましたが、今はどうでしょう。2011 年からまだ 10 年は経っていないけれども、日本がこれから世界の中で、ルール・メーカーにはならないのかもしれないけれど、ルール・シェーパーとなる。アメリカが当面こういう撤退モードにあるときに、ヨーロッパとかインドとかいろいろ like-minded な国々と協調していこうじゃないか。アメリカはいずれ反省力で戻ってくれるだろうと。こういうこれからの作戦計画ですよね。だけど統治という観点から、日本にどこまでできるのでしょうか？

黒川：　それはグッドクエスチョンですね。今、私はニューズ・ピックスでプロ・ピッカーを９月からやっています。毎日何か書かないといけない。もっぱら私は、科学技術とか医療とかイノベーションの話を書くはずなのだけども、ピックしているのはほとんど組織統治、ガバナンスに対して、言いたいことがたくさんあるから、日本の企業の話にどうしてもなってしまうんです。

福島の事故が起きてから、もう７年半ですよ。何か変わったのか、世界はどう見ているのか。日本がいろいろな政策をやると、フクシマ事故はみんな知っていますから、海外から原子力関係者なども、私のところにメールで聞いてくることがある。「この日本のエネルギー政策は本気なの？」、「そんなこと言って大丈夫？」とか、いろいろと質問してくる。この間の北海道、地震になると、また一気にブラックアウトでしょう。

福島の大事故から一番やらなければいけないことはグリッドをつくること、それさえもやれない。なぜかというと、役所が政策をつくる、政治家もつくるけれど、みんな今までの年功序列、だから本当のことは下では言えないとか、まあ忖度男ですよね。政治家の二世三世は 150 人以上いるし、しかも地元でしょう。そうすると地元誘導になる。なかなか変れない。

そこをまたメディアが言わない。メディアの人には、発信しろ、どんどん本を書けと言っている。だって取材したものなんて新聞に出るのはごく一部。船橋さんみたいにどんどん書けよと。国会事故調が「憲政史上初」などということは、日本の三権分立が機能していないということなんだと、私は言っているわけです。

最高裁が、なぜ一票の格差が 2.4 だったら「違憲状態」というのか、「違憲」といえばよいのになぜ言えないの？誰に遠慮しているの？そういうところに一番問題があるし、朝河さんのときもそうだけど、小村寿太郎とか。やはり中学、高校、大学学部生など、若い時に外に行って混ざっていること、これはすごく大事なのです。上下がなく横でどんどん広がっていけますからね。

あの大事故から７年半経っているのだから、そういう関係をもっともっとつくらないと、本当

に言っているばかりでは変われませんよ。だから私は若い人をどんどん外に行かせようと発言しています。そういう雰囲気は出ているけれど、ぜひやらないと。議論がいつもテクニカルのレベルになってしまっているんです。

◆ フロアとのディスカッション

船橋：　ここからは、フロアとのディスカッションに入りたいと思います。浜田先生は、教育についてどう考えられていますか？

浜田：　これから人口が少なくなることをみんな心配していますが、あまり教育されていない人がどんどん出てくれば食いぶちが減るわけですから、結局はよくない。私が最も懸念するのは、AI に淘汰されるようなことを一生懸命、小学校から大学まで教えていることです。私はそういう読み書きそろばんの優れた教育を受けた受益者であるから言いにくいですが、これからはそれだけではよくないと考えます。

そういう意味で、これはハーシュマンなどが言っていることだと思いますが、exit と voice ができる、しかもスムーズにできるような人。ただ反対するだけではなくて、組織にものが言える人間が必要で、そういうものが日本社会を変えていけるのではないかという感じがします。東大の海外留学から帰ってきた人などと少し話すと、自分の専門だと立て板に水のように意見が出てくるけれど、今の世界情勢は何かと聞いたら何も意見がないですね。そのへんはすごく心配だと思います。

もう一つは学長先生のおっしゃったこと、やはり今の政治は非常に心配な面があります。トランプの政治ぶりを見て強く感じます。また、私は半ば音楽のことでハンガリーに呼んでもらいましたが、そこでも労働移民が増えてきた時、かつてナチスが行ったような対応を唱えるような人が受け入れられていました。ヨーロッパ、ドイツでもそうです。アメリカでも、虐げられた人たちの力というものは無視できません。

だから何かやらなければいけない。教育なり、不平等を直すという形で解決していく。これはジョセフ・スティグリッツやジェフリー・サックスが言うことです。ともかくグローバリゼーションで貿易をもっとやればよくなるのだというのがありますが、法律と政治ということに関する玄葉先生のお話とともに、大変考えさせられることの多いセッションだったと思います。

船橋：　浜田先生、ありがとうございました。ほかにご質問、どうぞ。

宇田：　先ほど黒川先生からご紹介がありました、二本松出身の宇田です。国会事故調を一緒にやらせていただきました。国会事故調の報告書はご覧になった方もいると思いますが、あれは三権分立という話です。国会が国会として独立調査をやった、その結果として、これこれに責任ありということを書いてあります。

今、あの３人が司法の場でいろいろと裁かれていますが、これは司法の場の話です。国会は国会で一つの結論を出したということであり、何かが起きたのかというと、基本的には何も起きていません。国民の側も、これで国会がこういうことを議論したのだから、こうしたらよいのではないかということではない、これが現状だと思います。皆さんもほとんどもう関心が薄れているでしょう。

今日は、皆さんも非常にためになったし、よいタイミングだったと思います。朝河貫一さんが今いたら何を言うか、実際に自分が朝河貫一だったらどうするか、が問われているのではないかという感じがします。しかも、朝河貫一さんは外にいて、海外から日本を見て話をしていた。でも、当時はたぶん日本の中に多くのアカデミズムの人たちもいたし、ジャーナリストもいたけれども、異論も何も言えなかった人たちは山ほどいたはずです。

ですから、今のわれわれへの問いは、もちろん中国をどうしよう、アメリカをどうしようということも問題ですが、今この中で自分が朝河貫一であったとしたら何ができるかということを考えろというテーマではないかと。こんなふうに私は受け取りました。

船橋：　ありがとうございました。他にもいらっしゃいますか？ 佐藤大使、どうぞ。

佐藤：　お三方は、中国とどういう関わりを日本として持っていくべきかについて、いろいろな方が意見を持っておられます。一つ中国の体制は、われわれとはまったく違うイデオロギーの世界の体制でありますが、少なくとも政府という形で見ると、10 年間の政権です。国家元首、党の総裁は１期５年です。これまでの歴史を見る限りだいたい２期やっています。ということは 10 年同じ人が政権を担う。そういう中国とどのように向き合うかを考えないと、総論として中国とどう向き合うかはなかなか答えが出てこないと思います。私は 1995 年から 1998 年まで中国で政府の代表を務めさせていただきましたが、日本として考えなければならないのは、少なくとも外交問題については可能な限り超党派で意見をまとめ上げていくこと。一つの政権が一つの外交を

やっても、それは日本の外交と中国は見ないわけです。そこに隙ができる。隙を敢然とついてくる。こういうことだと思います。

今見てみると、中国はあたかも自由経済の国のように保護主義反対、開放政策と言っているわけです。彼らは明らかに戦術的にそう言っている。つまり敵側に隙があると見ているから、そういう政策を取るわけです。日本との関係でも同じようなことが言えると思います。

これからは、政治の体制としての仕組み、体制としての政治の在り方、あるいは国会の在り方について、もう少し超党派で外交をやる仕組みを検討していただきたいと思います。国会は、条約をつくり、法律をつくるという大きなお仕事を持っているわけですが、政策論の基礎になる超党派の間の話し合いというものを、表向きにやる議論もあれば秘密会でやる議論もあると思います。でも日本はあまりにもなさすぎるように感じます。

日本の国益を考えた場合、外交政策の国益はどこにあるかということをもう少し仕組みとして日本の政治が態勢を整えるということで、体外的に強い力を発揮することができる。そういう方向をぜひご検討いただきたいと思いますし、それぞれのご意見を伺いたいと思います。

船橋： 佐藤大使、ありがとうございました。習近平さんは 2035 年までやるのではないかという説もあるようですけれどもね。安倍さんも第 3 期、第 4 期政権までやってないと間に合わないかもしれない（笑）。玄葉さん、今の質問へのご意見をお願いします。

玄葉： 特に反論はないのですが、中国と大変だったときに、外務省の飯倉公館で、当時、例えば加藤紘一先生とか、超党派でそれぞれに役割を果たしてもらいたい方々に集まって頂いて対策を話し合った経緯はあります。ただ、かつてのような日中の個人的なパイプができているかというと、必ずしもできているようには思えないので、耳の痛い話だなとは思います。

蛇足ですが、私は安積艮斎という江戸時代末期の学者の話をしましたが、艮斎が『洋外紀略』で中国をどう言っているか。支那人の中華思想は自らを尊び威張りすぎている、諸国を見下す、と江戸時代の安積艮斎は言っています。それに対し朝河貫一は、歴史上の協同命脈があるから大事にしたいという感覚です。両方ともたぶん正しいのではないかと思います。いろいろな意味で朝河からは学ぶところがあって、歴史をよく勉強した上で、あるいは国民性とか民族性とか、そういうことも踏まえて政策決定者も最終的な判断をしなければいけないのではないかと思います。

それともう一つ、せっかくご指名いただいたので。黒川先生、田中先生、浜田先生を見ていると、

政府に平気で歯に衣着せず直言されているでしょう。私らから見ていても、それはすごく気持ちがよいし、すごく大事なことです。朝河貫一はまさにそうだったのではないですか。

朝河貫一は結局、学問のための学問に終らせなかった。たぶん安積艮斎の影響を受けていると思うけれど、実際の世の中に役立つ学問をやろうと。しかも行動もする。まさに勇気ある行動も含めてやると。だから俗に言う忖度とはまったく別次元の学者だったと思います。先ほど、自分が朝河だったら今の時代にどうするかという話がありましたが、あまり遠慮しないでものを言っていくことではないかと思います。

船橋：　佐藤大使の質問は、もう少し外交を超党派にするために与党、野党はそれぞれ何をすればよいのかですよね。

玄葉：　うーん。やっていないことはないのですよ。今だって、私ドイツから帰ってきたと言いましたが、ドイツには私と自民党からは、以前は小坂さんだったけれど、今は城内さんという元外務副大臣が行かれている。彼はもともとドイツ語だったので、一緒に行っている。そういうことは韓国との関係でも、中国との関係でも、アメリカとの関係でも、イギリスとの関係でもやっています。ゴールデンウィークも外務大臣経験者、防衛大臣経験者が超党派でアメリカに、日経新聞の協力で行っています。

だからそれぞれやってはいるのですが、たぶん佐藤大使の話は、とにかく今までやっていたレベルとは今度は違ってくるぞと。きっと中国の持つ意味があまりにも大きくなってきたので、それに対応する態勢を、どういう仕組みでつくれるのかということではないかと思います。

船橋：　ありがとうございました。それでは時間になりましたので、このセッションを終えたいと思います。朝河貫一の『日本の禍機』は、日露戦争後の世界の地政学の激変から天皇陛下に直接親書を届けようとする最後のそのような試みまで、まさにセンス・オブ・クライシスとセンス・オブ・アージェンシーにあふれています。この感覚をこの「禍機」という言葉で表したのだと思います。それだけの危機感、緊迫感。しかもその危機がよそから降ってくるのではなくて、日本そのものから生まれてきてしまっている、そういう意味合いを感じます。

時間があればもっともっと詰めたい朝河貫一の思想、その現代的意義はまだまだあると思います。先ほど加藤大使もおっしゃっていましたが、アメリカの反省力というか力の中にユーモアというものがあると朝河貫一は言っています。これを朝河貫一は、大事のユーモアと言っているの

ですね。日本もないわけではないのだ、しかし日本は小事のウィットだと。これ、上手いなと思います。戦術面だけでなく戦略面での「ゆとり」をどう築いていくかという課題でしょうか。お三方に改めて感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

◆資　料

はじめに

福島原子力発電所事故は終わっていない。

これは世界の原子力の歴史に残る大事故であり、科学技術先進国の一つである日本で起きたことに世界中の人々は驚愕した。世界が注目する中、日本政府と東京電力の事故対応の模様は、日本が抱えている根本的な問題を露呈することとなった。

福島第一原子力発電所は、日本で商業運転を始めた 3 番目の原子力発電所である。日本の原子力の民間利用は、1950 年代から検討が始まり、1970 年代のオイルショックを契機に、政界、官界、財界が一体となった国策として推進された。

原子力は、人類が獲得した最も強力で圧倒的なエネルギーであるだけではなく、巨大で複雑なシステムであり、その扱いは極めて高い専門性、運転と管理の能力が求められる。先進各国は、スリーマイル島原発事故やチェルノブイリ原発事故などといった多くの事故と経験から学んできた。世界の原子力に関わる規制当局は、あらゆる事故や災害から国民と環境を守るという基本姿勢を持ち、事業者は設備と運転の安全性の向上を実現すべく持続的な進化を続けてきた。

日本でも、大小さまざまな原子力発電所の事故があった。多くの場合、対応は不透明であり組織的な隠ぺいも行われた。日本政府は、電力会社 10 社の頂点にある東京電力とともに、原子力は安全であり、日本では事故など起こらないとして原子力を推進してきた。

そして、日本の原発は、いわば無防備のまま、3.11 の日を迎えることとなった。

想定できたはずの事故がなぜ起こったのか。その根本的な原因は、日本が高度経済成長を遂げたころにまで遡る。政界、官界、財界が一体となり、国策として共通の目標に向かって進む中、複雑に絡まった『規制の虜（Regulatory Capture）』が生まれた。そこには、ほぼ 50 年にわたる一党支配と、新卒一括採用、年功序列、終身雇用といった官と財の際立った組織構造と、それを当然と考える日本人の「思いこみ（マインドセット）」があった。経済成長に伴い、「自信」は次第に「おごり、慢心」に変わり始めた。入社や入省年次で上り詰める「単線路線のエリート」たちにとって、前例を踏襲すること、組織の利益を守ることは、重要な使命となった。この使命は、国民の命を守ることよりも優先され、世界の安全に対する動向を知りながらも、それらに目を向けず安全対策は先送りされた。

3.11 の日、広範囲に及ぶ巨大地震、津波という自然災害と、それによって引き起こされた原子力災害への対応は、極めて困難なものだったことは疑いもない。しかも、この 50 年で初めてとなる歴史的な政権交代からわずか 18 か月の新政権下でこの事故を迎えた。当時の政府、規制当局、そして事業者は、原子力のシビアアクシデント（過酷事故）における心の準備や、各自の地位に伴う責任の重さへの理解、そして、

スライド 1

それを果たす覚悟はあったのか。「想定外」「確認していない」などというばかりで危機管理能力を問われ、日本のみならず、世界に大きな影響を与えるような被害の拡大を招いた。この事故が「人災」であることは明らかで、歴代及び当時の政府、規制当局、そして事業者である東京電力による、人々の命と社会を守るという責任感の欠如があった。

この大事故から９か月、国民の代表である国会（立法府）の下に、憲政史上初めて、政府からも事業者からも独立したこの調査委員会が、衆参両院において全会一致で議決され、誕生した。

今回の事故原因の調査は、過去の規制や事業者との構造といった問題の根幹に触れずには核心にたどりつけない。私たちは、委員会の活動のキーワードを「国民」「未来」「世界」とした。そして、委員会の使命を、「国民による、国民のための事故調査」「過ちから学ぶ未来に向けた提言」「世界の中の日本という視点（日本の世界への責任）」とした。限られた条件の中、６か月の調査活動を行った総括がこの報告書である。

100 年ほど前に、ある警告が福島が生んだ偉人、朝河貫一によってなされていた。朝河は、日露戦争に勝利した後の日本国家のありように警鐘を鳴らす書『日本の禍機』を著し、日露戦争以後に「変われなかった」日本が進んで行くであろう道を、正確に予測していた。

「変われなかった」ことで、起きてしまった今回の大事故に、日本は今後どう対応し、どう変わっていくのか。これを、世界は厳しく注視している。この経験を私たちは無駄にしてはならない。国民の生活を守れなかった政府をはじめ、原子力関係諸機関、社会構造や日本人の「思いこみ（マインドセット）」を抜本的に改革し、この国の信頼を立て直す機会は今しかない。この報告書が、日本のこれからの在り方について私たち自身を検証し、変わり始める第一歩となることを期待している。

最後に、被災された福島の皆さま、特に将来を担う子どもたちの生活が一日でも早く落ち着かれることを心から祈りたい。また、日本が経験したこの大事故に手を差し伸べてくださった世界中の方々、私たち委員会の調査に協力、支援をしてくださった方々、初めての国会の事故調査委員会誕生に力を注がれた立法府の方々、そして、昼夜を問わず我々を支えてくださった事務局の方々に深い感謝の意を表したい。

東京電力福島原子力発電所事故調査委員会（国会事故調）
委員長　黒川 清

スライド 2

当日配付資料（「二本松市市勢要覧」24 ページ 2018 年 12 月発行 [原稿]）

朝河貫一、今に生きる百年を超える憂国の警告

政策研究大学院大学名誉教授
黒川　清 氏

Profile/医学博士。1969~84年在米、UCLA内科教授、東京大学内科教授、東海大学医学部長、日本学術会議会長、内閣特別顧問、東京電力福島原子力発電所事故調査委員会委員長などを歴任。現在は、政策研究大学院大学・東京大学名誉教授、日本医療政策機構代表理事を務める。
www.kiyoshikurokawa.com

世界の歴史に残る、100 年に一度の規模の地震、さらに 1000 年に一度の大津波が東北三県の沿岸を襲った東日本大震災、そして東京電力の福島第一原発の大事故。この大災害については数多くの調査、検証が国内外で行われた。なかでも原子力エネルギーの世界史に残る福島原発事故は、これからも数十年、いや世紀を超えて放射能と汚染水、環境、健康、またデブリ処理※1、安全対策など世界の注目だ。日本には 50 基を、世界全体で 400 基を超える原子力発電所のすべてに寿命があり、使用済み燃料の処理、貯蔵は世界的な課題である。福島のような事故はまたどこかで起こるか分からない。世界の注目が福島に集まるのは当然で、事故の教訓を世界と共有する姿勢が大事だ。

この大事故に対し「国権の最高機関」の国会は、事故後 9 カ月を経て「憲政史上初めて」となる「独立調査委員会」を発足させ、私が委員長の命を受け、歴史的調査が始まった。国内外の注目のなか委員会・記者会見は全て公開、英語の同時通訳付き、ネットでも公開、報告書は 2012 年 7 月 5 日に国会に提出され、今でも記録は「国会事故調ホームページ」※2 に日英語で公開されている。

調査が進むにつれ、事故の根幹には日本の政産官学メディアを巻き込んだ、近代民主国家にあるまじき「エリートの犯罪」「政府の失敗」ともいうべき「規制の虜」状態があることが明らかになった。

委員長として報告書のまとめに集中する一方で、家族、生活、人生を失ってしまった多くの人たちに対して、そして福島の人たち、日本国民、世界の人たちへ、委員会委員、100 名余のスタッフは、何を思い、考え、その精神をどう伝えるか、これは委員会では相談できない、私だけの責任だと認識していた。

頭に浮かんだのが朝河貫一先生（1873-1948）だ。二本松市の出身で、英辞書に学び、英語を修め、ダートマス大卒、イエール大博士、日本人初のイエール大教授となった偉人だ。彼の唯一の日本語著書「日本の禍機」での日本のエリート達への「心からの愛国の忠告」が、福島原発事故で見えた今の日本のエリートの大きな過ちに対する私たちの思いそのままだったことに深い感慨を抱いた。驚いたことに国会事故調の調査統括をお願いした宇田左近さんも二本松藩士のお家柄、また報告書が報道されるとすぐに電話をいただいた現セブン銀行特別顧問安斎隆さんも二本松市出身だったのだ。

安斎さんのお世話で国会事故調査と朝河貫一をテーマとした報告会を、二本松市で 2013 年 8 月 28 日開催※3、二本松市民会館にバスを連ね、予想を超える多くの方にお越しいただいた。1,200 席ある大きなホールは満杯、急遽別室をしつらえテレビで中継もした。宇田さんが国会事故調査委員会の報告、私は、朝河貫一博士が 100 年以上前に日本へ警鐘を鳴らしていた思いと、私の思いが同じであることを紹介した。翌日は市庁舎、大隣寺（旧二本松藩主丹羽家菩提寺）、朝河博士ゆかりの地などを訪ねた。

二本松市は朝河博士の学んだダートマス大とイエール大に、中学生を毎年、短期視察研修に派遣している、とてもうれしい。このような若者が、どんな思いを持ち、自分の道を進むのか、とても楽しみなのだ。

今年の春、二本松市長よりご招待いただき、お花見を第 18 代藩主の丹羽ご夫妻、そして二本松市名誉市民橋本堅太郎さん（二本松城前にある二本松落城に命を落とした二本松少年隊の群像の作者）ご夫妻とご一緒する機会※4 を、また、最近は二本松未来戦略会議に参加する機会をいただいている。

明治 150 年が話題となっている今年ではあるが、東北では痛ましい戊辰戦争の記憶があり、維新後の東北人の舐めた辛酸の歴史を知る人がまだ多くいることを忘れるわけにはいかない。開国からまだ 150 年、つらい記憶はそんなに容易には消えないことは歴史の教えることころだ。

―旧二本松藩戒石銘―

丹羽氏・二本松藩十万七百石の大いなる遺産は、五代藩主高寛公が儒臣・岩井田昨非の進言により、藩士の〝戒め〟を目的に藩庁門前の自然石に刻ませた〝戒石銘碑〟である。

【意味】「お前（武士）の俸給は、人民達があぶらして働いたたまものである。お前は人民に感謝し、いたわらねばならない。この気持ちを忘れて、弱い人達を虐げたりすると、きっと天罰があろうぞ。」

※1　デブリ処理：原子炉の事故で炉心が過熱し、溶融した核燃料や被覆管および原子炉構造物などが冷え固まったもの。
※2　参照：国会事故調 HP <http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3856371/naiic.go.jp/en/>
※3　参照：黒川清氏ブログ <https：//bit.ly/2O4ddck>
※4　参照：黒川清氏 Facebook<https：//bit.ly/2zqcmKB>

スライド 3

第二部
新しい太平洋時代――次世代に繋ぐ希望

司会者：	**渡部恒雄**	笹川平和財団上席研究員
ディスカッサント：	**阿川尚之**	同志社大学特別客員教授、慶應義塾大学名誉教授
	瀬口清之	キヤノングローバル戦略研究所研究主幹
	秋田浩之	日本経済新聞社編集局コメンテーター

――― 最後のパネルディスカッションは、新しい世代、若い世代に繋ぐということで考えていきたいと思います。テーマは「新しい太平洋時代――次世代に繋ぐ希望」です。

司会の渡部恒雄さんは、皆さんもおそらくテレビなどで何度もご覧になったことがあると思います。福島は会津のご出身であることを日常的にもおっしゃっています。渡部さんもアメリカにいかれ、ワシントンで長らくシンクタンクで活躍されていましたが、やはり日本のことを憂いてでしょうか、日本にお戻りになり、今は笹川平和財団の上席研究員として日米、中国、そして世界のことを分析していらっしゃいます。

続いてディスカッサントの阿川尚之先生です。現在、同志社大学の特別客員教授ですが、長らく慶應義塾大学にいらして、同大学名誉教授でもあります。著書の『アメリカが見つかりましたか』の中で朝河貫一先生のことを書いていらっしゃいます。

次は、瀬口清之キヤノングローバル戦略研究所研究主幹です。中国経済、日米中関係についての研究が専門でいらっしゃいます。

最後が秋田浩之日本経済新聞社編集局コメンテーターです。北京支局、ワシントン支局を経験された後、ハーバード大学で日米中関係を研究されました。

それぞれ日米中に造詣の深い先生方に、お話を伺いたいと思います。よろしくお願いいたします。

渡部： ご紹介いただきました渡部恒雄です。ワタナベツネオと言っても皆さんが知っているあの方とはちょっと違います（笑）。この朝河貫一のシンポジウムのお話を安齋さんからいただいたとき、即決で「参加します」とお返事しました。私のライフワークですから。でも、ライフワークにされている方が何人もおられまして、このディスカッサントの中にも一人おられます。私が、ワシントンのシンクタンクの CSIS（戦略国際問題研究所）というところにいるときに、阿川さんは日本大使館で公使をされていて、「渡部さん、今度イェール大学で朝河貫一という人の記念ガーデンをつくる計画があるので、福島とつないでよ」と依頼されたのですが、覚えていますか？

阿川： 全然。

渡部：　その後、加藤大使から「渡部さん、お願いします」と仰せつかって、これはやらざるを得ないなと。でも、福島とどうつなぐかと考えてピンと来たのが、その前から存じ上げていた矢吹先生でした。先生にお話を持っていけば大丈夫だろうと思ったら、案の定、朝河貫一博士顕彰協会に繋いでくださって、今日も会場にいらっしゃっている古川会長や糠澤事務局長に繋いでいただいたというご縁でございます。

アメリカの外交、それから日本をどう見るかということについて、今日もいろいろな議論がありましたが、朝河貫一から学ぶことがそのテーマと直接関わる話であるということに、その後気がつきました。すぐには気が付かないのですが、朝河貫一の功績からは様々な学びがあります。今日のディスカッサントの方にも、これまでのセッションから、それぞれに関心を持っていただけたのではないでしょうか。

まず、阿川さんからお話をきかせてください。

日本に帰らなかった朝河先生　阿川尚之

阿川：　阿川でございます。長いセミナーで午後１時に始まってもう５時45分。ずっといらっしゃる方は朝河貫一に深い興味がおありになるか、よほど暇かのどちらかだと（笑）。最後の方は頭が朦朧としてきて、私も何を話したらよいかよく分からないまま、ここへ上がりました。

「新しい太平洋時代――次世代に繋ぐ希望」（資料スライド１）なんていう題を最後にくっつけているところを考えると、題材に困ったに違いない。私も、太平洋時代と次世代とどう関係するのかよく分からないのですけども。だいたい次世代と書いてあると、つまり「ごめんなさい、僕たち、みんな老人です」と言っているようなものであります。

でも、今日は早稲田の学生さんを中心に若い方も大勢いらっしゃっていますから、やはり次世代なんだと思います。先ほどから加藤大使、黒川さんから教育の話がずいぶん出ていますけど、次世代の方々は自分たちのことですから、特によく考えていただきたい。

ところで私が大学で若い学生さんたちに最初に言うのは、教師の言うことをそのまま信じては

いけないということです。今日のこのセミナーも、実は講師やパネリストが一種忖度しているところがある。何かというと、朝河先生は偉いということですよね。それに逆らうと村八分になるかもしれない（笑）。けれども、若い世代には、朝河先生は本当に偉いのか、どこが偉いのかを、先入見なしに考えてほしいということです。朝河先生が偉いと最初から決めてかかって話を聴くのは間違いだと思うのです。

私は、朝河先生はやはり偉いと思います。ただ、正直に言って、そんなに大きな影響を与えたかというと、そうではなかった。今は朝河先生が本当に日本にいて良かった、あるいは日本人で良かったと思いますけれど、当時はそれほど大きな影響はなかった。それは、先ほどから黒川先生や加藤大使がおっしゃっていることとどこかで関係がある。ガバナンスの問題にも関係がある。

先ほど司会の植木さんからご紹介いただいた『アメリカが見つかりましたか』という本で、幕末から現在までアメリカに渡った日本人のことを書いたことがあります。これ（資料スライド 2）は何かと言うと、彼らがいつアメリカへ渡ったかということをまとめたものなのですね。別に昔、慶應にいたから慶應の人を出す訳ではないのですが、例えば福沢諭吉という人物がいまして、この人は、最初はサンフランシスコに 1 カ月ぐらい。2 回目もたぶん西海岸と東海岸合わせて 3 カ月か 4 カ月しか行っていないのだけど、アメリカのことを非常によく理解して、それを当時の日本人に伝えたという先覚者です。その前にはジョン・万次郎がいますけども、この人も自分の体験をもとにアメリカのことを日本へ具体的に詳しく伝えた人です。

新島襄というのは、同志社大学の創立者。同志社は現在の私の雇用者ですので、ここで出さない訳にはいきません。給料がかかっていますからね（笑）。新島襄は幕末に渡米しました。それが維新後、アメリカ視察旅行中の当時の文部大臣田中不二麿に認められて、出国の禁を犯しているのだけれど許されて帰ってきて、同志社をつくりました。他にもこの年代には、例えば津田梅子などいろいろな人がいますけども、アメリカへ行くということが日本へ帰ってきてすぐに役に立ち、重用された年代の人たちです。

ところが新渡戸稲造から松岡洋右、朝河貫一となるにしたがって、いつ行っていつ帰ってくるかということが、日本でどれだけ影響力を及ぼせたかにかかわってきます。どういうことかというと、私の大嫌いな松岡洋右は、だいたい朝河先生とほぼ同じ時期に渡米しているのですけど、1902 年に帰ってきて外務省に入るのです。英語ができたからだという説がありますけども。この人は後年、

外務大臣として日本に大きなダメージを与えたと思います。私の親しい何人かの政治学者の中には、松岡だけは靖国神社に祀ってほしくないと言っている人が結構います。あまりいろいろ言うと波紋を呼んで、今日無事に帰れないかもしれないので、この辺にしておきます。

新渡戸もまた比較的早く帰国して、大いに活躍し偉くなります。国際文化会館では新渡戸国際塾というのをやっておられるので言いにくいのですけど、結構俗なところがある人で、実は朝河先生はあまり新渡戸稲造のことをお好きではなかったようです。

ところが、朝河先生は 2 回帰国していますけれども、ずっとアメリカにいたために日本ではあまり知られることがなく、影響を与えられなかった。しかも日露戦争後、日本人のアメリカ観が次第に変化して、朝河先生の主張を聞かなくなる。幕末から 1904 年ぐらいまではアメリカから帰って来れば官民で用いられ活躍できたのですけど、その後はどうもそうでなくなった。面白いことに、それ以降私がこの本で取り上げた人は文士ばかりです。アメリカというのは変わった国で、日本人を差別するし、やがて日本からの移民を締め出すし、あまり学ぶべき点はない。ただ、その混沌とした社会や文化はストーリーになる。有島武郎、永井荷風、谷譲次と、アメリカについて面白いことを言っていますけども、アメリカ留学が公の世界で役に立つ時代ではなくなります。

なぜ朝河先生は日本へ帰らなかったのか、帰れなかったのかというと、次の資料（資料スライド 3）をご覧ください。実はアメリカで大学院へ進学をしようと最初は考えていなかったのですが、有名なダートマス大学学長のタッカー先生に「大学院に残ったら」と勧められてイェールの大学院に進むことになる。そこでアメリカ人の女性と恋に落ち幸せな結婚をするので帰る理由がなくなってしまった。これは自分の選択で帰らなかったのですが、ミリアム夫人が病で亡くなった後、やはり帰りたくなるのですね。恩人の大隈重信が組閣したときに、「自分を使ってほしい」と手紙を書いたのだけれど、起用されなかった。あのときに大隈内閣で働けていれば、あんな対華二十一カ条のような乱暴なことはやらなかったのではないかと思うのですけれど。

また早稲田大学に何回も就職させてくれと頼むのですが、早稲田大学さん、ごめんなさい、結局いい返事がこなく、帰国できない。早稲田大学に行きたかった理由は、一つには日本在住の別の女性と恋をして、結婚してくれるのなら自分が日本に行ってもよいと言ってプロポーズしたのですが、就職も再婚も実現しませんでした。

先ほど日本人最初のイェール大学教授という話がありましたが、イェールではおおむね不遇でした。出世に時間がかかり、1936 年にはとうとう「自分を教授にしないのは人種差別のせい？」とやんわり脅しをかけて、1937 年にようやく教授になっています。すぐ名誉教授になってしまいますけれど。彼が教授になった頃には日米関係が悪化の一途をたどり、ついには真珠湾奇襲攻撃

が起きてしまいます。

ある意味、朝河さんは世渡りがうまくなかったと思います。私はそういうところも含めて朝河先生が大好きですね。戦争が終わって先生が亡くなった後で『日本の禍機』というのは大変な本だということに初めて皆が気づきます。私は『日本の禍機』を読んで以来、朝河先生の大ファンなのですが、これは何を意味しているのか。

日本人は朝河先生の言葉を聞かずに、アメリカを軽視してしまった（資料スライド 4)。先ほどお話がありましたけれども、日露戦争後の日本人は「自分たちが正しい、日本は凄い」ということを信じ過ぎ、「アメリカは大したことがない」となってしまう。朝河を軽視したとは思いませんけど、朝河のことは戦前の日本人のレーダースクリーンには入ってなくて、大隈内閣も外務省も朝河を呼ばなかったし、早稲田も呼ばなかった。これは本当にもったいないことだったと思います。

日本は戦争でアメリカに徹底的にやられ、戦後になり改めてアメリカから学ぶのですが、ニクソンショック、湾岸戦争などがあると、やはりだんだんアメリカに対する反発が強まる、アメリカは大したことがないのではと見てしまう。アメリカは民情が分裂しているし、拝金主義だと、明治以来ずっと同じことを言っているわけです。アメリカを軽視するなという朝河先生の言葉は、今でも当てはまるのだと思います。

トランプのアメリカについてはいろいろ議論があると思いますし、私もトランプを好きにはなれません。しかし、トランプのアメリカを過小評価してはいけないのです。そのためにも、次世代の方にはぜひ『日本の禍機』を読んでいただきたいと思っています。

渡部：　ありがとうございました。今の話で一つ、私も「おっ」と思ったのは、アメリカでそれなりの仕事をやって日本で就職するのって、帰国のタイミング次第では結構大変ですよね。たぶん阿川さんも同じ経験をしているから。私も実はそうでした。

これは何かというと、私は福島県出身、しかも二本松藩の隣の会津です。これは戊辰戦争を一緒に戦っているから大変な仲間であります。会場にも二本松の方がおられますけど、だいたい無条件で仲間になれる、別に長州が共通の敵だと言っているわけではないですよ（笑)。当時、野口英世という医学者が、会津からアメリカに同時期に渡った。朝河貫一と現地で会って意気投合した。野口英世という人はお母さんをすごく大事にしていました。そのシカさんというお母さんから、会津のお菓子の名前にもなっている有名な「来てくたされ」という手紙が届きます。この手紙を読み、心配して帰国するのですが、その頃ロックフェラー研究所でかなりの業績を上げていたので、これは日本で就職できるかなと思って就職活動をするわけです。ところが、実際は就職できなかった。「日

本の帝大の医学部も出てない人間をうちの教授にはできない」という感じだったようです。結局、彼は帰ることができずに、ガーナでの黄熱病の研究の最中に自身も感染して客死します。

私も長くいたのですけど、帰ってくるときに、そんなものだと思っているからあまり気にしてはいませんでしたが、外国での業績は、場合によっては日本の就職にはあまり役立ちません。これは今も変わりませんね。では、なぜ日本は変わらないのか。先ほどの「忖度する構造」も変わらない。その理由は、本当だったら機能体としてワークしなくてはならない組織が、共同体みたいに村みたいになってしまったためです。村の外の人には違うスタンダードが適用され、村の行動規範を持たない人物は入れない。日本のアカデミズムにも多少そういうことはあるのではないかというのが、今の話だと思います。

アメリカに代わり、次代の世界をリードするものとは　瀬口清之

渡部：　次は瀬口さんです。私は、実は田原総一朗さんの「激論！クロスファイア」という番組に、時々、ペアで瀬口さんと出演しております。中国担当が瀬口さんで、私がアメリカ担当です。私はアメリカを愛していますけど、瀬口さんも中国を愛していますね。ではよろしくお願いします。

瀬口：　私は、中国も愛していますけども、アメリカも愛していますし、何より日本を一番愛しています。皆さんのお話を伺っていると、朝河貫一を直接研究していらっしゃったり、ご縁があったりという方が多いのですね。私は直接的な研究をしたことはないのですけど、間接的には非常に深いご縁があります。

一つは、私が大学のとき浜田ゼミだったことです。浜田先生が 50 歳の頃にゼミ生でした。浜田先生は東大の金融の正教授だったのですが、「銀行だけは行くな」というのがゼミ員、もしくは経済学部員に対する厳しい要求だったのです。銀行に行くと、能力を使ってもらえずにどんどん年を取ってしまう。だから銀行だけは行くなと。私はゼミの幹事でもあったので、ゼミの幹事が先生の言葉を守らないわけにはいかないと銀行には一切就職活動をしなかったのですが、「ゼミ員皆で行くのだから幹事のお前もついて来い」と言われ、日銀の面接だけ一緒にくっついていったのです。

私は就職する気はまったくなかったのですが、そこで安齋隆さんという人に会ってしまった。安

齋さんは、今日も縁の下の力持ちで頑張っていらっしゃいます。そのときも、日銀というのはいつも５年以上先にならないと結果が出ないような仕事をするところだが、結果が出るころには別の仕事に取り組んでいる。だから以前の仕事でいい結果が出ても目前の仕事で結果が出ているわけではないので万歳ができない。つまり、ずっと縁の下の力持ちで働かなければいけないつまらない仕事だ。しかし、「これを誰かがやらなきゃいけないだろう。瀬口君、一緒にやろうか」と言われて、ぐっと手を握られたのです。このたった１度の安齋さんとの運命的な出会いが原因で日銀に入ることにしました。それで浜田先生のところに行き「すみません、先生から銀行には行くなと言われていたにもかかわらず、日銀に行くことになったのですけど・・・」と言ったところ、浜田先生が「日銀は銀行ではないからいいよ」とおっしゃって頂き、ほっとしたことを覚えています。そんなご縁でここに座っております。

浜田先生が今日最初にお話になったとき、日本に帰ってくると人の扱いがすごく丁寧で、車椅子に乗っているときにも日本の良さを感じるとおっしゃいましたが、最近私はあることに気がついたのです。世界の中で、西洋の思想を本当に深く理解し、西洋の政治社会、経済制度を社会の中に本当に長期に亘ってきちんと定着させていながら、仁義礼智信のような東洋の思想も社会の中できちんと生き残らせている。いわば西洋と東洋の融合をきちんと実現しているのは世界の中で日本だけだと思います。

中国はもともと中国古典を生んでいるのですけども、中国では必ずしも仁義礼智信が日本ほどには実践されていませんし、そもそも政治体制が違います。韓国は仁義礼智信を実践しているのですが、日本ほど長い間西洋の制度を政治経済社会制度の面においてきちんと定着させているとは言えません。世界の中で日本は非常に特異な存在であると感じます。その特異な存在の日本が、世界の中でどういう役割を果たしていけるのかを、本日皆さんのお話を伺いながらずっと考えてきました。現在､明らかにアメリカの影響力が低下してきているのは事実です。第二次世界大戦直後、アメリカの GDP は全世界の半分以上あったわけですが、今は 24％。おそらく 10 年後ぐらいには 20％程度にまで低下するでしょう。その間、中国経済が失速しなければ、たぶん中国は米国と似たようなレベルに達するだろうと思います。

では、中国の時代が来るかということですが、今日は時間がないのであまり詳しくお話はできませんけど、あと 10 年すると中国も高度成長の時代は終わって、緩やかな安定成長期に入っていくと思います。安定成長期に入る頃には先進国になります。先進国で長期の経済停滞に陥ったことがない国はどこにもなく、中国も必ず長期の経済停滞を経験します。長期の経済停滞に陥ったときに一党独裁というのは制度的に政権交代ができないため政治的に不安定化しやすいわけです。

これが経済、政治、社会にいろいろな悪影響を及ぼすことになるはずです。そういう国だと思って中国と付き合わなければなりません。そうすると、世界はどちらに行くのだろうとなるわけですが、日本はアメリカにも頼れないし、中国にも頼れない。ちゃんと自立をしていかなくてはいけないのです。日本の悪い癖は朝河貫一の時代から変わっていないなと思いながらお話を伺っていたのですが、世界をちゃんと見ようとしないのです。日本の国内から見ている視点で世界を理解しようとし、本当の世界を見に行かない。だから間違った判断をする。

例えば、戦前のアメリカでも中国でもちゃんと見ていれば、こういう結果にはならなかった。でも当時もそれをやっていなかったし、今もやっていない。最近で言うと、アジアインフラ投資銀行（AIIB）という中国がつくった銀行がありますが、あれに世界中の多くの国々が加入したときに、日本政府関係者はどの国がどのような理由で入ることを決めたのか、事前に誰も分かっていないのですね。気がついてみたら主要国の中で日本とアメリカだけが残っていた。これもやはり分かっていない一つの事例だと思いました。

やはり、日本がこれからアメリカからも自立し中国からも自立してきちんと判断するには、インテリジェンスの機能を高めて、世界で何が起きているかということを常に自分の目できちんと把握するという視点が必要なのではないでしょうか。

本日、高原先生が、自分は福島県人ならばよかったけれども、残念ながら岡山県人だとおっしゃっていましたが、岡山に一人、私が尊敬する山田方谷（ほうこく）という人がいました。この人が『理財論』という文章を書いていますが、この中で日本の在り方、もしくは世界の在り方を示していると思われる表現があります。それは「綱紀を整え、政令を明らかにするは義なり」。「綱紀を整え」というのは人心を正しくすること。「政令を明らかにする」というのは政策をきちんと運営する、もしくは企業の経営がいい業績を達成すること。そういうものを支えるのは「義」だと言っているのです。では、「義」とは何か。シンプルに言うと、「義」とは他者のために自己の最善を尽くすことです。つまり世界の中で日本の「義」とは、世界のために最善を尽くすことを軸として行動できるか、ということだと理解しております。

今日は「次世代へ」ということなので、そういう「義」というものを考え、日本として世界に対して何ができるかということをみんなで考えなくてはいけない。ただ机の上で考えていても何も分からないので、私自身が現在取り組んでいる素っ頓狂なチャレンジを、最後に皆さんにご紹介したいと思います。

実は、最近のアメリカの長期的な停滞を考えると、アメリカが戦後 70 年以上に亘って世界秩序形成をリードしてきた役割をどこかの国が代わりに担っていく存在として登場してこなくてはいけ

ないわけです。しかし、EU は BREXIT で混乱していますし、中国は政治体制が違う上に取り組むべき深刻な国内問題をたくさん抱えていて、米国が果たしてきた役割の一部を担うことが難しい。

日本はというと、戦後ずっとアメリカに追従することが多く、世界に対して自らの理念や構想を示し、世界をリードするという経験がまったく不足しているため、急にやれと言われてもたぶんアメリカの代わりは務まりません。ロシアは日本の 3 分の 1 の経済規模しかありませんので難しいでしょう。そう考えると、世界経済に占めるウェイトが 50%から 20%まで落ちていくアメリカの代わりに、世界の秩序形成に貢献する役割をきちんと担っていける存在が世界中なかなか見つからない。では、どうしたらいいのだろうと考えたのです。

ある食品安全のプロジェクトに関わって気がついたのですが、食品安全の分野では民間組織がデファクトスタンダード（事実上の標準）をつくって、世界中の国がそれに従っています。これを見たときに、これはほかの分野でも使えるのではないかと考えました。例えば気候変動、サイバー攻撃、移民難民の問題、女性の人権問題など個別分野の問題に関して、信頼できる民間有識者が集まって世界共通の目標を立てれば、どこの国も従うようなデファクトスタンダードがつくれるのではないかと考えはじめました。

もう一つ思いついたのは、今は国際的枠組みの運営においてルールベースという考え方が尊重されますが、東洋思想的な発想としてルールベースではない秩序形成の方式があるということです。それはメンバーの間で目標を共有し、その目標達成のために自発的努力を継続するというやり方です。ただ、それだけですと努力をしなくても制裁が科されないため、モラルハザードになり、ガバナンスは効かなくなります。そこで、お互いの自発的行動の成果として、年間ベースで何をやったのかを互いにオープンにしてそれを共有し、評価し合えば、一定のガバナンスが働く。それはグローバルコミュニティーのメンバー同士のピアプレッシャーによりコントロールができるガバナンスの方法です。

幸いなことに AI も、IT 技術も発展していきます。こういう新しい現代の技術と東洋思想と西洋が築いてきた基盤をみんな合わせて、世界の新しい秩序形成を、非政府組織、つまり Non-State Actors の主導で何かできるのではないかと考えています。そんなプロジェクトを、実は来年から東京でスタートしようと思っています。こういう向こう見ずなチャレンジに挑む人間もおりますので、若い人たちもめげずにぜひ頑張ってください。

渡部：　ありがとうございました。この東洋思想的なものと新しい試みというのは、凄く大事だと思います。ただ、いつも難しいのは、国際規範を守らないときの言い訳としての思想となって

しまう可能性があることです。でも、そこはわれわれも学んできていますから、今こそ東洋と西洋のバランスをとり、実践する時期にきていると思います。

米中関係を DNA から考える　秋田浩之

渡部：　次の秋田さんの話の前に、秋田さんの紹介を自分との関係でさせてください。この人も面白い人で、英語も中国語も両方できる方です。ワシントン、ハーバード、そして北京でも仕事をされていますが、秋田さんは基本的に人間好きなんですよ。

例えばワシントンにいる頃、共通のアメリカ人の中国研究者の友人がおりました。その頃、彼は付き合っていたガールフレンドとの結婚に煮え切らなかった。そのガールフレンドが彼と絶対に結婚したいと、猛烈アタックのために私と秋田さんたちを連れてカラオケに行くわけです。彼女は台湾の方で中国語がうまいので、秋田さんもうまい中国語でデュエットしたりして、本命の彼を焦らしたりした。その晩が決定打になって、両者はめでたく結婚するのですが、その彼が後にアメリカの駐ミャンマー大使になるのですから、やはり人間関係って面白いですよね。

その秋田さんに、「日米中のトライアングルの中で日本はどう生きていくか」をお聞きしたいと思います。

秋田：　私のプレゼンが完結してしまったみたいな感じの紹介、ありがとうございます（笑）。私は入社 30 年目ですから、この年になりますと、会社で面接試験も担当します。面接する側にいると、とても気持ちがよいのですが、こうして壇上にいると面接を受ける彼らの気持ちがよく分かります。

集団面接にあっているようなものですね。さらに私は、残念ながら福島県出身でもなく、浜田先生のゼミ生でもないので肩身が狭い。ただ、私がワシントンの特派員になるとき、当時は外務審議官だった加藤さんに、「全部は読めないので 1 冊だけこれは読めという本を何か紹介してください」とお願いしたら、朝河さんの本を紹介していただきました。それ以来 5 回ぐらい読んでおります。

このセッションは、聞くところによると、一番若めのセッションだということなのですが、53 歳の私が一番若いと（笑）。それで、若い人たちへのメッセージをということですが、一言で

言えば、米中が長い対立の時代に入っていくということだと思うのです。よかれ悪しかれ。そうした中で、たぶん皆さんは半生を過ごされると思います。記者を 30 年やっていますけども、北京時代は 1994 年から 1997 年で、まさに佐藤大使がいらっしゃったときに北京にいて、そのときの記憶はとにかくなぜアメリカと中国はこんなに仲がいいのだというものでした。

例えば、外交部の記者会見で、アメリカが、当時はクリントン政権ですが、中国の人権批判をします。クリストファー国務長官とか、クリントンが来ても、必ず人権問題を言うのですね。私が中国側に、そう言われてどうかと聞くと、当時の中国は、「私たちも民主主義や人権が大事とは分かっている。ただ、まだ私たちは貧しいから欧米みたいにはできない。中国式の民主化なのだが、それをやるには時間がかかるのだ」と。だから、いずれやるのだということで、なんだかモデルを崇拝しているような感じでした。

さらにクリントン政権は、1996 年に台湾海峡危機で台湾海峡を挟み軍事衝突一歩手前まで行き、険悪になったことがあります。それでもアメリカはやはり中国に関与しようとして、1998 年にはクリントン大統領が史上最長の 10 日間の訪中をしました。そのときに中国が、日本の上空をパスして日本に寄らないでくれと言うものだから、それを真に受けて中国に行って、ジャパンパッシングと呼ばれました。

何を言いたいかといいますと、米中がなぜこんなに仲がいいのだろうか。もとをたどれば、1971 年のニクソンショック以来、米中はいろいろと政権が変わるたびに最初の 12 カ月から 18 カ月は選挙戦のときに、アメリカ大統領候補は中国を叩きます。それでぎくしゃくはするけれども、だいたい 12 カ月から 18 カ月以内には必ず振り子のように折り合っていくという歴史が続いてきたと思うのです。

私がいたときもそうでしたし、クリントン政権もバグダッドの独裁者から北京の独裁者までをぶっ倒すと言って当選した。ところが、日本の上空をパスして、1998 年には中国と握手する。さらにブッシュ政権は、それでは駄目だと、中国を戦略的競争国と呼んで登場しましたが、ブッシュ大統領も中国との関係は非常に複雑であるという表現を使って、結果的には北朝鮮問題や様々な問題で米中接近していったというように思うのです。

でも、これからは、この米中の接近という振り子はもう終わったと考えています。終わったのは、トランプとは関係なく、オバマ政権のときに終わったのだと思います。オバマ政権は、もう中国が大きくなってしまったので、初めて中国と折り合おうと動いた。それまでの政権は中国を叩いて、それで 12 カ月ぐらいで手打ちするのですが、オバマ政権は最初から中国と折り合おうとした。過去のように、はじめは敵対的にやるのは時間の無駄であるとやってみたら、南シナ海問題、サイバー

とか、いろいろな問題があって、どうもうまくいかない。それでオバマ政権の後期は、対立に拍車がかかっていったのです。

今トランプ政権がやっている、例えばアメリカからの投資規制、そして 301 条に基づく 2,000 億ドルぐらいの制裁関税。これはトランプがやっているのではなくて、オバマ政権時代からもう伏線があったのだと思います。サイバー問題もそうですし、アメリカの投資規制というのも既にオバマ政権のときから始まっていました。ただ、トランプが拍車をかけているだけで、そのため大きなトレンドが起きているのだと思います。それは中国がアメリカ並みに大きくなり、2049 年までにアメリカに追いつき追い越すということを、実際に去年の共産党大会で公言したわけです。2035 年までに中国は、経済面ではアメリカを追い越すぐらいになるという目標を掲げました。ですから、このトレンドはずっと続いていくと考えています。

私が若い人たちへのメッセージとして思うのは、皆さんは今、お付き合いしている人もいるでしょうし、既に結婚している人もいるかもしれませんが、これから結婚相手を見つけていくでしょう。そのときにこの人とやっていけるか、この人とどう付き合ったらよいのか、そもそもこの人と結婚するかどうか、考えることがあるでしょう。もしくは就職でもいいです。どのように判断するか、ということなのです。

ふつうは、まずはこの人は学生時代に何をやっていたか、もしくはどういうところで生まれて、どのように育ったのかというような､過去をさかのぼって将来を判断しますね。会社でもそうです。日経新聞社に入るかどうかというときに、今の日経新聞社を見ても分かりません。いつ頃できて、どういう道を歩んできて、どこから来たのかが分かって初めてどこに行こうとしているかが分かるわけですね。ということは、これから中国がこうなる、アメリカがこうなるということをいろいろな新聞や本が書いたりすると思いますし、われわれメディアも書きます。でも、一番大事なのは、どこから来たのか、どこに行こうとしているのかというナレーティブというか、一言でいってしまえば歴史でしょうけれども、それをよく踏まえた分析であるかどうかが大切です。これは自戒を込めて言っているのですが、それをよく見るということが、自分自身が歴史を勉強するということだと思うのです。

そうは言っても、それだけではあまりにもありきたりなので、究極の歴史というのは何かというと、私が思うのは DNA です。遺伝子と言いますかね。私の子どもも、昔は回転寿司に行くと、トロ、中トロとか脂っこいものを食べたがったのですが、この前行ったら、いきなり「ひかりものください」とか言っているわけですよ。最近になって急に。なぜかと思ったら、私が実はひかりものが結構好きで、本当かどうか分かりませんけど、たぶん DNA が少し出てきたのかなと思っ

ています。皆さんも胸に手を当てると、親父に似てきたとか、母に似てきたと思うことがあるのではないでしょうか。

国家というものも生き物だとすれば、DNA はあるのではないかと思います。逆にいえば、相手の行動は、DNA さえ押さえていればある程度は分かるものなのです。そうすると、アメリカの DNA というのは何か。一言でいえば、西に出て行きたがることでしょう。ヨーロッパからプリマスというところ、ボストンの郊外に行って、そこから西に進んでインディアンを征服して、西海岸に行って終わりだと思ったら、さらにはハワイに行ってハワイを併合し、そしてフィリピンまで併合した。ペリーの黒船もひょっとしてそういう形で出てきたのかもしれません。

一回は南北戦争とか内戦もあり引っ込みましたが、再び DNA が発揮されて、西側に出てきたら、そこに今でいう南シナ海、東シナ海、さらには中国大陸まで勢力圏を広げている国があり戦争になったのが、日米戦争です。ジャーナリスティックに言うと、そういうことではないかと思います。

そして今アメリカは、これまで冷戦中は仲間だと思っていた中国が大きくなっていることに気がついた。一帯一路という名のもとに、どうやら自分が戦争に勝って秩序を築いたアジア太平洋で、ひょっとすると地中海も超えて欧州にまで、中国が勢力圏を伸ばしている。こうなるとアメリカの DNA がいたく刺激されてしまうわけです。

一方、中国の DNA というのは、万里の長城を見れば分かると思います。万里の長城は、今、見えているのは明の時代の長城ですが、実はずっと前から王朝が変わってもつくり続けているのです。王朝間で引き継ぎ事項があるわけありません。「俺は万里の長城をここまでつくったから、後はお前がつくれよ」とはやらないですよね。だって、王朝は倒して、倒しての攻防ですから。それでもつくるということは、あれが DNA なのです。

それは何かといえば、どんどん出ていって勢力圏を囲い込みたくなるというもの。私は別に批判しているのではありません。DNA は批判の対象ではなくて、ゼネリックというか、変わらないものなので。そうすると、中国の DNA とアメリカの DNA がいま衝突している中で、こういうことが起きているのは、トランプとかそういう一過性のものではないと思うのです。

最後になりますが、皆さんはこれからそういう時代を生きていくということで、本当は日本がどうするべきかまでお話ししようと思ったのですが、時間をオーバーしておりますので、後ほどセッションで時間があれば触れたいと思います。

◆ ディスカッサントへ、次の質問テーマ

渡部：　ありがとうございます。ちょうどDNAの話が出たので、ヘンリー・キッシンジャーがたぶんDNAと言ったのか遺伝子と言ったのか忘れましたけど、アメリカ外交の遺伝子は二つあると述べています。これはヘンリー・キッシンジャーの『外交』という分厚い本で書いていたと思うのですが、一つは勢力均衡によるリアリズムで、もう一つは理想主義、つまりリベラリズム。この二つがあると言っています。その一つの例として挙げていたのは、リアリズム外交の開祖にして典型例がセオドア・ルーズベルトです。これがリアリズムの遺伝子です。その後任の大統領が、ウッドロー・ウィルソンで、彼がリベラリズム、理念型の典型例だとしています。

これはもちろん今、国際関係学を勉強すれば、だれでも一度は学ぶ理論なのですが、朝河貫一の『日本の禍機』にその概念が昔の言葉できちんと書かれていたので驚きました。セオドア・ルーズベルト大統領というのは、日露戦争の講和を仲介した大統領です。そのときに朝河貫一は、先ほどのパネルでも出た日本とロシアの衝突における日本の正統性を、アメリカと国際世論に著書で訴えた人ですので、講和を斡旋したルーズベルト大統領には感謝をしています。しかし、朝河はルーズベルトの政策に、リアリズムの遺伝子を観察し、日本に警鐘しているのです。朝河は、ルーズベルト大統領は日本の満州での動きを念頭に帝国主義的な海軍力拡大をしていると指摘し、日本との衝突は望んではいないが、アメリカが東アジアに影響力を持つパワーになっている以上、満州問題は避けるわけにはいかないし、米国内の要求がある以上、日本の移民拒絶も避けられないと分析しています。そして、ルーズベルトを正義派（今でいえばリベラリスト）と国利派（今でいえばリアリスト）のどちらに属するかを限定することは意味がないと指摘しているのです。

今の日本も、次世代も、アメリカと中国の間で生きていくしかありません。これは歴史的経緯もありますし、地政学的にも日本が中国の隣から引っ越すことはできません。どう考えたらいいのかというとき、朝河のようにリベラリズムとリアリズムの二つの要素を、冷静に考える必要があるだろうと思います。これは今回のシンポジウムでの私の隠れたテーマだったのですが、話が出たのでもう言ってしまいます。

ディスカッサントの皆さんにお聞きします。阿川さんには、アメリカ外交の遺伝子というか、そういうものを日本はどう理解して、どのように付き合うべきかということ。瀬口さんには、同様

に中国の遺伝子をどう見て付き合うべきかということ。最後に秋田さんには、日本は米中を睨んで、どう動いたらいいのでしょうか？

憲法から読み取るアメリカの健全な DNA　阿川尚之

阿川：　秋田さんのお話を、いろいろまったくだなと思いながら伺っていました。先ほど船橋さんが、「今のアメリカは、民情が分裂している。拝金主義だ。利益にばかり走っている。それから膨張主義だ」とお話しされました。膨張主義のところは、トランプはよく分からないですね。もしかしたらトランプの危険は、膨張しないことかもしれない。世界中でアメリカがやたらに出てくるのは嫌われるのですが、まったく出てこないアメリカも困る。中東なんかに全然出ていかないアメリカというのは、イスラエルなどはビビってしまいますよね。

そういうところはちょっと置いておいて、アメリカの民情というか、国民の意見が対立しているのが問題だというご発言は、日本的な発想だと思います。実は対立している方がよいという考え方がアメリカの DNA にあるのでしょう。私はアメリカ憲法の歴史が専門なのですが、アメリカという国は常に人々がけんかをしています。けんかをしているけれど、殴り合うところまではあまり行かない。トランプさんに刺激されて、時々暴力が出てくるのは少し怖いのですが、本当に怖いアメリカというのは、意見が一つになったときではないかと思っています。

実は憲法をつくったときに、すでにそういう話が出ています。マディソンの話を先ほど田中先生からありがたくも振っていただいて、阿川はなんて言うかとおっしゃったので、ちょっと補足します。『ザ・フェデラリスト』という憲法制定を擁護する文書の中で、マディソンはアメリカの指導者に将来変なのが出てくるかもしれないと述べている。実際、歴史上、既に問題の多い指導者はたびたび出てきているのですよ。ニクソンなどはかなり危なかった。ニクソンとトランプとどちらが危ないかというと、ニクソンの方が危ないのではないかと思うようなところがあります。ジャクソンもけっこう危なかった。あの人は優れた指導者であると同時に、インディアンが大嫌いで、全部殺せと言わんばかりの感じさえありました。

こうした問題のある人物が出てきて大統領になり大きな権力を持ったら、どうしたらいいか。『ザ・フェデラリスト』の中でマディソンは、立派な指導者を選べばよいというのは、解決にならないと述べています。政治指導者がすべて立派で徳のある人とは限らないから、むしろ権力を分散して一人の人間に与えないことが重要である。そして政府の「各部門を運営する者に、他部門よりの侵害に対して抵抗するのに必要な憲法上の手段と、個人的な動機を与える」のが、権力の濫用に対す

る最大の保障である、「野望には、野望をもって対抗させ」るべきだと言っています。自分の利益を最大限に発揮して、「あいつだけは嫌いだ」ということをとことんやれるように、憲法上の権力、権限を与えろと言っているわけです。議会と大統領、大統領と州、議会の民主党と共和党が対立し、お互いを牽制しあっている限りは人民の自由は保たれると、マディソンは考えたのです。

もちろん私はこれがすべてではないと思います。なぜかというと、先ほど Rosenbluth さんとお話ししたのですが、議会と大統領の対立が激しすぎると、政府が全然動かなくなってしまうという問題があります。しかしそれでも、トランプさんが激しいことを言うのに対して、民主党の私の友だちはみなトランプさんが本当に心から嫌いで、なんとかしようと思っているし、発言も行動も起こす。これがアメリカの健全さのもとではないかと思っています。

渡部：　ありがとうございます。『ザ・フェデラリスト』の話ですが、確かにマディソンはご指摘通り、アメリカ人の対立し、戦う DNA に基づいて憲法を作ったと言えますね。逆に言えば、そのチェックアンドバランスの発想で日本の憲法を設定したのは少し違ったのではないかという疑問もあります。

もう一つ、追加質問ですが、結局その対立の DNA はアメリカ国内ではバランスが取れますが、ほかの国と、特に中国のようにほぼ対等に渡り合う相手とはどのようになるのでしょうか？日米中の異なる DNA をどう考えたらよいのでしょうか？

阿川：　それは非常に難しい問題ですね。ただ日本についてその問題を考えると、日本人は「君もいい人、私もいい人」という前提で交渉に臨むことが多く、最終的にはなんとか話がまとまるだろう、まとまるはずだという希望的観測をしがちです。ところが相手はとんでもないことを言ってくるわけですね。外務省で経済問題をやっていらっしゃった方の多くがアメリカを嫌いになるのは、交渉にロイヤーが出てきて、このぐらいで提案してくると思うと、その 10 倍ぐらいでふっかけてくる。経産省、外務省でその経験のある人は、それでアメリカがあまり好きではなくなるようです。

トランプさんはもともと不動産屋ですが、不動産屋は特にふっかけてくるわけです。しかしどこかで合意しないと商売にならないので、どこかでは落とす。でも相手もふっかけてくるから、さらにこちらもふっかける。日本人は法外にふっかけられただけで感情が傷ついてしまうわけですが、負けずに対抗する元気がないといけない。ただ、それがすべてだと誤解すると、松岡洋右になってしまうので、ご注意を。

先ほどいろいろな方がおっしゃっていた国際感覚というのは、DNA では勝負できないところを

どのように普遍的に説明して、向こうのロジックでやるかです。私は、こっちのロジックだけでやってはいけないと思っています。アメリカは大嫌いでもなんでもいいのですけど、アメリカのロジックが使えるようにしてアメリカとやるし、イギリスとはイギリスのロジックでやれるようにする。これはとても難しいことですけど、まず相手の話を聞くことです。「自分の話をするな。相手の話をして、相手が一番気にしていることをまず聴くようにしろ」。私は、これを加藤大使から学びました。

昔、歴史家に木村尚三郎さんという人がいまして、各国の人にどのように最初に対応をするかという話を聞いてうまいなと思った記憶があります。スペインの人に会ったらまず「あなたたちは地球上に残った最後の貴族ですね」と言えと。中国の人に会ったら「私たちが石器でイノシシを追いかけているときに、皆さんは論語を読んでいたのですね」と言えとか、そういう上手さですね。日本人はすぐ感情的になる傾向があり、アメリカ人は相手も自分と同じように振る舞うと思い込む悪い傾向がある。そこらへんはやはりリベラルアーツを勉強して、普遍的なテクニックを学ぶことが大事なのではないかと思います。

国ではなく、リーダーとなる個人の貢献で世界の秩序を　瀬口清之

渡部：　ありがとうございます。意外にDNA的にはアメリカと中国の方が近いのかもしれませんね。このあたりも含めて瀬口さん、お願いします。

瀬口：　中国のDNAとは何か。私には、素晴らしい中国の友人がいます。中国は、東洋思想の起源を持っている国であるだけに、彼らは自らきちんと立派な人格を持って、仁義礼智信を実践しています。これは孔子、老子が紀元前770年から220年ぐらいまでの間に一生懸命議論をしてきたものです。それにも関わらず、その後の中国の歴史の中で社会全体がそれを実践して、きちんと秩序を保った社会ができたということはほとんどありません。立派な人物はいるけれども、社会は混沌としながら動いている。これが私の考える中国のDNAであり、変えられないイメージです。

その一方で、政府の政策としてずっとやってきたことは何かと言うと、おそらく孫子の「戦わずして勝つ」という考えです。実は、中国という国は、戦争が弱いのですね。戦争をやると、多くの中国の兵士は買収されて逃げてしまう。万里の長城は敵から守るためにつくられているのですが、一回もワークしたことがないのです。敵が来るとわいろをもらって門を開けてしまうので、どんどん入れる。今、初めて観光資源としてワークしていますけど、防衛手段としてはワークし

たことはありませんでした。

そう考えると、中国という国は、戦うということがあまり得意ではなくて、相手国と協調しつつ中国に対する尊重を認めさせる、というところをうまく相手とやっていくというのが中国の特徴なのかなと思うのです。ところが、先ほど阿川さんがご説明になったアメリカと中国の関係において、渡部さんは割とうまくハーモナイズするのではないかということですが、おそらく両国は未体験ゾーンに入っているのではないかと私は考えています。

人類の歴史が始まってからは、ある地域を自分のテリトリーとして守るということが続いています。ウエストファリア条約以降はネーションステートの存在が前提の時代に入り、少なくとも外交と軍事と通貨政策は主権国家の専管事項として国が決める時代が続いていました。しかし、1990年代以降、グローバル化が急速に進む中で、国家の枠組みがだんだん希薄になってきています。

私などは経済をやっているのでより強く感じるのですが、今、日本の企業が投資を考えるときに、中国と韓国と ASEAN をあまり区別していません。一番有利なものをどこでつくってどこで売るかは製品別に判断します。日本、中国、韓国、ASEAN の間で、作る場所と売る場所が複雑に絡み合う関係になって、一つのマーケットになっている。こんな風に、だんだんと国境が低くなってきているのは、アメリカが主導したグローバル化の結果として生じた新しい世界だと思います。その中で国の持つ意味も変わってきていて、従来国家間の協調や台頭ということを考えていた国際関係の枠組み自体が変質してきているのではないでしょうか。それが今起きているグローバル化ということの新しい意味なのではないかと思っています。

このグローバル化がもたらす新たな枠組みの中で、何をなすべきかを考えるのは、組織ではなく個人としてのリーダーでしょう。国家の枠組みでは解決できなかった問題、例えば、気候変動、食品安全、移民の問題もそうです。いろいろな問題が国家を超えてしまっている。それを自らがリーダーであると思う個人が、自分の得意な分野で皆のために貢献することによって、世界の秩序を保っていく時代に、今、入ってきていると思います。

その中で、どのようにやっていけばいいのかというのは、もう国の DNA や従来の枠組みが前提ではない。むしろ個人がどのように何を実践するか、そのチャレンジの勇気をいかに持つかというところにかかってきているのではないか、というのが私の見方です。

アメリカ憲法から読み取る健全な DNA　秋田浩之

渡部：　私は、アメリカと中国の DNA が近いと言いましたが、近いからうまくいくなんて思っ

ていなくて、人間、似た者同士の方が、仲が悪かったりするわけです。むしろ、そこに日本がうまくやる隙があるのではないかぐらいに思っていたわけです。では秋田さん、これから日本はどうしていくべきでしょうか？

秋田： その前に、DNA セッションみたいになってしまって申し訳ないのですが、特に若い方々に誤解してほしくないので一言。北京に行き、生活していて思うのは、タクシーのお金の支払いとか、店の前とか、屋台とかでも、中国人がけんかをしている光景が時々あります。とても大きな声で、いよいよ殴り合いになるのではないかと思って見ていると、後ろに手を組んで絶対に自分からは殴らない。先に殴った方が大人ではない、そんな光景を何度も見ました。

声をどんどん大にして相手を威嚇するのですが、自分から殴って大げんかになっているというのはほとんど見たことがありません。日本人は将棋なので、出ていって相手の駒を殴るというか奪い、最後は王様まで刺し殺して勝ちというのが将棋じゃないですか。でも、中国の場合は碁に近い。相手の駒を全滅させるとか、王様を取るのではなくて、うまく勢力圏で囲んでいくというゲームを彼らはやっている。何が言いたいかというと、米中の対立がどんどん深まっても、戦争になるわけではないと思うのです。そこはもっと高度な碁のような形になると予想しています。

その中で、日本がどうするかという話ですが、論理的に言いますと、オプションは四つしかないと思います。まずは、アメリカと組むこと。昔だったら英国と日本は同盟を結びました。2 番目は中国に、勝ち馬に乗る。バンドワゴンと言いますけど、中国の影響圏を受け入れることです。今は想像できないかもしれませんが、これはおそらく日本が江戸時代の手前ぐらいまでやっていた戦略だと思います。圧倒的に強い中国に朝貢はしないが、事実上、勢力圏と共存しながらやっていく方法です。

三つ目は、一番駄目だと思うのですが、八方美人。要するに中国とアメリカを橋渡しするとか、正三角形論みたいなものですが、これは絶対破綻すると思います。四つ目は、自分がパワーになること。これは戦前に日本がやって失敗した策ですから、これも駄目です。おまけでいうと、江戸時代のような鎖国。生活水準を激しく落としてもよいと腹をくくって、ある意味で日本をデカップリングする。今の中国も、毛沢東時代ではないですけど、習近平さんは自分で自力更生だと言っていますよね。それに近いようなオプションもあるけど、これは現実的ではありません。

アメリカとの同盟を維持するか、究極的には中国の傘下を受け入れるか、米中の橋渡しみたいなのをやって八方美人でいくか、自立していくか。そうすると、答えは明らかに 1 番目しかないと思います。アングロサクソン、特に海洋国家であるアメリカと組んでいくしかない。ただし、そ

の組み方は今までとは変わると考えています。

先ほどから出ていますように、アメリカの力が下がったら、その分、日本や他の国で穴埋めするか、もしくは日本が他の国と組んで、それでアメリカの力を穴埋めするしか理論的にないのです。これはイデオロギーではなく、ほとんどポリティカルサイエンスと言いますか、科学ですね。議論の余地があまりない。逆に言うと、好き嫌いの余地があまりない選択として、こう言うとあまり面白くないのですが、日米同盟を維持しながら、さらにアメリカの力が落ちていくのを穴埋めしていくこと。非常につまらないようで、それが戦前の枢軸派が犯した間違いをわれわれが繰り返さない道だと思います。

◆ フロアとのディスカッション

渡部：　残り時間は、会場からのご意見、質問にお答えしていきましょう。

海老澤：　早稲田大学の海老澤です。7 月 21 日、22 日に「朝河貫一　―人文学の形成とその遺産―」ということで、大隈講堂でシンポジウムを開かせていただきました。そのときに安齋さん、浜田先生、渡部さんにも大変お世話になりまして、ここで篤く御礼申し上げたいと思います。今反省していますのは、われわれがやったのは少し堅すぎたかなと。今日は本当に楽しくて、最後まで聞き惚れているところであります。

ただ少し気にかかったことがありまして、阿川先生が朝河貫一はイェールで不遇・困窮であったためにアメリカに長くいたのだと言われましたが、これは間違いではないでしょうか？

朝河貫一の研究を検証していく場合、西洋中世史のため最後はラテン語が必要です。朝河貫一の膨大の資料がイェールのスターリング図書館に残されていますが、あれが理解できないのですね。先ほど阿川先生に質問しました朝河がアメリカに長くいた理由も、朝河がヨーロッパ中世史の講座をイェール大学で任されたことが、大きな要因ではないかと考えています。直接の教え子でないにしろ、ライシャワーのような人たちも結局学ぶようになったということであります。例えば日本人でコロンビア大学に行った角田柳作という方がいらっしゃいます。日本文学の先生なのですが、ほかの先生も多く、例えば今アメリカに行っている先生も結構、日本語を教えるということで行っている先生も多いのですけど、そこから一歩、朝河貫一は抜け出していました。ヨーロッパ中世史そのものをアメリカ人に教えるという立場にかなり早くなったのですね。それがやはり長くいる理由であったと考えております。

朝河貫一は素晴らしい能力を持っていたと思っております。例えば、大化の改新の研究。今日の最初の方のお話に出てきたかと思うのですが、若い頃、28 歳のときに書いた博士論文『大化改新』では、先ほど皆さんがお話しになっていた米中問題が、二つの比較として出てきます。一つはローマ帝国がゲルマンの諸地域に文明を与え、それとともにローマ帝国の軍事的圧力を受けたという問題があります。もう一つは、中国の律令体制を日本が学ぶ。そして仏教も入り、大いに中国文明を受け容れていきました。

しかし、ヨーロッパがローマの文明を受け容れられなかったように、日本もオリエンタル・デスポティズムは受け容れられませんでした。それが平安時代の後期あたりから日本に封建制が起こった状況と、ヨーロッパのローマ帝国に対する状況を、大化の改新の研究の中でうまく比較し示しております。

これは、ちょうど現代の米中関係のような話です。ワシントン駅に行くと、ケントゥリオというローマの百人隊長が守っています。アメリカ人には、ローマ帝国を継承しているという自負があり、実際そういう歴史的な役割を果たしているわけであります。そこのところを朝河貫一は見事に見抜いているのです。本日のお話も米中関係だけで終わらせるのではなくて、もう一度、朝河貫一の持っている能力、そして業績から学ぶということも考えていくと、さらに議論が深まるだろうと思いました。

渡部： 海老澤先生のご意見には、最後に阿川先生にコメントをいただきましょう。ほかにもどなたかご意見ご質問はありませんか。

安齋： 会場には『アメリカと中国』という本を出された松尾文夫さんがいらっしゃいますので、一言いただきたいですね。

松尾： 松尾でございます。私の考えを端的に申しますと、今、トランプのアメリカと中国は貿易戦争、戦争状態と言ってもおかしくない状況ですが、根っこでは米中はまだつながっているという考え方です。ですから、習近平はまだ完全に否定していませんでしょう。トランプもね。だから意外にディール外交が、まだ中国との関係でも活きているのではないかと思っています。秋田さんのもよく分かりますけど、私はそう思っています。

渡部： 補足させていただくと、松尾さんは米中の非常に長い歴史についての大作を書かれてい

ます。そこにはDNAの共通の部分というのか、DNAというよりも歴史的なつながりですね、相性みたいなものがあると書かれています。それにより連続されるという見方を取られています。ほかにもどなたかいらっしゃいますか。

来場者：　中国という言葉でいま議論されていますが、今、中国の場合は中国共産党が政権を取っています。一党独裁であるということが一つ。もう一つは太平洋戦争に至った経過について原因はいろいろあり、黄禍論、排日移民法の問題もありますが、一方でスターリンが主導したコミンテルンがあったわけです。

何を申し上げたいかと言うと、中国を語るときに大切なのは、中国共産党の政権がいつまで続くのかという問題。また、今は市場経済を導入していますけど、経済自体も破綻するはずだと思うわけです。市場経済を維持することと民主主義との関係が、かなり弾圧をしながらまだ続いていますが、いずれ行き詰まると考えます。その点はどうお考えでしょうか？

渡部：　このお二人のご意見に、まずは秋田さんにコメントいただきましょう。

秋田：　私は、松尾さんのおっしゃることに賛成した上で、それでもやはり米中は対立していくのではないかと見ています。おそらくデタントみたいなことはあると思います。例えばアメリカとソ連は、アメリカがベトナム戦争にはまり込んで、キッシンジャーやニクソンの時代にソ連との緊張緩和は進みましたよね。そのときには当然軍縮交渉もやっていますし、地域紛争が米ソの全面戦争にならないような危機管理ということでは協力しているわけです。

ですから今度、習近平とトランプが、G20によりアルゼンチンで会えば、おそらくそういうデタント、緊張をこれ以上高めないための貿易のディールはあるかもしれません。もしくは南シナ海とかいろいろなところでもうちょっとホットラインを活用しようという話にもなるでしょう。米中の国防大臣が今週シンガポールで会いましたが、そういう話をしています。ただ、デタントと米中接近は次元が違うのではないかというのが私の印象で、トレンドとしては対立の基調が続いていくのではないかというのが今のところの感想です。

渡部：　なるほど、瀬口さんはいかがですか？

瀬口：　松尾さん、秋田さんお二方の意見に賛同する部分があります。まず今、アメリカが中国

をどうしても許せないのは、アメリカの一極覇権体制に対するチャレンジと見ているからです。もともと日本が 1980 年代から 90 年代にかけて経済成長し、95 年のピーク時にはアメリカの GDP の 72%まで追いついたことがありました。そのときは米国にとって日本が経済的脅威だったのです。現在、中国が 60 数%まで来て、このままいくと 10 年後ぐらいにアメリカに追いつく可能性が出てきました。同盟国ではない中国は経済的脅威になり、同時に軍事的脅威にもなり得る、日本よりももっと厳しい脅威なのです。

でも、グローバル化している社会ですので、アメリカが関税を上げたら、アメリカ経済にもマイナス効果が出てくるのは時間の問題です。そのため、お互いが相手国を叩けない状態に入ってしまっているのが、今の関係なのです。したがってディールは必ず起こるでしょう。そういう意味で、私はお二人のおっしゃっていることは正しいと思います。

中国の市場経済が破綻するかという質問についてですが、中国の経済政策運営はこれまで結構うまくやってきています。行政的な手段で調整するものと市場経済の仕組みを活用するやり方とのバランスを取りながらやっているわけです。ただし、将来的な問題としては、市場経済として破綻するかどうかというより、共産党一党独裁体制が長期の失業増大やデフレーションに耐えられるのかというところが、非常に心配なテーマであります。そこに関しては、1990 年代以降に生まれた人たちがカギを握るでしょう。彼らは前の世代の中国人とはまったく違う考え方、すなわち日米欧諸国と同じグローバルスタンダードでものを考えます。彼らが 2030 年に 40 歳、2040 年には 50 歳になったとき、彼らが社会の中枢を担う状況を前提とした中国社会がどうなっていくのか。そして、経済状態が長期の不況に入る時にどういう化学反応を起こすのか。これはそのときになり、見てみないと分からないなというのが私の結論です。

渡部： では最後に阿川さん、お願いします。

阿川： 先ほど、朝河はイェールで不遇でなかったと、お前の言っていることは間違っていると、今日、初めて非常にうれしいご意見をいただきました。こうしたディスカッションこそもっと日本人はやらなきゃいけないだろうと思っています。

でも、質問をなさった先生の言っていることも違うと私は言いたい。なぜかというと、この表（資料スライド 3）を出したとき、ちゃんとご説明する時間がなかったのですが、朝河先生は親の反対を押し切ってアメリカに残ったんですよね。ただし、アメリカの方がずっと勉強ができるし、朝河先生が封建制の比較において過小評価されているというご意見にはまったく同感です。私は専

門でないのでよくは知らないのですが、ご説明いただいたところは、もっと勉強しなければいけないと思っています。

あるときから朝河は日本に帰りたくなります。それは奥さまが亡くなり、寂しくなったからです。しかし、大隈さんへ手紙を書くけれども、相手にされなくて仕方なく残った。別にイェールが悪かったわけでも、イェールが嫌だったわけでもありません。その手紙を見ると、とにかく学生が、博士課程が一人いるかいないかで、ここでやるよりも早稲田に帰った方が学問のためによいのだということを、何回も言っています。その手紙が 10 通ぐらいありますね。しかも 1920 年からイェールの財政が悪化したため、彼は降格されて給料が半分ぐらいに落ちてしまう。そのことで不平を言った 1936 年の次の年、これはイェールの偉いところですが、遅れたけども教授にしてくれます。ところが日米戦争が始まって、帰るということができにくくなってしまったのです。

もう一つ、早稲田に一生懸命就職しようとした理由は、ベラという日本で幼稚園を経営している女性と出会ったからです。意外にモテるんですよ、朝河先生は。ベラと会ってから、彼女が日本にいるから日本に帰りたいという思いが実に強くなる。ところが最後のアタックが足りなくてフラれてしまい、途端にアメリカに残ることにしたという経緯があります。

先ほど加藤大使がおっしゃいましたけど、熱なき光という手紙を、彼女と別れた後に未練がましく 1 通だけ書いています。「私は、歴史を熱なき光として照らしたい。でも、あなたには本当に熱があり照らす力があるからこんなに好きなんだ」と。

（ベラさんと別れ）一人になって寂しいとき、松本重治さんが「歴史学ってなんですか」と言ったら「君、それは熱なき光だよ」と答えた。これは、この女性のことを思い出しながら言っているらしいのが、朝河先生の実に人間的なところです。彼は、晩年まで年下の女性と文通していますので、私もそこは見習って頑張ろうと思っています（笑）。こういった点も、朝河先生の素晴らしいところです。私は先生の学問上の功績を疑っているわけでも、この人が嫌いなわけでもなくて、そういう人間的なところまで含めて、朝河先生って本当に素敵な方だなと思っています。

海老澤：　女性問題について、この後のレセプションでまだまだお話ができそうですね（笑）。

渡部：　今のお話を聞いていただいても分かる通り、朝河貫一という人には、まだまだ研究しなくてはならない要素がたくさんありますね。これはここ十数年で相当進んだことであり、ここにいらっしゃる方々のお陰だと思います。

日本へ帰らなかった朝河先生

没後70年記念シンポジウム
新しい太平洋時代――次世代に繋ぐ希望

同志社大学特別客員教授
阿川尚之

スライド 1

アメリカを探しに行った日本人
いつ渡ったか、いつ帰ってきたか

- 福澤諭吉 （1860, 1867）
- 新島襄 （1864-74）
- 新渡戸稲造 （1884-91）
- 松岡洋右 （1893-1902）
- 朝河貫一 （1895-）（2回一時帰国）
- 有島武郎 （1903-06）
- 永井荷風 （1903-07）
- 谷譲次 （1918-24）

スライド 2

朝河先生はなぜ
日本へ帰らなかったのか

- 予期しなかった大学院進学 （1899）
- ミリアムとの結婚 （1905-13）
- 大隈政権への参画失敗 （1914）
- 早稲田大学への就職失敗 （1920-24）
- ベラとの失恋 （1918-24）
- イェールでの不遇・困窮 （1936）
- 教授就任・真珠湾攻撃 （1937-1941）

スライド 3

朝河を軽視した日本
アメリカを過小評価する日本

- 朝河渡米と活躍のタイミング
- 日本は在アメリカの朝河を軽視
- 日本はアメリカを過小評価
- 日露戦争・排日移民法制定後の反米
- ニクソンショック・湾岸戦争後の反米
- トランプのアメリカを過小評価する危険
- 次世代に読んでほしい『日本の禍機』

スライド 4

最後に・・・

――― ありがとうございます。素晴らしいディスカッションでした。

最後に、私からも一言だけお話しさせてください。本日、皆さまのお話を伺っていて強く感じたのは、今こそ「日本の禍機」だということです。日米中間をどうすべきか、われわれはアメリカについて一体何をしたいのか、何を守りたいのか、守るべき世界というものは何なのか。今これらを考えることこそ『日本の禍機』で、朝河さんが考えられたことと非常に通じると思います。

最初、私は、朝河さんのように生きられるだろうかと言ったときに、自信がないと申し上げました。今でも自信がありません。ただ思うのは、圧倒的にあの頃と違うのは、私たちは自由です。中国の学者たちとも違います。しかも私たちは豊かです。さらに、私たちには政府を選ぶ選挙権もあります。そう考えると、朝河さんのようにできるかしらと思っている私というのは、実はものすごく甘えているのではないかと思いました。今日はたくさんのことを学ばせていただきました。どうも本当にありがとうございました。

あとがき

講演録を読み、改めてご登壇いただいた方々の見識の高さに感服しました。またこの講演録は日本財団様からの助成により完成しました。さらに、明石康さん、浜田宏一先生のほか、当初から発起人に加わって支援してくれた伊藤雅俊さん、石井茂さん、武樋政司さん、協賛してくれたANAホールディングス株式会社、公益財団法人オリックス宮内財団、共催者として尽力してくれた国際文化会館の皆さん、実行委員会事務局長としての重責を見事に果たしてくれた有村一郎さんに、心から御礼を申し上げます。

数年前に浜田先生とシンポジウムの開催を約束したときから、シンポジウムの内容を充実したものにするだけでなく、それらを若い世代に引き継ぎ、第二、第三の朝河貫一が生まれてくれる土壌造りにしたいと希望してきただけに、この講演録が広くそのように活用されていくことを願っています。読者の皆さんのご意見をいただければ幸いです。

どうもありがとうございました。

2019年3月

朝河貫一博士没後70年記念プロジェクト実行委員長

安齋　隆

朝河貫一博士没後70年記念シンポジウム講演録

発　　行	2019年3月
発 行 者	朝河貫一博士没後70年記念プロジェクト実行委員会 〒100-0005　東京都千代田区丸の内一丁目6番1号 丸の内センタービルディング　株式会社セブン銀行内 Tel: 03-3211-3040 公益財団法人国際文化会館 〒106-0032　東京都港区六本木五丁目11番16号 Tel: 03-3470-3211 Web: www.i-house.or.jp
発行責任者	朝河貫一博士没後70年記念プロジェクト実行委員会　実行委員長　安齋　隆
編 集 担 当	朝河貫一博士没後70年記念プロジェクト実行委員会　事務局長　有村一郎 公益財団法人国際文化会館　常勤理事　丸山　勇
印刷・製本	株式会社エイチ・ユー

「非売品」「禁無断転載」

この講演録のPDF版および電子書籍版(EPUB形式)は、以下のURLから無料でダウンロードできます。
https://www.i-house.or.jp/programs/publications/reports/

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

朝河貫一博士没後70年記念
プロジェクト実行委員会

公益財団法人 国際文化会館
International House of Japan